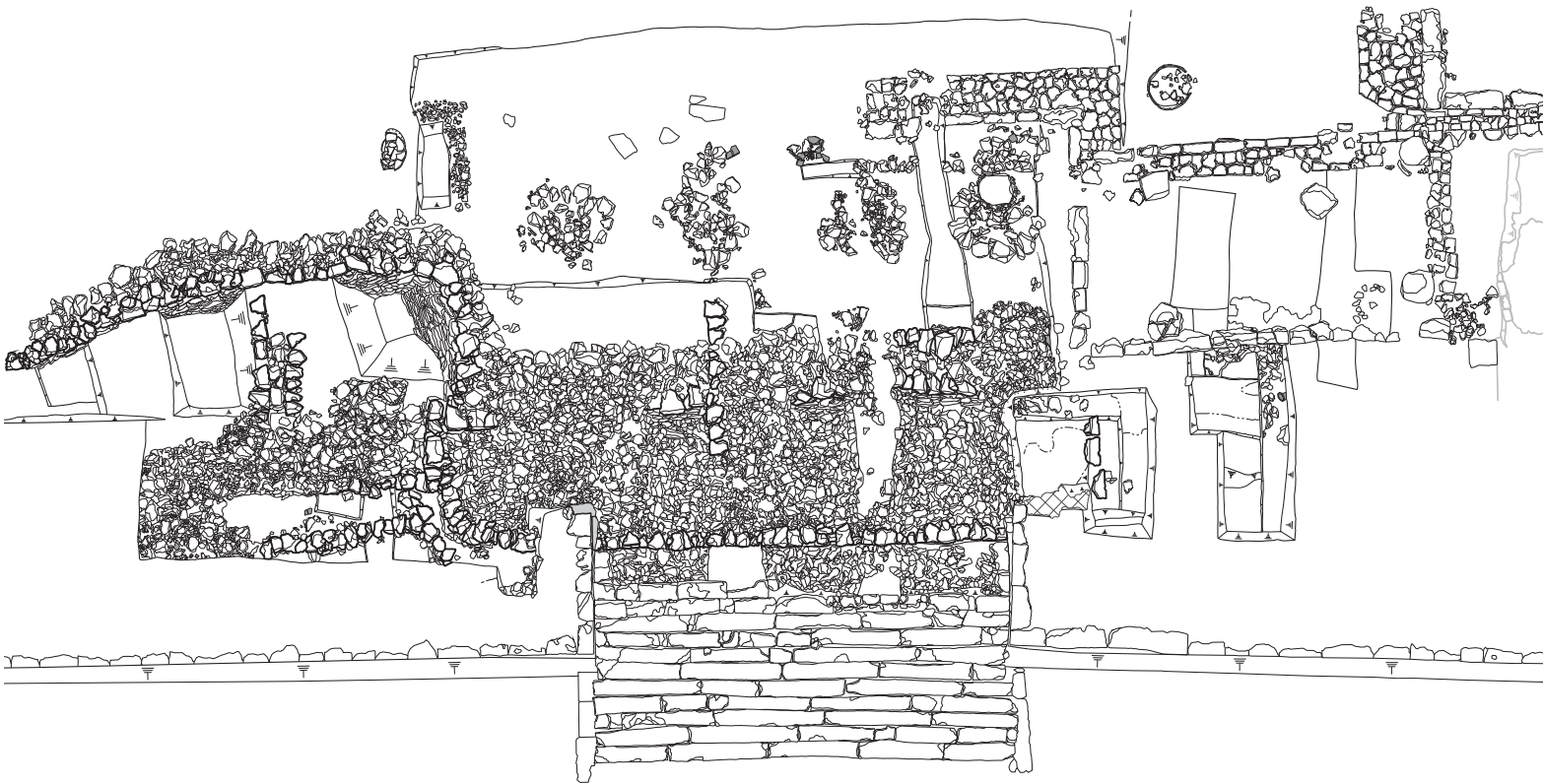


円覚寺跡(3)

—三門地区の遺構確認調査報告書—

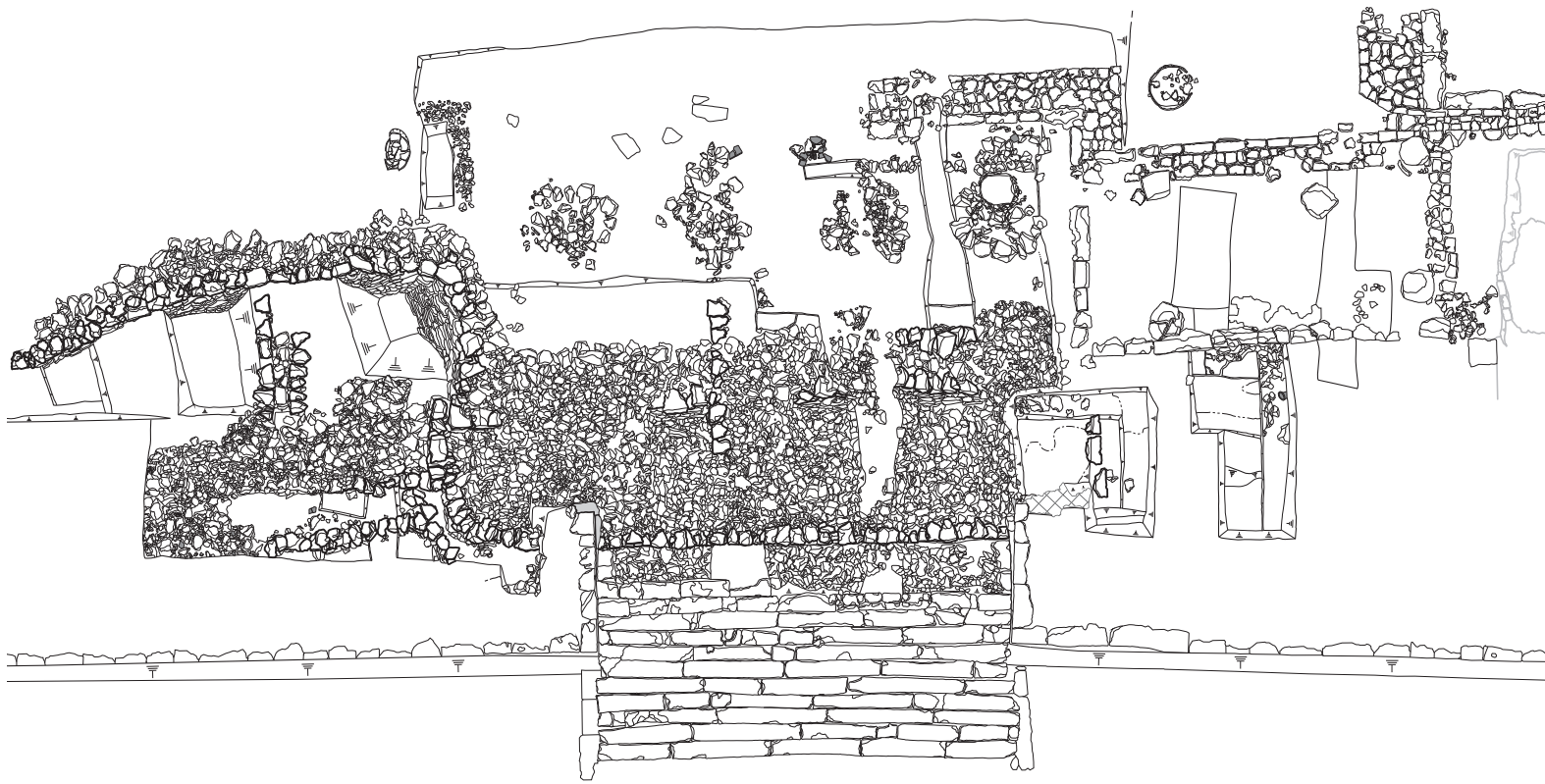


令和3(2021)年 2月

沖縄県立埋蔵文化財センター

円覚寺跡(3)

—三門地区の遺構確認調査報告書—



令和3(2021)年 2月

沖縄県立埋蔵文化財センター



巻頭図版1 三門地区 遺構検出状況(東から)



巻頭図版2 三門地区 遺構検出状況(北西から)



巻頭図版3 三門地区 石積1と造成土(トレンチ10内)



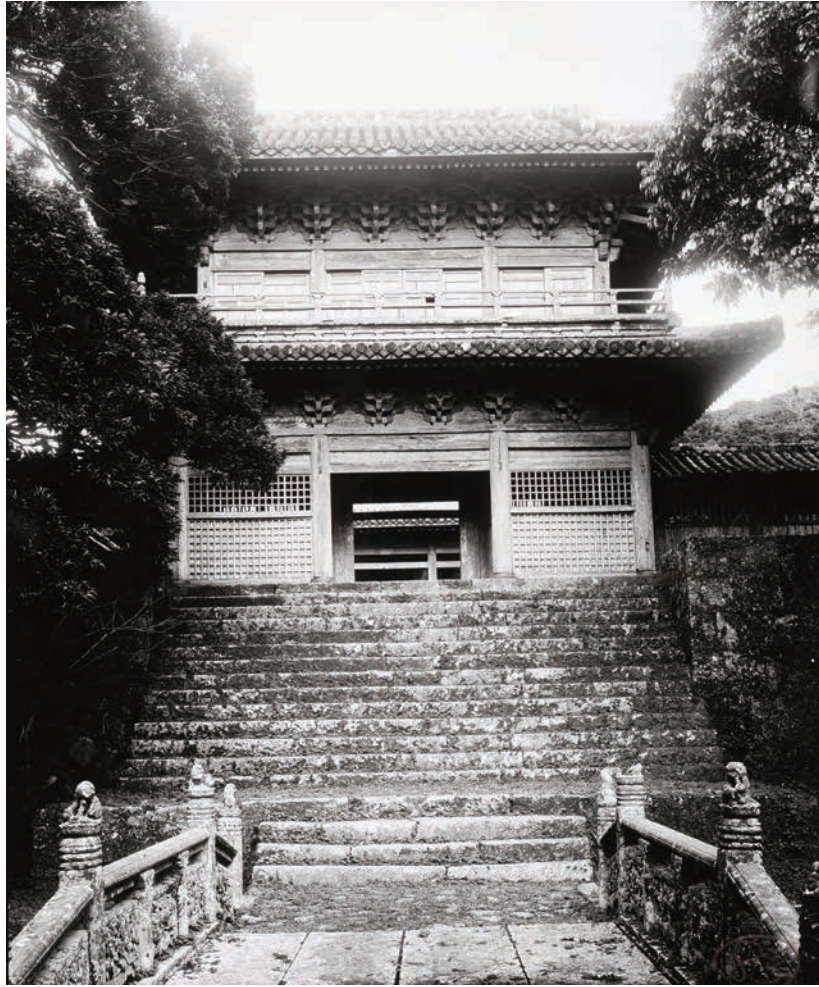
巻頭図版4 上：三門地区全景（北から）
下：同（北から）



巻頭図版5 上：石積1（土留め）検出状況（西から）
下：石積2（三門基壇）検出状況（北西から）



巻頭図版 6 上：根固め、礎石検出状況（西から）
下：三門基壇石列検出状況（東から）



卷頭図版7 上：円覚寺 三門（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）
下：円覚寺 三門現況（西から）



巻頭図版 8 上：円覚寺 三門背面（沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵）
下：三門地区 遺構検出状況（南東から）

序

本報告書は、沖縄県教育委員会が文化庁の補助を受け、平成20～22、25、28年度に実施した円覚寺跡三門地区における遺構確認調査の成果をまとめたものです。

沖縄県教育委員会では、平成26年度より三門の復元整備事業に取り組んでおり、復元整備に先立って実施した発掘調査では、三門基壇に関連する石列や礎石を据える根固め石などが確認されました。それにより、三門基壇の位置や規模に関する基礎資料を得ることができました。

また、地中に築かれた土留めの石積みが確認されたことにより、円覚寺の造営における土地造成の様相が明らかになるなど、重要な発見となりました。

このような成果をまとめた本報告書が、沖縄の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

末筆になりましたが、本事業を進めるにあたり、丁寧な指導を頂きました文化庁並びに円覚寺跡復元整備委員会をはじめ、発掘調査・資料整理作業にあたり、御指導、御助言、御協力を頂いた諸機関及び関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和3(2021)年 2月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 瑞慶覧 勝利

例 言

1. 本報告書は、史跡円覚寺跡の復元整備事業に伴い実施した、三門地区における遺構確認調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査及び資料整理業務は、沖縄県教育庁文化財課の指導の下、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。両業務とも、文化庁の補助事業である。
3. 発掘調査は、平成20(2008)～平成22(2010)年度、平成25(2013)年度、平成28(2016)年度に実施した。資料整理作業については、平成25(2013)年度、平成29(2017)年度、令和元(2019)年度に実施し、令和2(2020)年度に印刷製本を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の座標値は、世界測地系に基づくものである。
5. 発掘調査及び資料整理作業にあたり、下記の諸氏・機関に指導・助言をいただいた。
発掘調査 福島駿介(琉球大学名誉教授：円覚寺跡復元整備委員会委員長)
 当真嗣一(前沖縄考古学会会長)
 田中哲雄(元東北芸術工科大学教授)
 上原 静(沖縄国際大学教授)
 田名真之(沖縄県立博物館・美術館長)
 清水真一(徳島文理大学教授)
 府川直人(千葉職業能力開発大学校准教授)
6. 本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの方々の協力のもと金城貴子が行った。
7. 本書に掲載した調査時の写真撮影は、各年度の調査担当者が行い、出土遺物の写真撮影は領家範夫、伊禮若奈が行った。
8. 発掘調査で得られた遺物、実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターで保管している。

目次

巻頭図版

序

例言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の方法と成果	14
第1節 調査の方法	14
第2節 層序	16
第3節 三門地区の遺構と遺物	22
1 遺構	24
2 遺物	59
第4節 表土・攪乱層の遺物	73
1 中国産青磁	73
2 中国産白磁	73
3 中国産青花	74
4 中国産褐釉陶器	78
5 その他の中国産陶磁器	78
6 タイ産褐釉陶器	79
7 本土産磁器	79
8 本土産陶器	80
9 沖縄産施釉陶器	82
10 沖縄産無釉陶器	83
11 石器・石製品	86
12 玉類	89
13 貝製品	89
14 漆製品	90
15 円盤状製品	90
16 煙管	91
17 銭貨	91
18 金属製品	93
19 鉄製品	93
20 瓦	94
21 埴	104
22 レンガ	111
23 プラスチック製品	111
24 磚子	112
25 ガラス製品	112
26 木材片	113
第5節 自然遺物	114
1 脊椎動物遺体	114
2 貝類遺体	116
第4章 総括	120
引用・参考文献	124
報告書抄録	125

図目次

第1図	遺構全体図	7	第34図	三門基壇想定図	55
第2図	沖縄本島の位置	9	第35図	石積1～4	56
第3図	円覚寺跡の位置及び周辺の遺跡	11	第36図	根固め石・溝状遺構・埋甕	56
第4図	上：円覚寺跡の史跡指定範囲 下：首里古地図に見る調査区	12	第37図	石積5・6	57
第5図	円覚寺平面図	13	第38図	瓦溜まり	57
第6図	三門地区調査箇所	15	第39図	漆製品の出土状況 a,b	61
第7図	三門地区平面図	17	第40図	三門地区出土遺物1	67
第8図	南壁・西壁土層断面図	18	第41図	三門地区出土遺物2	68
第9図	北壁土層断面図	19	第42図	三門地区出土遺物3	69
第10図	三門地区トレンチ設定箇所	22	第43図	中国産青磁	73
第11図	三門地区遺構平面図	23	第44図	中国産白磁	74
第12図	石列1、南側門廊	24	第45図	中国産青花	76
第13図	トレンチ29土層断面図、石列1断面図	25	第46図	中国産褐釉陶器	78
第14図	石列1、南側門廊	26	第47図	本土産陶器	81
第15図	南側門廊土層図	27	第48図	沖縄産施釉陶器	82
第16図	根固め石	29	第49図	初期沖縄産無釉陶器	84
第17図	三門地区遺構平面図	30	第50図	沖縄産無釉陶器	85
第18図	三門地区遺構平面図	31	第51図	石製品	87
第19図	根固め石断面図	32	第52図	玉類	89
第20図	石積1～6	34	第53図	貝製品	89
第21図	三門地区遺構平面図	35	第54図	円盤状製品	90
第22図	石積1～6	36	第55図	煙管	91
第23図	石積1～6立面図	37	第56図	銭貨	92
第24図	三門地区遺構平面図	41	第57図	瓦1	96
第25図	トレンチ20、21土層断面図	42	第58図	瓦2	97
第26図	石積1・2	43	第59図	瓦3	98
第27図	石積1・2断面図、造成土堆積状況	44	第60図	瓦4	99
第28図	三門総門間断面図	48	第61図	塼1	105
第29図	埋甕	49	第62図	塼2	106
第30図	石列2	50	第63図	塼3	107
第31図	溝状遺構	51	第64図	プラスチック製品	111
第32図	瓦溜まり1、2	52	第65図	1950年銘入りコンクリート基礎	120
第33図	集石	54	第66図	円覚寺跡全景(西から)	123

図版目次

- 巻頭図版 1 三門地区 遺構検出状況(東から)
巻頭図版 2 三門地区 遺構検出状況(北西から)
巻頭図版 3 三門地区 石積 1 と造成土(トレンチ10内)
巻頭図版 4 上：三門地区全景(北から)
下：同(北から)
巻頭図版 5 上：石積 1 (土留め)検出状況(西から)
下：石積 2 (三門基壇)検出状況(北西から)
巻頭図版 6 上：根固め、礎石検出状況(西から)
下：三門基壇石列検出状況(東から)
巻頭図版 7 上：円覚寺 三門(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)
下：円覚寺 三門現況(西から)
巻頭図版 8 上：円覚寺 三門背面(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)
下：三門地区 遺構検出状況(南東から)

図版 1	造成土堆積状況 1	20	図版 25	沖縄産無釉陶器	86
図版 2	造成土堆積状況 2	21	図版 26	石製品	88
図版 3	南側門廊造成土堆積状況	28	図版 27	玉類	89
図版 4	根固め石	33	図版 28	貝製品	89
図版 5	石積 1 (三門北側)	38	図版 29	漆製品	90
図版 6	石積 2'・3・4	39	図版 30	円盤状製品	90
図版 7	石積 5・6	40	図版 31	煙管	91
図版 8	石積 1 (三門基壇部)	45	図版 32	銭貨	92
図版 9	石積 2	46	図版 33	金属製品	93
図版 10	三門階段	47	図版 34	鉄製品	93
図版 11	トレンチ 29・31	53	図版 35	瓦 1	100
図版 12	三門地区遺構検出状況	58	図版 36	瓦 2	101
図版 13	三門地区出土遺物 1	70	図版 37	瓦 3	102
図版 14	三門地区出土遺物 2	71	図版 38	瓦 4	103
図版 15	三門地区出土遺物 3	72	図版 39	塼 1	108
図版 16	中国産青磁	73	図版 40	塼 2	109
図版 17	中国産白磁	74	図版 41	塼 3	110
図版 18	中国産青花	77	図版 42	レンガ	111
図版 19	中国産褐釉陶器	78	図版 43	プラスチック製品	111
図版 20	その他の中国産陶磁器	79	図版 44	碇子	112
図版 21	本土産磁器	80	図版 45	ガラス製品	113
図版 22	本土産陶器	81	図版 46	木材片	113
図版 23	沖縄産施釉陶器	83	図版 47	脊椎動物遺体	115
図版 24	初期沖縄産無釉陶器	84	図版 48	貝類遺体	118

表目次

第1表	トレンチ名称一覧	6	第25表	玉類観察一覧	89
第2表	三門地区遺物出土状況 a	62	第26表	貝製品観察一覧	89
第2表	三門地区遺物出土状況 b	63	第27表	漆製品観察一覧	90
第2表	三門地区遺物出土状況 c	64	第28表	円盤状製品観察一覧	90
第3表	三門地区遺物観察一覧 a	65	第29表	煙管出土状況一覧	91
第3表	三門地区遺物観察一覧 b	66	第30表	煙管観察一覧	91
第4表	中国産青磁出土状況一覧	73	第31表	銭貨出土状況一覧	91
第5表	中国産青磁観察一覧	73	第32表	銭貨観察一覧	91
第6表	中国産白磁出土状況一覧	73	第33表	金属製品出土状況一覧	93
第7表	中国産白磁観察一覧	74	第34表	鉄製品出土状況一覧	93
第8表	中国産青花出土状況一覧	74	第35表	鉄製品観察一覧	93
第9表	中国産青花観察一覧	75	第36表	瓦出土状況一覧	94
第10表	中国産褐釉陶器出土状況一覧	78	第37表	瓦観察一覧	95
第11表	中国産褐釉陶器観察一覧	78	第38表	埴出土状況一覧	104
第12表	その他の中国産陶磁器出土状況一覧	79	第39表	埴観察一覧	104
第13表	本土産磁器出土状況一覧	79	第40表	その他遺物出土状況一覧	111
第14表	本土産磁器観察一覧	80	第41表	レンガ観察一覧	111
第15表	本土産陶器出土状況一覧	81	第42表	碇子出土状況一覧	112
第16表	本土産陶器観察一覧	81	第43表	ガラス製品観察一覧	112
第17表	沖縄産施釉陶器出土状況一覧	82	第44表	脊椎動物遺体種名一覧	114
第18表	沖縄産施釉陶器観察一覧	82	第45表	脊椎動物遺体出土状況一覧	114
第19表	初期沖縄産無釉陶器出土状況一覧	83	第46表	沖縄における貝類の生息場所類型	116
第20表	初期沖縄産無釉陶器観察一覧	83	第47表	貝類遺体の分類と生息場所類型	116
第21表	沖縄産無釉陶器出土状況一覧	85	第48表	貝類出土状況一覧(巻貝)	117
第22表	沖縄産無釉陶器観察一覧	85	第49表	貝類出土状況一覧(二枚貝)	117
第23表	石器・石製品・石材出土状況一覧	86	第50表	遺物出土状況一覧(全体)	119
第24表	石製品観察一覧	86			

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

第二尚氏の菩提寺であった円覚寺跡の境内には、数多くの建造物があり、これらの建物群はその伽藍配置等を含めて学術的な価値が高いものとされ、総門をはじめ、三門、仏殿、龍淵殿、鐘楼、放生橋等昭和8(1933)年には旧国宝(建造物)に指定されていた。しかしながら、先のアジア・太平洋戦争により境内を囲う石牆の一部を残し、建物等は灰燼に帰した。

また、戦後の昭和25(1950)年には首里城内を中心とした一帯に琉球大学が設置され、円覚寺跡内には教官宿舎が建設された。教官宿舎が移築された昭和40(1965)年には、境内背後の小高い丘陵(円覚寺松尾^{マ-チュー})を造成してグラウンドが建設された。

一方、終戦後に発足した琉球政府文化財保護委員会が中心となり、昭和32(1957)年に園比屋武御嶽石門、昭和33(1958)年に守礼門が復元された。円覚寺跡についても、昭和41(1966)年に放生橋、昭和43(1968)年に総門、さらには放生橋から三門に上がる石段等が整備され、昭和47(1972)年の本土復帰に伴って、国の史跡に指定された。

琉球大学の移転が完了した昭和57(1982)年以降、首里城をはじめとする周辺の文化遺産の復元整備が進むと、円覚寺跡についても主要部分の整備を望む声が高まった。そのような状況を受けた沖縄県教育委員会は、遺構の保存状況の確認調査が必要と判断し、平成9(1997)年～平成13(2001)年までの5か年間、国からの補助を受け、沖縄県立埋蔵文化財センター(以下、県埋文センター)による遺構確認調査を実施した。

調査の結果、全域において遺構の保存状況を把握できた他、残存遺構のほとんどが1728年の上・下御照堂改修時以降のものであることが判明した。

発掘調査が終了した翌年の平成14(2002)年度からは、10か年計画で円覚寺跡保存修理工事が始まり、比較的残存状況が良好であった円覚寺跡の外周を囲う石牆の復元整備から実施した。整備にあたっては、考古学、歴史学、土木、建築、造園、史跡整備など各分野の専門家を構成員とする整備委員会を組織し、当委員会にて整備のあり方について議論を重ね、整備方針を決めている。

平成18年度からは、前回未調査箇所における石牆の遺構確認調査を実施し、その成果を基に、平成25年度まで継続して復元整備に取り組んできた。

平成26年度からは、平成16年度に県教育委員会が作成した「円覚寺跡基本整備計画策定報告書」に基づいて「円覚寺跡三門基本設計業務」に着手し、三門の復元に向けた整備事業に移行する。発掘調査はこれらの方針に沿う形で実施している。

史跡円覚寺跡の発掘調査にあたり、各年度とも調査を開始する前には文化財保護法第125条第1項の規定に基づく申請が必要となるため、県文化財課から文化庁長官へ現状変更許可申請を提出し、文化庁長官から現状変更許可の通知を受けた上で調査に着手した。

なお、調査で得られた遺物の数量などについては、年度毎に県文化財課へ発見報告を行っている。

第2節 調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成20(2008)～平成22(2010)年度、平成25(2013)年度、平成28(2016)年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、平成25(2013)年度、平成29(2017)年度、令和元(2019)年度に実施し、令和2(2020)年度に報告書を刊行した。その体制は次のとおりである(職名は当時のもの)。

平成20(2008)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会
教育長 仲村守和

事業所管 沖縄県教育庁文化課
課長 千木良芳範
記念物班班長 島袋 洋
指導主事 宮里 潤

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
参事兼所長 名嘉政修
総務班班長 嘉手苺 勤
主査 山田恵美子
調査班班長 岸本義彦
主任 仲座久宜

発掘調査作業員 安次富マサ子、大嶺愛子、川上益子
栗山盛義、樋口光子、比嘉賀商
又吉志麻子、松門 孝、宮城悦子
安村重保

調査協力者 岸本竹美、大堀皓平、本村麻里衣

平成21(2009)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会
教育長 金武正八郎

事業所管 沖縄県教育庁文化課
課長 大城 慧
記念物班班長 島袋 洋
指導主事 宮里 潤

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
参事兼所長 玉榮 直
総務班班長 嘉手苺 勤
主任 村吉由美子
調査班班長 金城亀信
主任 山本正昭

発掘調査作業員 安里勝則、大嶺愛子、久我谷溪太
呉我フジ子、砂辺理恵、玉城初美
中塚末子、比嘉洋子、松門 孝

安村重保、吉田 洋
與那嶺勢津子

調査協力者 岸本竹美、大城 歩、山口こずえ

平成22(2010)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会
教育長 金武正八郎

事業所管 沖縄県教育庁文化課
課長 大城 慧
記念物班班長 島袋 洋
指導主事 宮里 潤

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 守内泰三
総務班班長 嘉手苺 勤
主査 本永 恵
主査 恩河朝子
主事(臨任) 玉城飛鳥
調査班班長 金城亀信
主任 新垣 力
専門員 金城貴子

発掘調査作業員 上江洲由昇、浦崎京子、大嶺愛子
比嘉洋子、樋口光子、安村重保
與儀良太、與那嶺勢津子

調査協力者 岸本竹美、大城 歩、瑞慶覧長順
長嶺 優

平成25(2013)年度(発掘調査・資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
教育長 諸見里 明

事業所管 沖縄県教育庁文化財課
課長 新垣悦男
記念物班班長 盛本 勲
主任専門員 山本正昭

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 下地英輝
副参事 島袋 洋
総務班班長 新垣勝弘
主査 西島康二
調査班班長 金城亀信
主任 金城貴子
専門員(臨任) 山城 勝

文化財調査嘱託員 井上奈々、宮里知恵

発掘調査作業員 浦崎京子、大嶺愛子、當眞 哲
中村フサ子、比嘉洋子、松門 孝

安村重保、與那嶺勢津子
調査協力者 比嘉優子、玉城 綾、新屋敷小春
資料整理 伊集夏子、市川里恵、喜屋武朋子
嘱託員 宮城初枝

平成28 (2016)年度(発掘調査)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 平敷昭人
事業所管 沖縄県教育庁文化財課
 課長 萩尾俊章
 記念物班班長 上地 博
 指導主事 金城 篤
 主任専門員 知念隆博
調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
 所長 金城亀信
 副参事 濱口寿夫
 総務班班長 比嘉智博
 主査 比嘉 睦
 調査班班長 仲座久宜
 主任 金城貴子
 専門員 田村 薫

史跡・埋蔵文化財調査員 大屋匡史、奥平大貴

発掘調査作業員 大田安和、神里純子、古我知 勇
 中田邦子、比嘉賀商、平安名哲子
 安村重保、武石瑠那

平成29 (2017)年度(資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 平敷昭人
事業所管 沖縄県教育庁文化財課
 課長 萩尾俊章
 記念物班班長 上地 博
 指導主事 金城 篤
 主任専門員 知念隆博
調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
 所長 金城亀信
 副参事 濱口寿夫
 総務班班長 比嘉智博
 主幹 大城喜信
 調査班班長 仲座久宜
 主任 金城貴子

埋蔵文化財資料整理員 金城礼子、宮城初枝

令和元(2019)年度(資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 平敷昭人
事業所管 沖縄県教育庁文化財課
 課長 濱口寿夫
 記念物班班長 仲座久宜
 主幹 上地 博
調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
 所長 城田久嗣
 副参事 真栄田義光
 総務班班長 池田みき子
 主幹 大城喜信
 調査班班長 中山 晋
 主任 金城貴子
埋蔵文化財資料整理員 上原園子、小渡直子

令和2 (2020)年度(報告書刊行)

事業主体 沖縄県教育委員会
 教育長 金城弘昌
事業所管 沖縄県教育庁文化財課
 課長 諸見友重
 記念物班班長 仲座久宜
 主幹 上地 博
調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター
 所長 瑞慶覧勝利
 副参事 真栄田義光
 総務班班長 池田みき子
 主幹 大城喜信
 調査班班長 中山 晋
 主任 金城貴子

整理協力者 新垣裕子、新垣利津代、具志みどり
 平良貴子、譜久村泰子、又吉純子
 目島直美、慶田秀美、宮平笑里子
 孔 智賢、嶺井幸恵、宮城かの子
 嘉数 渚、工藤孝美、安里綾子
 儀間真章、上田麻紀子

整理指導協力者 漆製品 上江洲安亨(一般財団法人沖縄美ら島財団)

動物遺体 丸山真史(東海大学講師)
 貝類遺体 黒住耐二(千葉県立中央博物館)

業務委託 自然科学分析 パリノ・サーヴェイ(株)

第3節 調査の経過

(1)発掘調査

今回成果報告を行うのは、三門地区の発掘調査成果である。調査は複数年に及ぶため、年度別に経過を記述する。

平成20（2008）年度

現地調査は、平成20(2008)年7月10日から9月までの約2か月間で、田辺泰氏作成の円覚寺平面図(『琉球建築』1937)(第5図)にみえる北側石牆の通用門から延びる境内を区画する遺構の確認を目的として三門北側一帯に調査区を設定した(面積約288m²)。

その他、右掖門西側における遺構確認を目的として「右掖門西地区」にも調査区を設定し、発掘調査を行った。調査面積は計約300m²である。

調査の結果、三門北地区では目的とした区画遺構は見つからなかったが、地中より土留めの石積1を検出するとともに、三門に付属する埋甕や溝状遺構などを確認した他、円覚寺の創建段階に相当する造成土の堆積状況を確認した。

7月 10日 重機を使用して表土掘削に着手。地表面より約1m下から琉球大学の構造物を検出。調査区一帯は大きく攪乱を受けていることを確認。

15日 右掖門西地区トレンチ16の表土掘削に着手。遺構は確認されず、即日埋戻し。

25日 石積1の上部を検出。

29日 石積1の範囲を確認。根石確認のためにトレンチ9～11を設定し、人力掘削。石積1の西側で溝状遺構を検出。

31日 トレンチ9内約1.9m下で小礫層を検出。

8月 1日 石積1の根石を確認できないまま、約2mの深さに達したところで掘り下げ終了。

7日 トレンチ7内約2m下でクチャの基盤層を検出。

14日 遺構検出状況の撮影。

18日 トレンチ12、13を設定後、掘削

着手。

19日 トレンチ14を設定、掘削着手。

21日 トレンチ13より漆塗膜片検出。

26日 埋甕検出、半截。

28日 調査区全景写真撮影、埋甕の実測作業。

9月 石積1の実測作業。

平成21（2009）年度

現地調査は、平成21(2009)年7月1日から9月9日までの約2か月間で、前年度に三門北側で検出した土留めの石積1と溝状遺構の西側続きの検出を目的として、前年度の調査区に隣接する箇所調査区を設定した(面積113m²)。

その他、円覚寺北側における地山面の確認を目的として「右掖門地区」、円覚寺南側において石牆の根石が未確認な箇所での確認を目的として「南側石牆地区」の三つの地区に計3か所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査面積は計120m²である。

調査の結果、三門北地区では前回確認された土留めの石積1が三門地区へ延びることが判明した他、近世段階における三門の部分的な改修の痕跡を確認した。

7月 1日 除草作業。

21日 右掖門地区トレンチ17の表土掘削に着手。

22日 三門北地区の表土掘削に着手。

24日 トレンチ17の実測作業、写真撮影終了後、埋戻し。前年度検出した石積1の再検出に着手。

30日 南側石牆地区での調査を開始。

8月 10日 三門北地区の表土掘削。溝状遺構の西側で集石を検出。

13日 集石の検出状況撮影。石積2'～4の検出。

14日 石積5の検出。

17日 石積6の検出。

19日 調査区全景写真撮影。

21日 実測作業開始。

25日 円覚寺跡復元整備委員会による現地視察。

9月 9日 現地作業終了。

平成22 (2010)年度

現地調査は、平成22(2010)年7月1日から9月8日の約2か月間である。平成21年度第2回円覚寺跡保存修理工事整備委員会において、将来の三門の復元整備にあたり、整備レベルを検出された遺構を生かした整備とするか、遺構保護のため、嵩上げて整備するかの検討が必要との意見を受けて、往時の三門の階段遺構確認を目的として、三門地区に2か所の調査区を設定した(面積18.8㎡)。

その他、右掖門東側における遺構確認を目的として「右掖門地区」、石牆の根石が未確認な箇所での確認を目的として「南側石牆地区」の三つの地区に計5か所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査面積は計約70㎡である。

調査の結果、三門地区では戦後に設置された三門階段の下から石積2を検出した他、三門階段遺構と三門礎石との関係性より、三門基壇高について検討を行った。

- | | | |
|----|-----|---|
| 7月 | 1日 | 除草作業。 |
| | 5日 | 右掖門地区トレンチ19の表土掘削に着手。約20cm下より石畳を検出。三門階段の実測作業。 |
| | 7日 | 三門地区トレンチ20、21の表土掘削及び三門階段を上から三段取り外し。 |
| | 12日 | 右掖門の根石を検出。 |
| | 16日 | トレンチ19北側で地山のクチャを検出。トレンチ20、21で石積2を検出。 |
| | 28日 | 南側石牆地区トレンチ22、23を設定後、重機を使用して表土掘削に着手。約70cm下より石積を確認。 |
| 8月 | 3日 | 円覚寺跡復元整備委員会による現地視察。 |
| | 4日 | トレンチ19遺構検出状況の撮影。 |
| | 12日 | トレンチ22、23遺構検出状況の撮影。 |
| | 17日 | トレンチ20遺構検出状況の撮影。 |
| | 19日 | トレンチ21遺構検出状況の撮影。 |
| | 27日 | 高所作業車を使用して調査区全景写真撮影。 |
| 9月 | 3日 | 遺構実測作業終了。 |

- | | |
|----|---------------------|
| 8日 | 図面整理後、修正及び追加での図面作成。 |
|----|---------------------|

平成25 (2013)年度

現地調査は、平成25(2013)年7月1日～10月1日の約3か月間で、三門復元に向けた基礎資料を得る目的で、三門地区に4か所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査面積は約140㎡である。

調査の結果、三門の柱配置の手掛かりとなる根固め石の検出と、平成20～22年度に見つかった土留めの石積1と石積2の構築状況が明確になったことで、三門一帯における造成事業の一端が判明した。

- | | | |
|-----|-----|---------------------------------|
| 7月 | 1日 | 除草作業、基準点移動。 |
| | 4日 | 表土掘削及び三門階段を上から三段取り外し。 |
| | 8日 | 人力掘削開始。 |
| | 9日 | 裏込め石を検出。 |
| | 16日 | 根固め石を検出。 |
| | 18日 | 遺構検出状況の撮影。 |
| | 22日 | トレンチ25の掘り下げ、石積1の検出。 |
| | 24日 | トレンチ27の掘り下げ、石積1の検出。 |
| | 26日 | トレンチ28の掘り下げ。 |
| | 29日 | トレンチ26の掘り下げ、石積1の検出。
根固め5の検出。 |
| 8月 | 5日 | 遺構検出状況の撮影。 |
| | 7日 | 遺構実測作業。 |
| | 26日 | 円覚寺跡復元整備委員会による現地視察。 |
| | 28日 | 高所作業車を使用して調査区全景写真撮影。 |
| 9月 | 2日 | 遺構実測作業。 |
| | 30日 | 現地作業終了。 |
| 10月 | 1日 | 現場養生。 |

平成28 (2016)年度

現地調査は、平成28(2016)年7月1日～9月26日の約3か月間で、三門南側の遺構確認を目的として、3か所にトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査面積は約30㎡である。

調査の結果、三門基壇の石列を検出し、さらに石積2と繋がる事が判明した。これにより、従来土留めの石積みと考えていた石積2は、三門基壇の西縁をなすことが明らかになり、三門基壇の位置や規模について重要な手掛かりを得た。また、瓦溜まり遺構が2基見つかかり、近代以降に三門の改修が複数回行われた可能性が新たに判明した。

9月24日(土)には、一般の方を対象とした現地説明会を午前、午後それぞれ2回の計4回開催した。当日は、約140名の方々が来場し、三門復元への期待の声が多く寄せられた。

- 7月 1日 除草作業、基準点移動。
- 13日 調査区設定。
- 14日 表層探査。
- 19日 トレンチ29、30の表土掘削に着手。
- 22日 トレンチ29で石列検出。
- 25日 トレンチ29、30で経層探査。
- 26日 平敷教育長、與那嶺教育指導統括官による現場視察。
- 8月 4日 トレンチ31表層探査。
- 10日 トレンチ31の表土掘削着手。
- 12日 トレンチ30掘削終了。
- 15日 根固め8周辺の検出。
- 16日 根固め8周辺の検出状況撮影、トレンチ29瓦溜まり検出、トレンチ31拡張部の磁気探査。
- 19日 円覚寺跡復元整備委員会による現場視察。
- 22日 トレンチ31瓦溜まり2検出。
- 26日 トレンチ31瓦溜まり1、2検出。
- 9月 2日 高所作業車を使用して調査区全景写真撮影。遺構実測作業。
- 23日 現地説明会開催に向けた安全対策。
- 24日 現地説明会。
- 26日 現地作業終了、現場養生。

(2) 資料整理(平成25、29、令和元、2年度)

調査報告書の刊行に向けた資料整理作業は、出土遺物の洗浄が現場の雨天時にほぼ終了していたため、まず遺物台帳の作成から開始した。

続いて層序や遺構の関係を整理した後注記

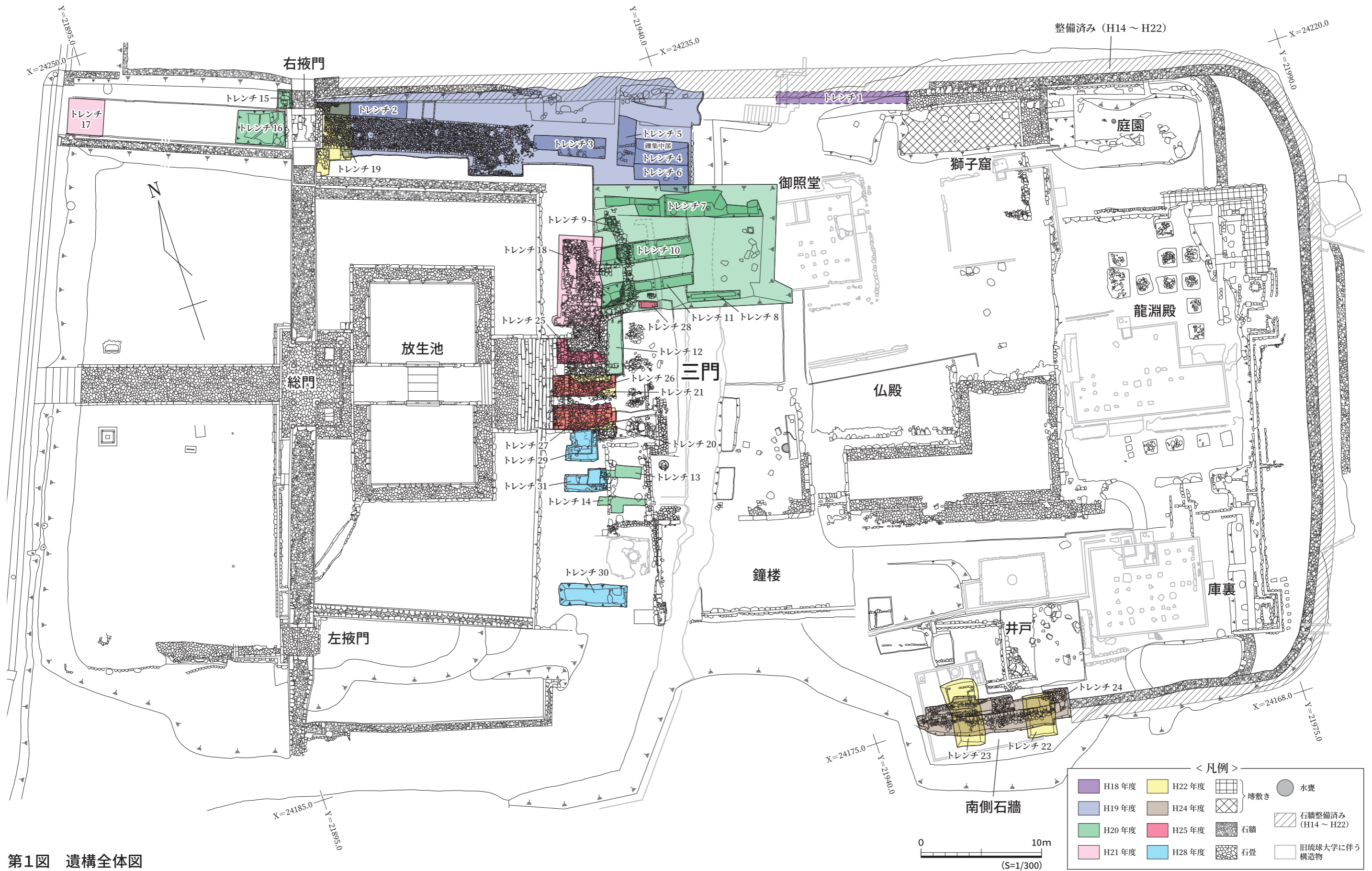
作業に取り掛かったが、注記にあたり、各調査年度毎で付けられていたトレンチ名を、平成18年の調査箇所をトレンチ1として、年度順に付与した連番を継承した(第1表、第1図)。遺構名については、調査時の遺構名で注記している。

注記作業後は、分類、接合、図化対象遺物の抜き出しを行い、実測図の作成、写真撮影、集計作業を行った。また、遺構や遺物の実測図はAdobe Illustratorを使用してデジタルトレース及びレイアウトを作成し、文字原稿や表とともにAdobe InDesignを使用して編集作業を行った。

令和2(2020)年度に、PDFデータを作成し、印刷・製本を行った。

第1表 トレンチ名称一覧

報告書 トレンチ名称	調査 年度	地区名	調査時 トレンチ名称
トレンチ1	H18	右掖門地区	—
トレンチ2	H19	右掖門地区	畔西側トレンチ
トレンチ3	H19	右掖門地区	東西トレンチ西側
トレンチ4	H19	右掖門地区	東西トレンチ東側
トレンチ5	H19	右掖門地区	南北トレンチ
トレンチ6	H19	右掖門地区	東西トレンチ南側拡張部
トレンチ7	H20	三門北地区	三門北 北側トレンチ
トレンチ8	H20	三門北地区	三門北 南側トレンチ
トレンチ9	H20	三門北地区	三門北 トレンチ1
トレンチ10	H20	三門北地区	三門北 トレンチ2
トレンチ11	H20	三門北地区	三門北 トレンチ3
トレンチ12	H20	三門北地区	三門 トレンチ1
トレンチ13	H20	三門北地区	三門 トレンチ2
トレンチ14	H20	三門北地区	三門 トレンチ3
トレンチ15	H20	右掖門地区	右掖門西側地区
トレンチ16	H20	右掖門地区	右掖門西地区東側トレンチ
トレンチ17	H21	右掖門地区	右掖門西地区西側トレンチ
トレンチ18	H21	三門北地区	三門北地区
トレンチ19	H22	右掖門地区	右掖門地区
トレンチ20	H22	三門地区	南側トレンチ
トレンチ21	H22	三門地区	北側トレンチ
トレンチ22	H22	南側石牆地区	東側トレンチ
トレンチ23	H22	南側石牆地区	西側トレンチ
トレンチ24	H24	南側石牆地区	南側石牆地区
トレンチ25	H25	三門地区	
トレンチ26	H25	三門地区	
トレンチ27	H25	三門地区	
トレンチ28	H25	三門地区	
トレンチ29	H28	三門南地区	トレンチ1
トレンチ30	H28	三門南地区	トレンチ2
トレンチ31	H28	三門南地区	トレンチ3



第1図 遺構全体図

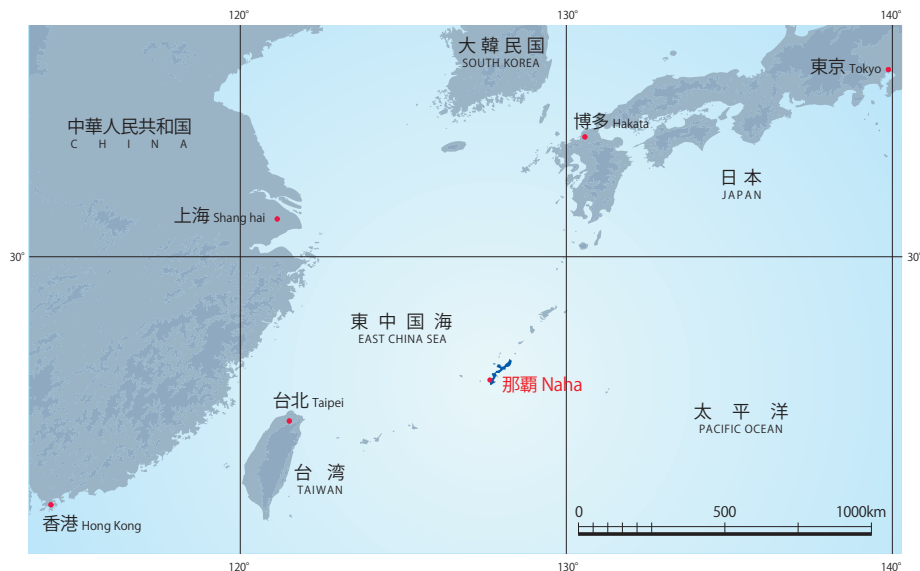
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

円覚寺跡は沖縄本島南部の那覇市首里当蔵町2丁目1番地に所在する。標高は東側の龍淵殿地区で最高約104mを測る。円覚寺はかつての琉球王国の王城である首里城の北側に隣接する谷地に立地している。首里にある寺院の中で最も首里城と隣接していることから、首里王府と政治的、儀礼的な関わりが密接にあったことをうかがい知ることができる。

円覚寺の基盤は、島尻層群(2300万～500万年

前)であるクチャ(泥岩)であり、不透水層である。島尻層群の上位には透水性の高い琉球石灰岩が分布しており、隣接する首里城の基盤をなす。琉球石灰岩に浸透した雨水は不透水層である島尻層群との境界から湧き出しており、首里城一帯に降った雨水は、地形的にも下位となる円覚寺方向へ石灰岩層の下部を通して流れ込んでいくこととなる。不透水層が基盤の円覚寺では、元々常時水が溜まる湿地帯のような環境であったと想定される。



第2図 沖縄本島の位置

第2節 歴史的環境

円覚寺跡は、1492年から約3年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院である。尚真王(第二尚氏王統第三代)が父親である尚円王の御霊を祀るために建立したと伝えられる。第二尚氏の菩提寺であり、現在は国の史跡に指定されている。

1429年に三山を統一した尚巴志によって首里を中心地に統一政権が誕生して後の第二尚氏王統第三代尚真王が即位すると、国内における内政改革並びに首里・那覇周辺の整備を積極的に行っていくようになる。

他方で、14世紀後半頃から日本本土の禅宗僧が明や朝鮮との通交を仲介するようになり、15

世紀前半から中頃にかけて禅宗寺院の建立が相次いだ。中継貿易が琉球王国にとって大きな王府財源となっていたために、それを円滑に進めていくための禅宗僧の確保、それに伴う寺院建立が進められていった。15世紀後半に禅宗僧を外交担当とする対日貿易の体制も整備されていくと、琉球王府による仏教政策も質的充実が図られていった。と共にその禅宗僧の受け皿として天界寺や天王寺のような大規模寺院が造営され、更なる海外交易の拡充が行われていくようになる。

このような状況下で円覚寺は約三年という大事業の末に1494年、七堂伽藍が完備した禅宗寺院として完成した。

『琉球国由来記』(1703年)には、「広範囲に地な

らしを行い、瓦を造って堂宇に葺いた」とする円覚寺伽藍群に関する記載があり、建立に際しては首里城正殿が瓦葺きとなる1670年に先立ち瓦葺きが行われ、最新の建築技術を駆使して建造されたことがわかる。また、天界寺僧周雍が1497年に撰文した『円覚禅寺記碑』には課役を命じたわけでもなく貴賤老若が集まって創建作業に従事したという美辞麗句で綴られている。

円覚寺の開山住持は京都五山の別格南禅寺の住持であった茶隠上人として山号を「天徳山」とした。『球陽』には仏殿、荒神堂、寝室、方丈、仏殿、法堂、三門、両廊及び僧坊、厨庫、浴室が創建当初の建物として記載され、沖縄戦に至るまで琉球王国内で最大規模を有する寺院として約450年間続いていくこととなる。創建当年には御照堂が建てられ、それを第二尚氏の宗廟とし、以降歴代王の位牌は円覚寺に祀られるようになる。さらに1496年に鐘楼、1498年に放生池及び放生橋が築造される。

創建当初の様子に関しては『使琉球録』（1534年）に記載されている。そこには①正殿(仏殿)の規模は5間、②正殿内部は仏像が1座安置され、左右には経典が数千巻納められている。③仏殿天井には板が張られそこには五彩の絵が描かれ、床には筵が敷かれている。④仏殿外には小さい池を掘り、怪石を飾っている、とある。それらは「広大にして壮麗であり、王宮に垂ぐ」と明正使陳侃が報告している。この尚真王による円覚寺の整備を称えて1509年建立の「百浦添之欄干之銘文」の第一条には「仏を信じて像を造り、寺を建てて金を布き、仏閣、僧坊、経殿、鐘楼、藁を連ね棟を接し、輪奐美を兼む」と王徳のひとつとして記されている。なお、この円覚寺創建以降も玉陵(1501年)、円鑑池(1502年)、園比屋武御嶽石門(1519年)の造営、真珠道の整備(1522年)、首里城南側外郭拡張(1546年)と首里城周辺の整備が継続的に行われていく。

16世紀になると、琉球王国による東アジア交易の衰退と共に国内では廃される寺院もみられる中、円覚寺は1571年に御照堂が加建、1588年には方丈、大殿、三門等、1596年には法堂(仏殿?)が修復されている。これらのことより国王の菩提寺として王府の厚い庇護下にあったことがわかる。また、首里における土族子弟の教

育施設としても利用されていたことから王府経営の教育施設としても機能していた。

薩摩侵入時には焼失を免れ、近世に入っても王府から60石(1695年には100石に加増)の知行が与えられている。これは琉球王国内にある寺院の中では最も石高が高く、円覚寺創建以来から王府内で最も格式ある寺院として位置付けられている。

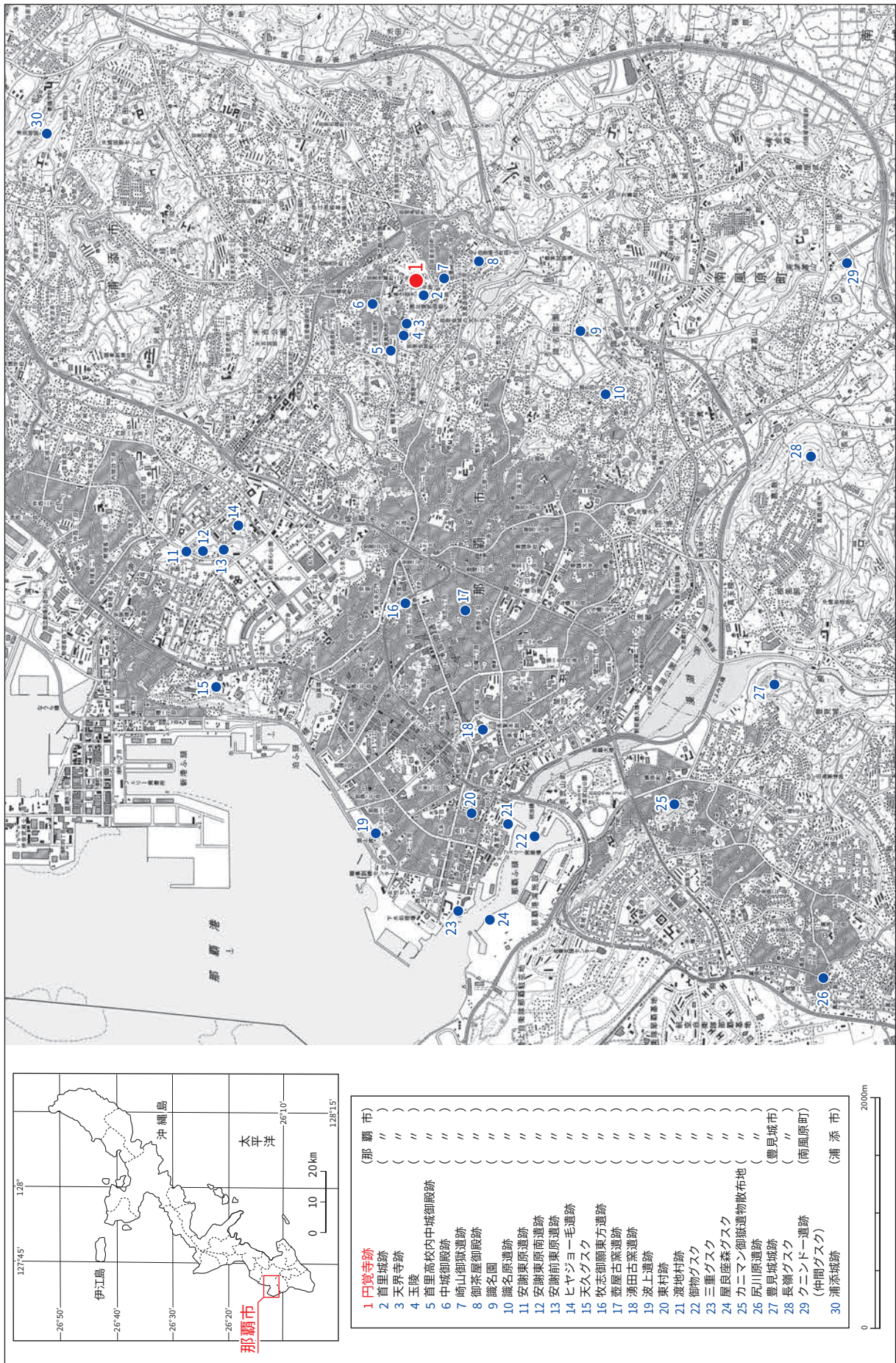
このような王府の庇護もあり、17世紀以降も建物の修復が繰り返される一方で、1721年に大殿(戦前までであった龍淵殿に相当)が失火により焼失してしまう。当時の住持覚翁上人が責を問われて八重山へ流刑となるものの、同年に大殿(龍淵殿)が再建される。その際、歴代国王の位牌配置を仏式に変更したり、仏像の配置換え等、堂内部の改変を行っている。以降も1728年に獅子窟、御照堂が小堂に改築、1744年には鐘楼、亭寮、照堂寮といった建物の移築、修復が行われており、近世を通して、王府の厚い庇護下にあったことがうかがえる。

近代に入ると、琉球処分から6年後の明治17(1884)年に王府管轄から尚氏の私寺に移管される。しかし尚氏に関わる王府儀礼そのものは沖縄戦直前まで執り行われていた。昭和8(1933)年には総門、放生池、三門、仏殿、鐘楼、獅子窟、龍淵殿が旧国宝に指定されるが、昭和20(1945)年の沖縄戦によって全ての建物が焼失した。

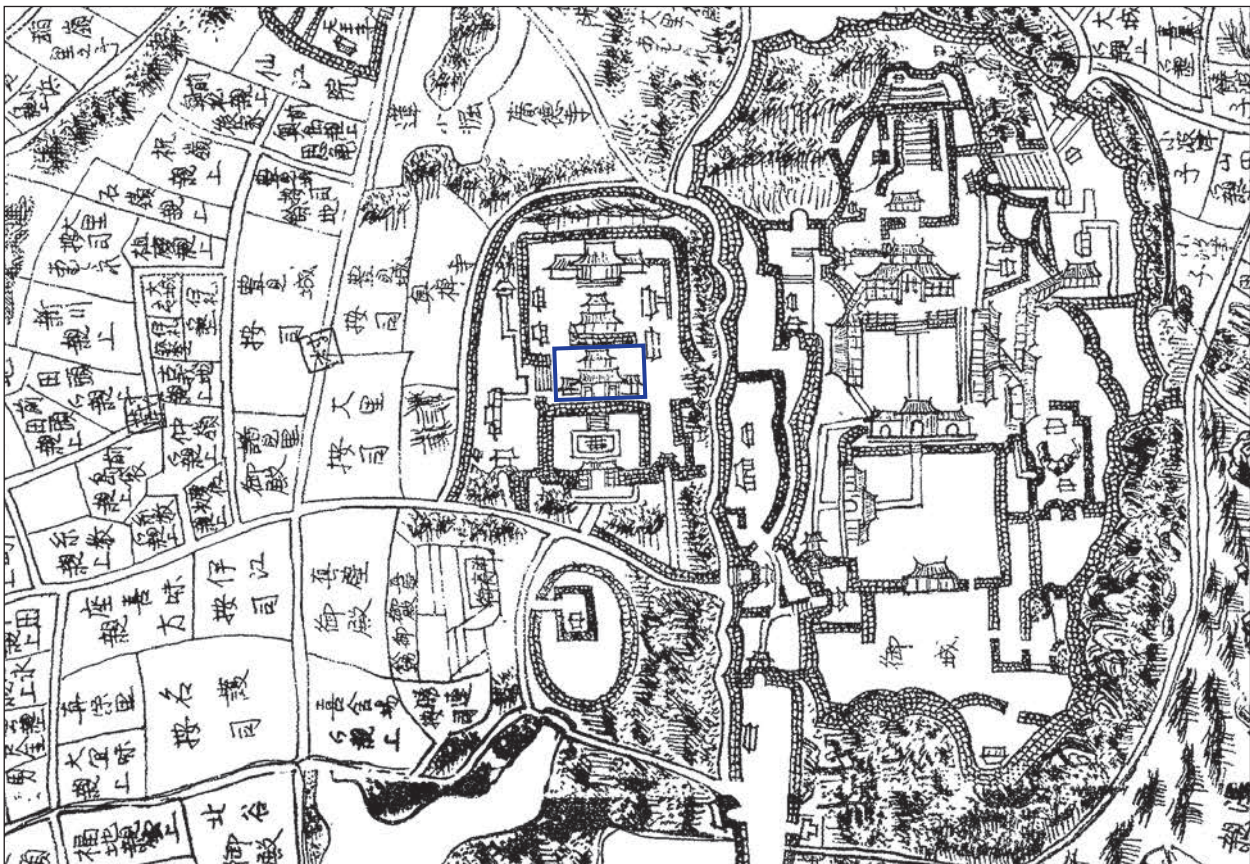
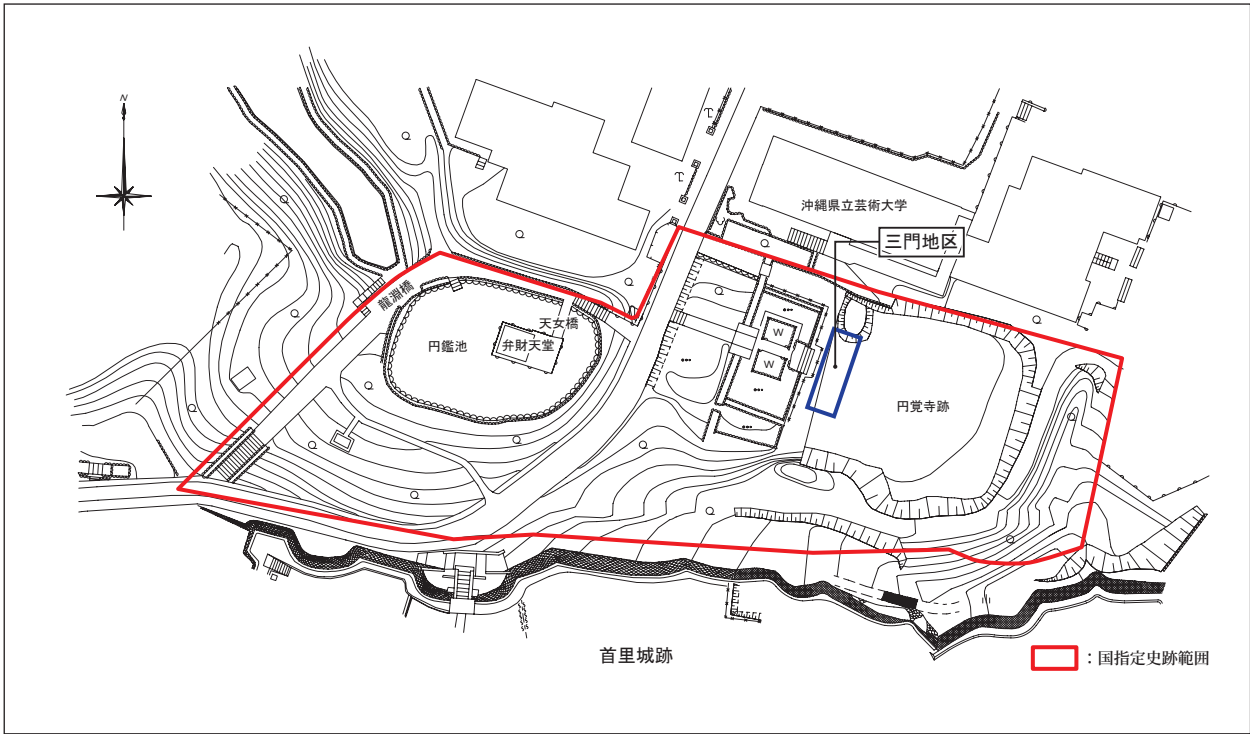
戦後は、昭和23(1948)年に開学した琉球大学の教員官舎が建てられ、多くの遺構が破壊もしくは地下に埋蔵された。かつて仏殿、龍淵殿といった伽藍群が建てられていた場所は昭和40(1965)年頃に琉球大学のグラウンドとして再び造成された。昭和43(1968)年には旧琉球政府文化財保護委員会によって総門、左掖門の復元、放生池の修復が行われた。

一方で、昭和47(1972)年に放生橋と昭和53(1978)年に前鐘、中鐘、楼鐘が国指定重要文化財となり、木像白象及び趣意書、放生池石橋勾欄、総門が県指定有形文化財となっている。

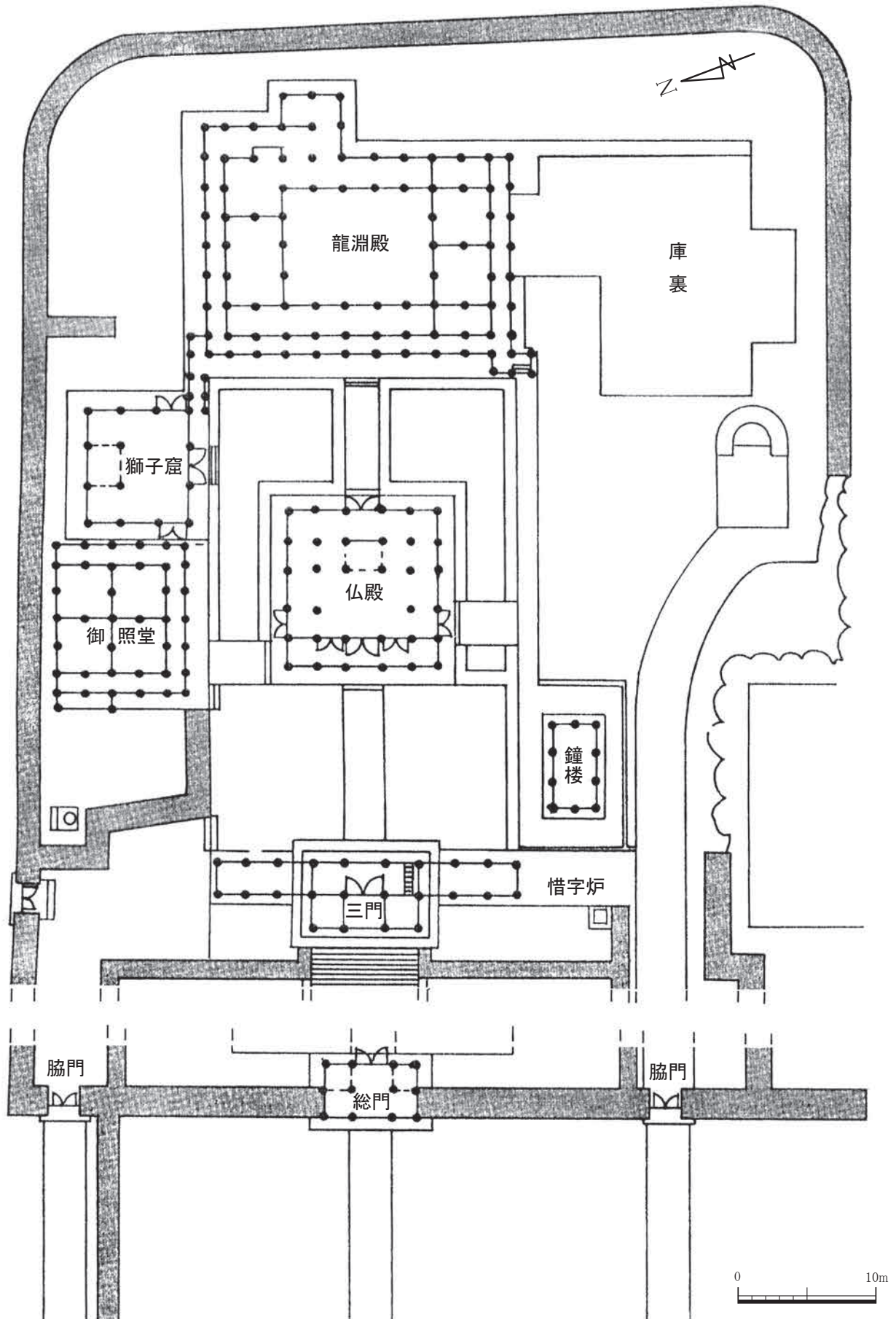
昭和59(1984)年には琉球大学キャンパスが首里城及びその周辺から西原町字千原への移転が完了したのに伴って、円覚寺跡一帯は県営公園に位置付けられ、首里城を軸にした復元整備事業に付随するかたちで整備が本格的に始動している。



第3図 円覚寺跡の位置及び周辺の遺跡



第4図 上：円覚寺跡の史跡指定範囲 ※沖縄県教育庁文化財課より提供
 下：首里古地図(18世紀初頭作成)に見る調査区 ※沖縄県立図書館蔵



第5圖 円覚寺平面図 (田辺泰「琉球建築」1937)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

県文化財課では、史跡円覚寺跡の保全と活用・公開等を図るための保存整備事業を実施しており、発掘調査はその整備・復元計画に基づいて計画される。今回の発掘調査は、三門地区における遺構確認を目的としたもので、平成20年度は三門北側(トレンチ7～11)、三門(トレンチ12)、三門南側(トレンチ13、14)、平成21年度は三門北側(トレンチ18)、平成22年度は三門側(トレンチ20、21)、平成25年度は三門(トレンチ25～28)、平成28年度は三門南側(トレンチ29～31)に調査区を設定した。これらをまとめて、三門地区と称する。その調査面積は約589m²である(H20：約288m²、H21：約113m²、H22：約18.8m²、H25：約140m²、H28：約30m²)。

調査方針

「円覚寺跡基本整備計画策定報告書」によると、円覚寺の整備の目標年代は、18世紀前半(1728年の上・下御照堂改修時以降)からアジア・太平洋戦争で焼失するまでの円覚寺を設定している。

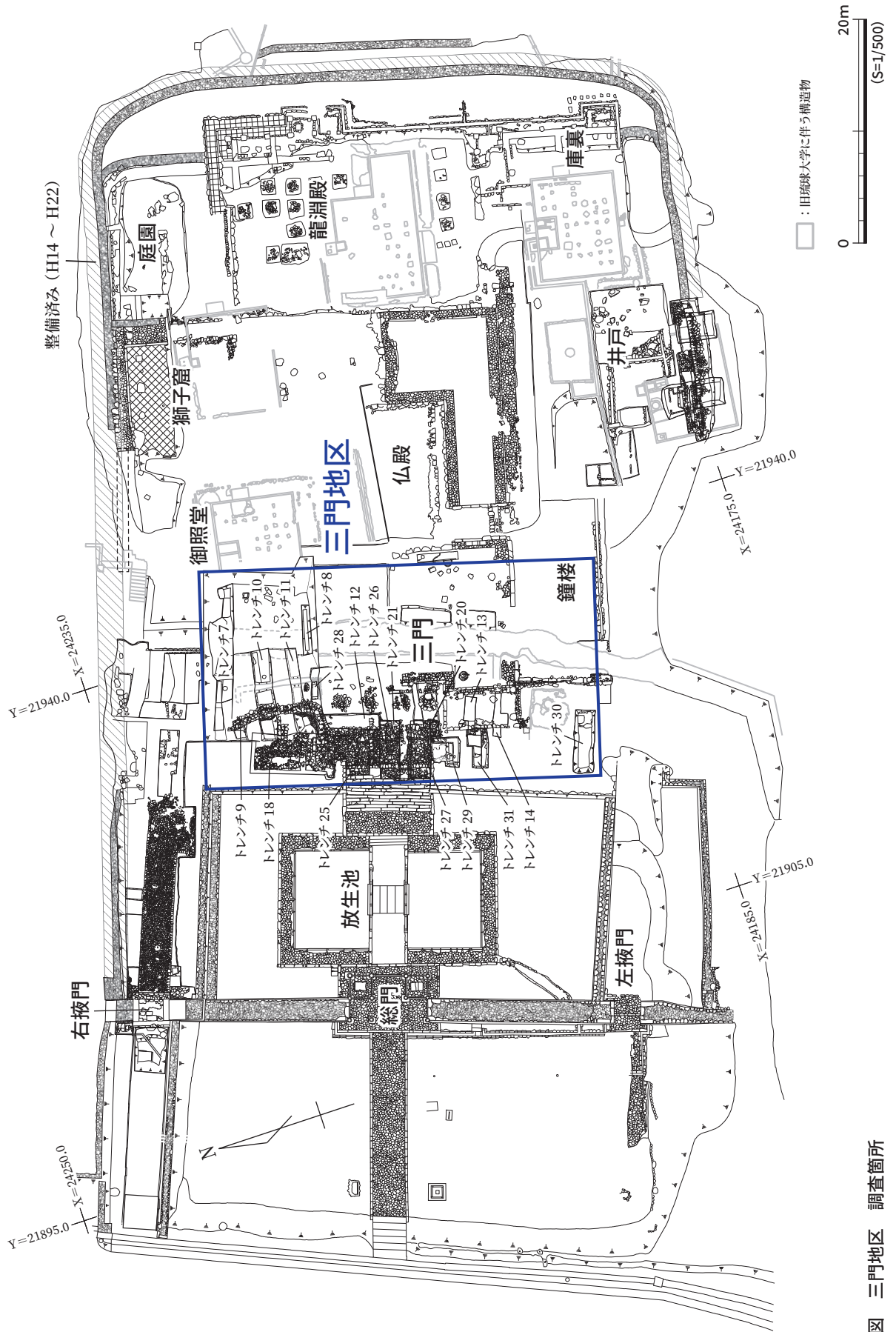
したがって、発掘調査は当該時期の遺構検出を目的とし、重機が搬入できる箇所は重機を使用して戦後の造成土を掘削した後、人力による掘削を行った。さらに、堆積土の状況や遺構の切り合いを確認するために、必要に応じて遺構を残しつつ深掘りを行い、必要な記録を作成した。

記録

遺構の検出状況や土層堆積状況、調査区壁面図などの図面作成作業は全て人力で実施した。写真撮影は、35mmのフィルムカメラを使用し、フィルムは白黒とカラーのリバーサルフィルムで撮影した。なお、デジタルカメラでも撮影し、報告書に掲載する写真はDTP印刷に対応するために、デジタル画像を使用した。

埋め戻し

埋め戻しに関しては、事業を所管する文化財課が行うこととなっていたため、調査終了後は遺構の崩壊を避けるために土嚢の設置とブルーシートによる養生を行った。



第6図 三門地区 調査箇所

第2節 層序

三門地区における堆積層は、三門北側で19層確認されている(第8・9図、図版1・2)。1a層～4層までが琉球大学施設建設時の造成土で、層厚は約70cmから、最も厚い箇所約2m確認された。5層以下が円覚寺の造営にかかる造成土である。

1a～4層：表土、現代の造成土。琉球大学施設建設時の造成土。

5層：Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。

10～20cm大の石灰岩礫が多量に混じる。

6層：Hue10YR5/4 にぶい黄色。

5～10cm大のクチャブロック層。

7層：Hue2.5YR5/4 黄褐色。粘土層。

8層：Hue10YR6/4 にぶい黄橙色。

5～30cm大のクチャブロック層。

9層：Hue2.5Y5/4 黄褐色。

10～30cm大のクチャブロック層。

10層：Hue2.5Y5/4 黄褐色。

クチャブロックがまばらに混じる粘土層。

11層：Hue 2.5Y4/6 オリーブ褐色。粘土層。

12層：Hue 10YR4/2 灰黄褐色。

クチャブロック層。

13層：Hue 2.5Y5/4 黄褐色。

礫が混じる粘土層。

14層：Hue 2.5Y5/4 黄褐色。

3～10cm大のクチャブロック層。

15層：Hue 2.5Y5/4 黄褐色。

クチャブロック、石灰岩礫がまばらに混じる粘土層。

16層：Hue 2.5Y5/3 黄褐色。

10～30cm大のクチャブロック層。

17層：Hue 2.5Y5/3 黄褐色。

5cm大のクチャと石灰岩礫がまばらに混じる層。

18層：Hue 2.5Y4/4 オリーブ褐色。

クチャブロック層。

19層：Hue 2.5Y5/3 黄褐色。粘土層。

5層以下の堆積土は円覚寺造営に係る造成土であり、三門地区一帯に広がっている。造成土の特徴として以下の点が挙げられる。①クチャ塊が大量に投入されており、中には大粒のクチャ塊(30cm大)もみられる。②クチャ塊を多く含む層と粘土層が交互に堆積する傾向があり、これは排水と地盤の安定を考慮した機能が考えられる。なお、粘土層には拳大の石灰岩礫を混入するものもみられる。③東から西側へ向かって傾斜して堆積している。④遺物は15世紀後半頃の輸入陶磁器が数点みられるだけで、出土量は少ない。

これらの特徴より、時間をかけて堆積したものではなく、短時間のうちに大量の土砂を投入したと考えられる。また造成にあたり、上層は徐々に水平になるよう意識し、微調整のため部分的に盛土するなどの状況が確認された。

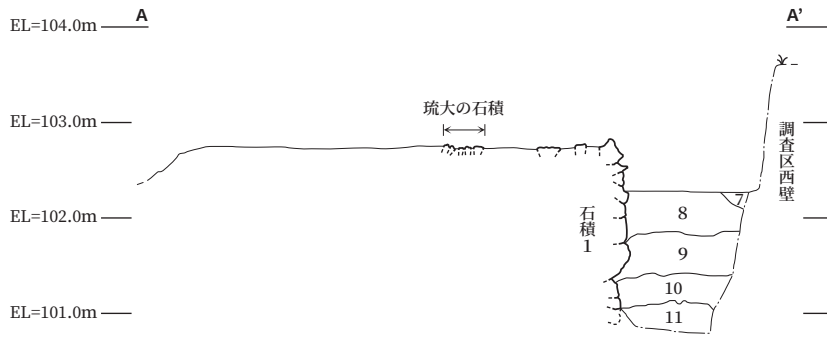
このような造成の痕跡は、三門南側の門廊に設定したトレンチ13、14でも確認されており(第15図、図版3)、クチャ塊層と粘土層が交互に積まれる状況は、三門北側で確認された状況と共通する。

造成土の年代については、トレンチ8内造成下部より中国産白磁皿、トレンチ11の12層中より15世紀後半頃の中国産青花碗、トレンチ13内造成土よりV類、VI類に分類される中国産青磁の他、本土産陶器・備前産播鉢、トレンチ27内造成土(第16図 土層図 3層)よりタイ産褐釉陶器(メナムノイ窯)が出土している。これらの資料は15世紀代～16世紀前半頃と考えられることにより、今回確認された造成土は、円覚寺創建当初の造成と判断される。

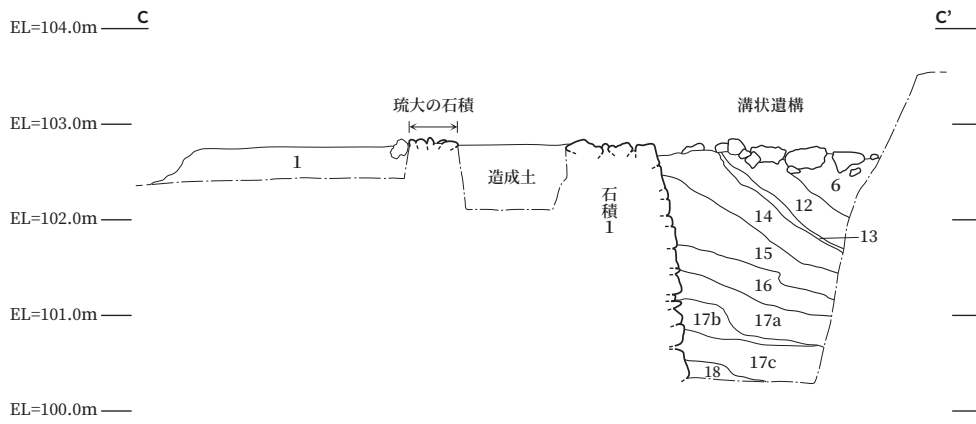


第7図 三門地区 平面図

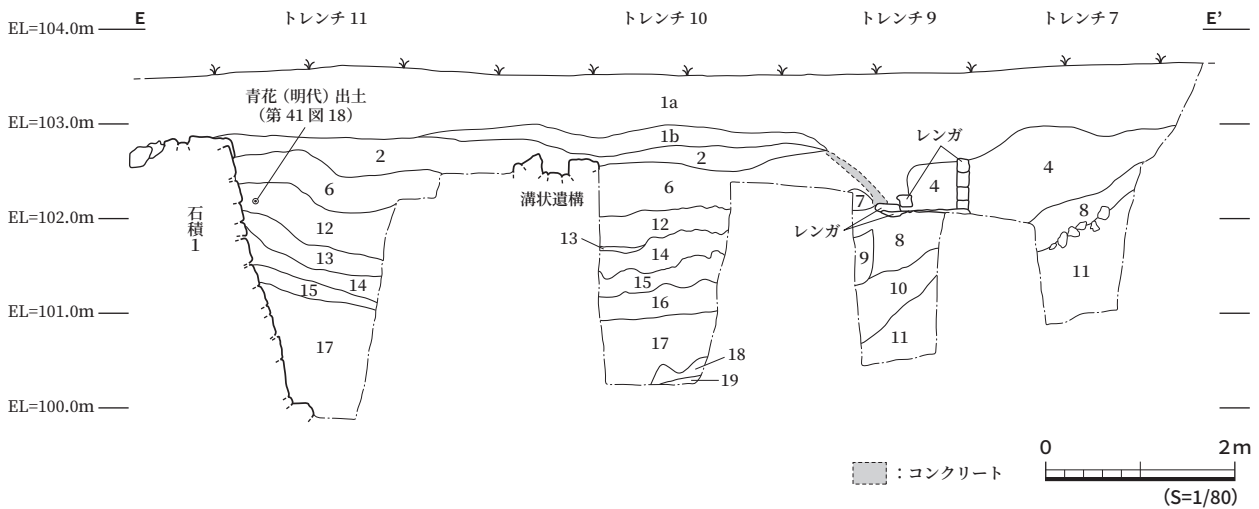
トレンチ9 南壁土層断面図



トレンチ10 南壁土層断面図

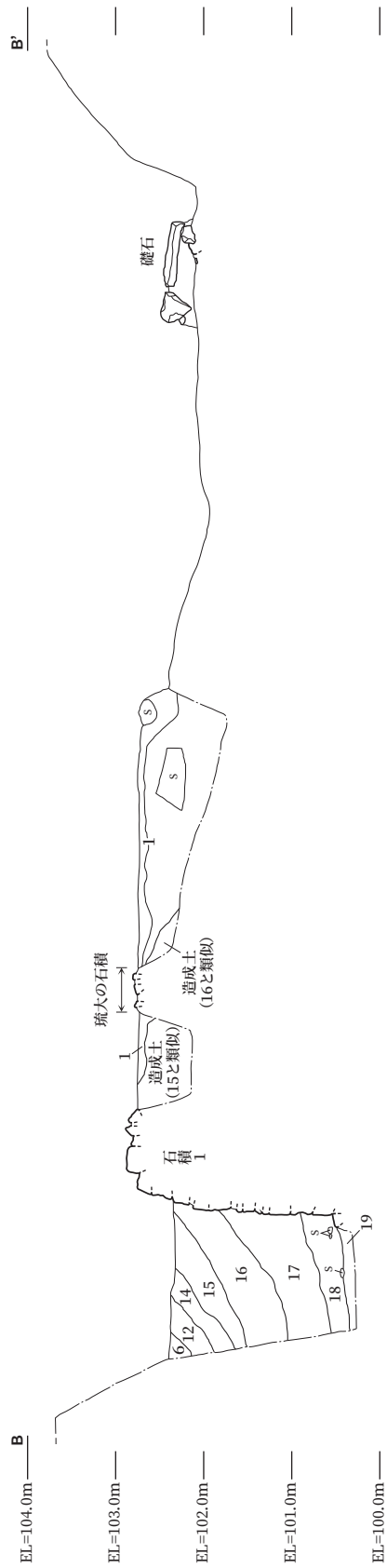


西壁土層断面図

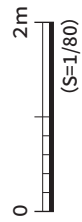
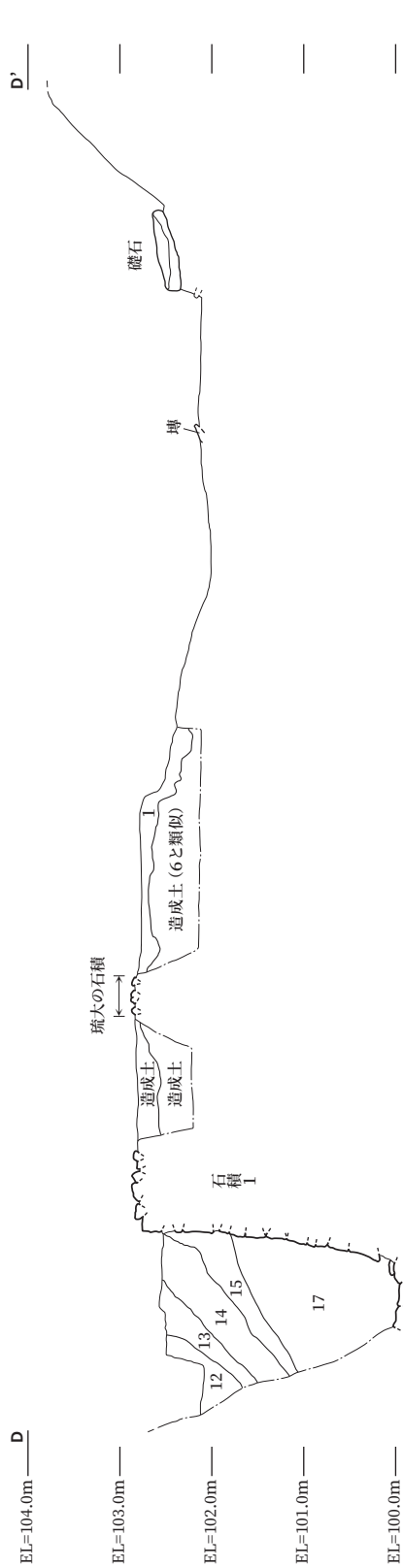


第8図 南壁・西壁土層断面図(トレンチ7、9、10、11)

トレンチ10 北壁土層断面図



トレンチ11 北壁土層断面図



第9図 北壁土層断面図（トレンチ10、11）



トレンチ9 南壁(北から)



トレンチ9 北壁(南から)



トレンチ10 南壁(北から)



トレンチ10 北壁(南から)



トレンチ11 北壁(南から)

図版1 造成土堆積状況1



トレンチ 11 西壁 (東から)



トレンチ 10 西壁 (東から)

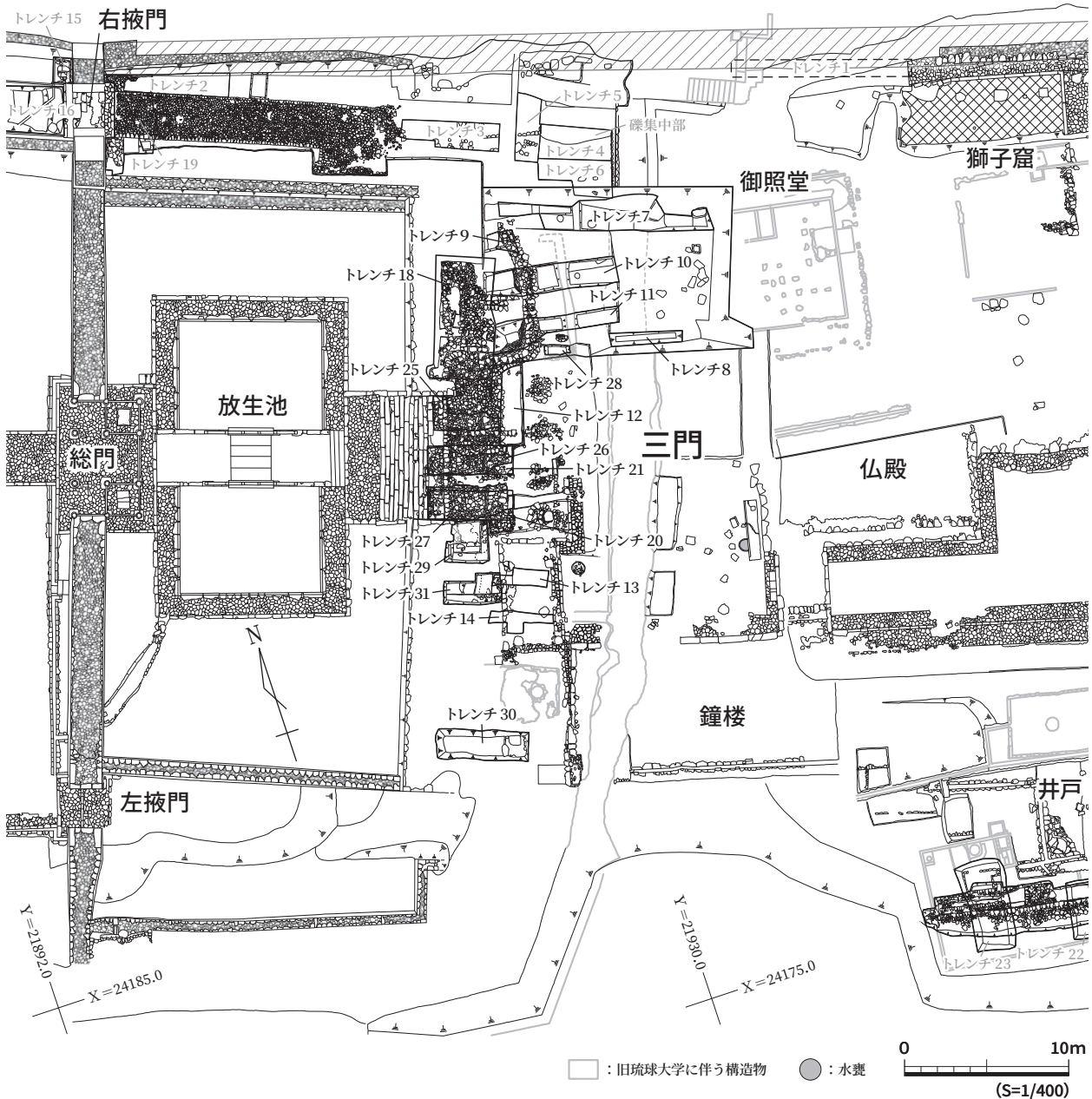


トレンチ 7、9～11 掘削状況 (北から)

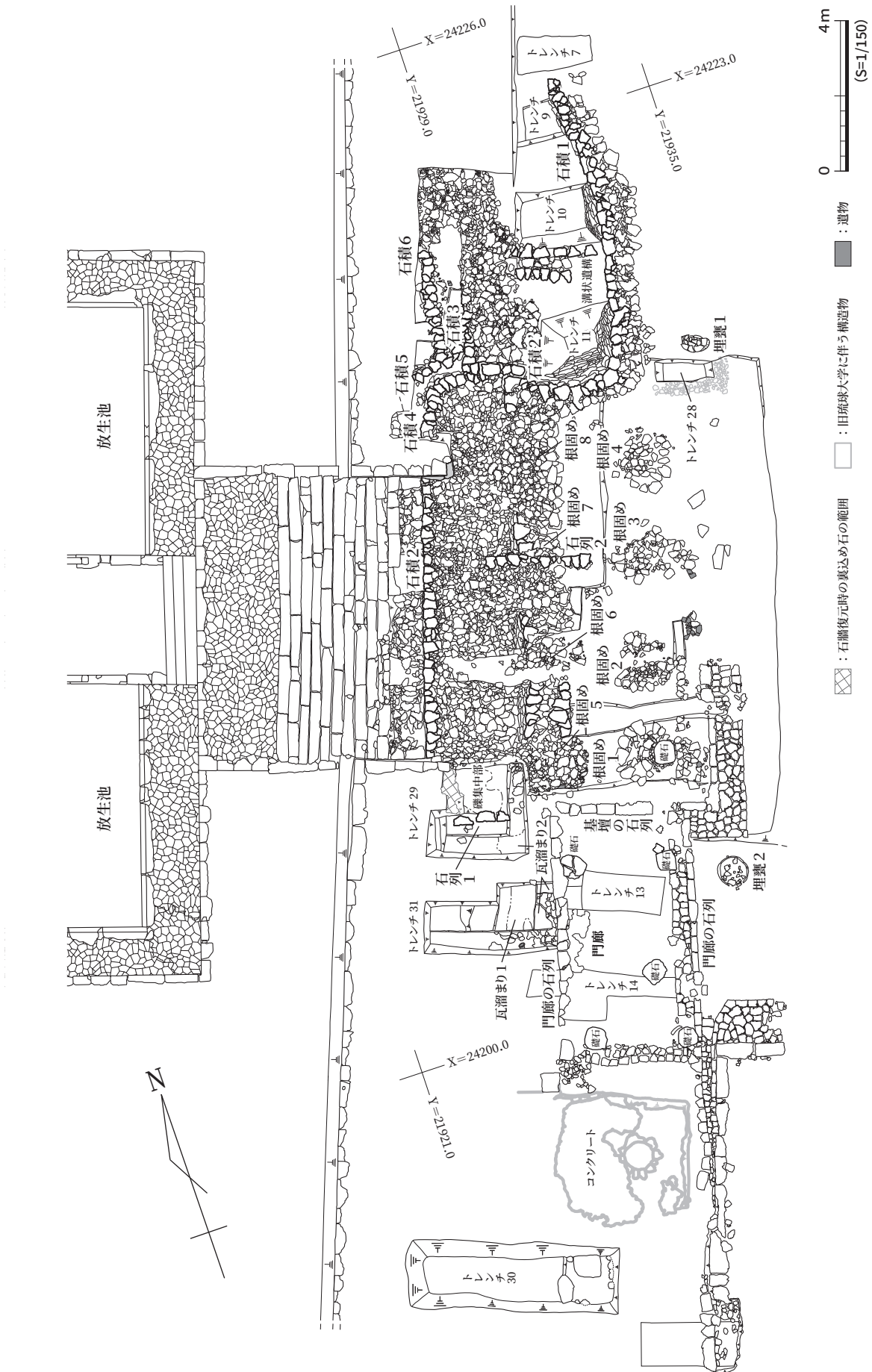
第3節 三門地区の遺構と遺物

円覚寺の三門は1492年に創建され、1588年、1652年、1697年に改修を受けている。建物規模は3間×2間で柱は総丸柱の重層建築、下層の床面は埴敷きで、左右門廊が付属しており、柱基礎は柱を受ける半円の礎盤が用いられていた状況が古写真などに見ることができる。

本地区の発掘調査の結果、三門基壇の石列や石積み、柱基礎の根固め石をはじめ、溝状遺構、土留めの石積み、瓦溜まりの他、性格不明の石列、集石など様々な遺構が確認された。また、遺物は中国産をはじめ、タイ産、本土産、沖縄産の陶磁器の他、瓦、埴、銭貨などが得られている。以下に遺構、遺物の順に報告する。



第10図 三門地区 トレンチ設定箇所



第11図 三門地区 遺構平面図

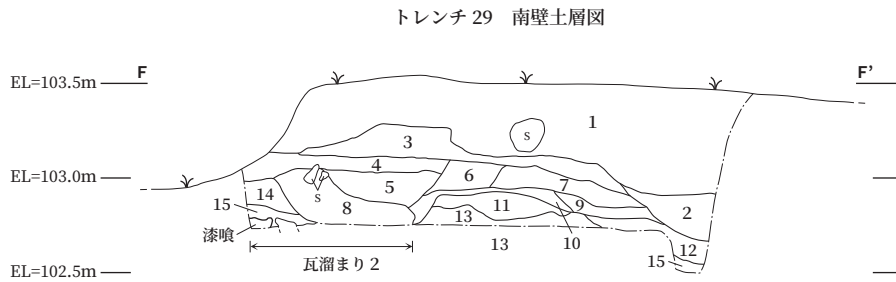
1 遺構

石列1 トレンチ29から東西方向に延びる石列が検出された。西側は戦後の石牆復元時の掘削により、やや原位置から南方向へずれている状況が確認されるが、この石列は、三門基壇の石列と同一方向に延びること、検出高及び石列の天端高が基壇の石列とほぼ同じであることより、三門の基壇の縁石と考えられる。また、今

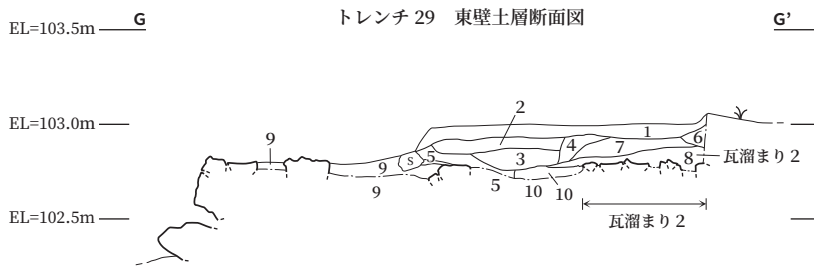
回の石列1の発見によって、前回調査で検出された石積2とつながることが確認され、石積2が三門基壇の西縁にあたることを判明し、基壇の位置や規模など、復元に向けて重要な手掛かりを得ることができた。なお、石列の北側(基壇側)には塼を敷くためのものと考えられる段が形成されている。



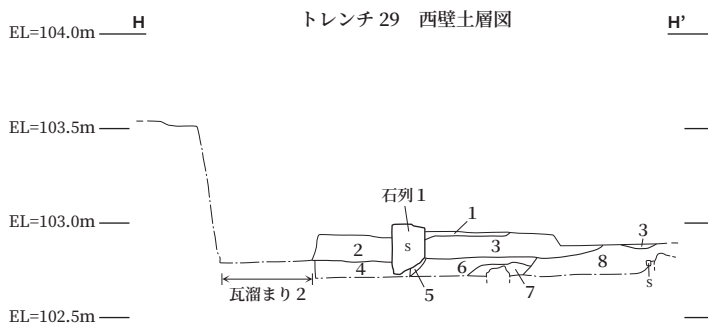
第12図 石列1、南側門廊



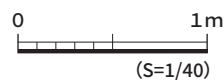
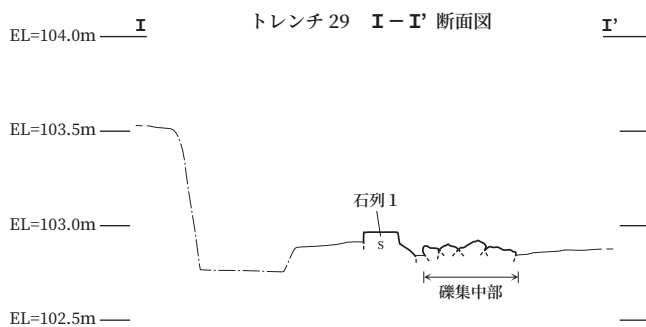
- 1層：表土。
 - 2層：Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色。セメント片混じる。粘性、しまりともにやや強い。
 - 3層：Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。粘性、しまりともにやや強い。現代遺物含む。
 - 4層：Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。粘性弱く、しまりともにやや強い。現代遺物含む。
 - 5層：Hue2.5Y5/3 黄褐色。粘性、しまりともに強い。クチャブロック（3～5cm 大）主体。
 - 6層：Hue2.5Y5/3 黄褐色。粘性、しまりともに弱い。現代遺物含む。
 - 7層：Hue2.5Y5/4 黄褐色。粘性、しまりともに強い。現代遺物含む。
 - 8層：Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。粘性、しまりともに弱い。
 - 9層：Hue2.5Y5/3 黄褐色。粘性、しまりともにやや強い。
 - 10層：Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色。粘性弱いがしまりは強い。
 - 11層：Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色。粘性、しまりともに強い。
 - 12層：Hue2.5Y5/2 暗灰黄色。粘性、しまりともに強い。
 - 13層：Hue2.5Y5/3 黄褐色。粘性、しまりともに強い。
 - 14層：Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色。粘性、しまりともにやや強い。
 - 15層：Hue2.5Y4/2 灰黄色。粘性、しまりともに強い。瓦溜まり 2 直上に堆積。
- ※ 1～3層：表土、現代の客土。
 4～12層：竈大関連施設建設時の造成土か。
 13～15層：近代以降の三門改修に伴う造成土か。



- 1層：南壁 4層と同層。
 - 2層：Hue2.5Y5/3 黄褐色。粘性、しまりともに弱い。
 - 3層：Hue2.5Y5/3 黄褐色。季大のクチャブロックや石灰岩礫が主体。
 - 4層：Hue2.5Y5/4 黄褐色。粘性、しまりともにやや強い。基礎を抜いた掘り込み。
 - 5層：Hue2.5Y4/6 オリーブ褐色。粘性、しまりともに弱い。小礫（2～5cm 大）混じる。
 - 6層：南壁 14層と同層。
 - 7層：Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色。粘性、しまりともにやや強い。
 - 8層：南壁 15層と同層。
 - 9層：Hue2.5Y6/4 に近い黄色。粘性とても強く、しまりもやや強い。石灰岩礫（30～50cm 大）混じる。三門造成土。
 - 10層：Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色。粘性、しまりともに強い。
- ※ 1～5層：竈大関連施設建設時の造成土か。
 6～8層：近代以降の三門改修に伴う造成土か。
 9～10層：三門の造成土。

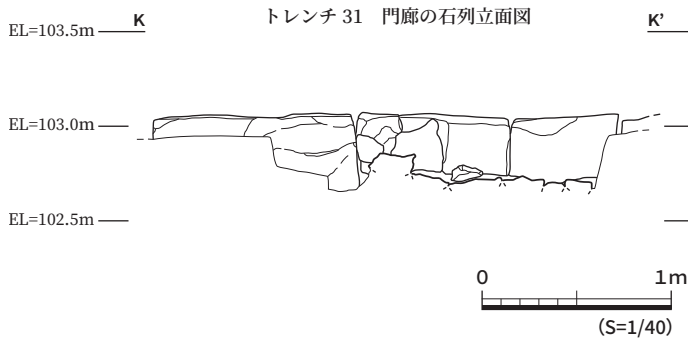
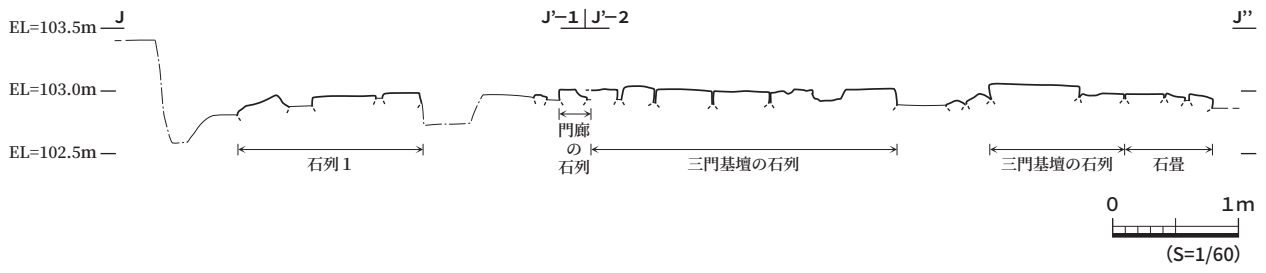


- 1層：Hue2.5Y6/4 に近い黄色。
 - 2層：Hue10YR4/4 褐色。粘性、しまりともに弱い。現代遺物含む。
 - 3層：Hue2.5Y4/6 オリーブ褐色。粘性、しまりともに弱い。
 - 4層：Hue2.5Y4/2 暗灰黄色。粘性、しまりともに強い。瓦溜まり 2 を検出。
 - 5層：Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色。粘性強く、しまりは弱い。石列を固定する土。
 - 6層：Hue2.5Y5/4 黄褐色。粘性はやや強く、しまりは強い。門廊基礎内の造成土であるニービ層に類似。
 - 7層：Hue2.5Y5/6 黄褐色。粘性弱いが、しまりはやや強い。クチャブロック（2～3cm 大）混じる。
 - 8層：Hue2.5Y5/3 黄褐色。粘性、しまりともに強い。石灰岩礫を多く検出。
- ※ 2層：現代の客土。
 1、3～8層：三門の造成土。



第 13 図 トレンチ 29 土層断面図、石列 1 断面図

J-J' 断面図



三門 門廊石列 (西から)



トレンチ 29 石列1 検出状況 (北東から)



トレンチ 29 南壁 (北から)



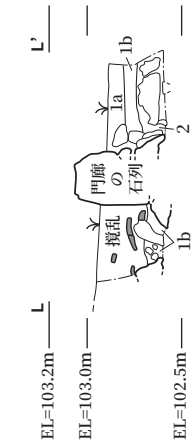
トレンチ 29 H-H' 断面 (東から)



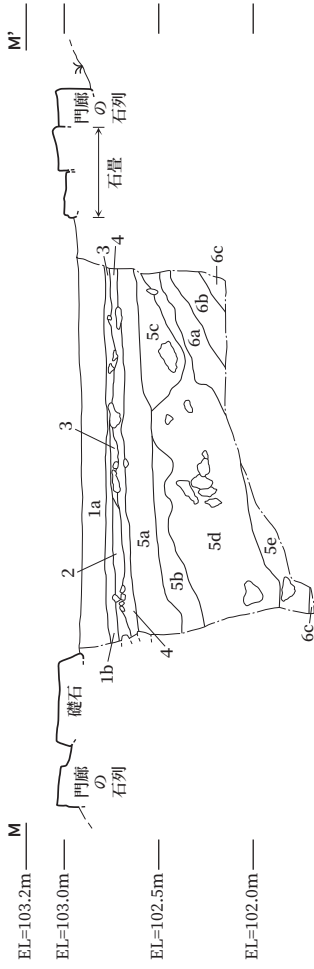
トレンチ 29 東壁 (西から)

第14図 石列1、南側門廊

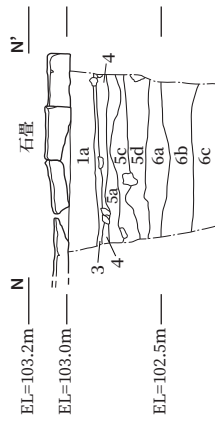
トレンチ13 拡張部北壁土層図



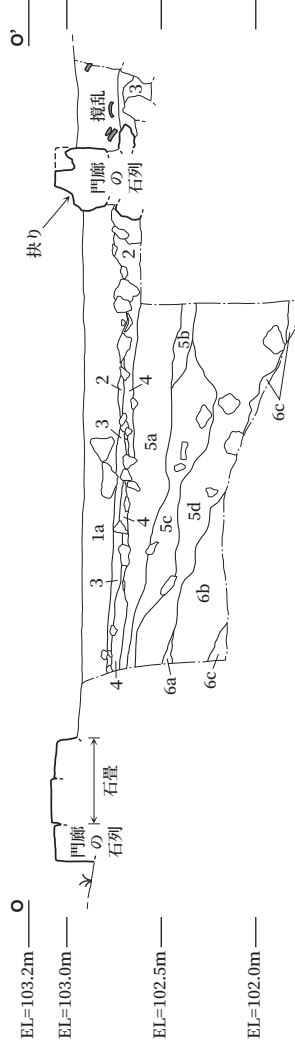
トレンチ13 北壁土層図



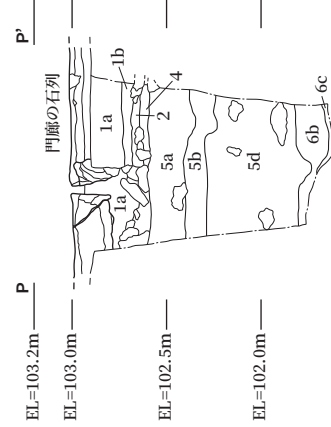
トレンチ13 東壁土層図



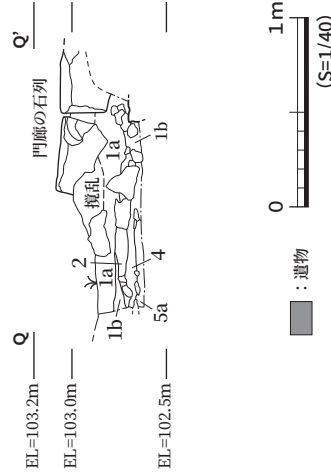
トレンチ13 南壁土層図



トレンチ13 西壁土層図



トレンチ14 西壁土層図



- 1a層: Hue2.5Y5/6 黄褐色、粘性は弱く、しまりが強い。
- 1b層: Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色、小礫(2~5cm大)が混じる。
- 2層: Hue10YR4/4 褐色、小礫(最大10cm大)主体。
- 3層: Hue10YR7/3 に近い黄褐色、粘性は弱く、しまりや強い、小礫混じるコラータル主体。
- 4層: Hue10YR5/6 黄褐色、粘性は弱いが、しまりがある、ニーヒ主体。
- 5a層: Hue10YR4/4 褐色、粘性、しまりともに強い。
- 5b層: Hue10YR4/3 に近い黄褐色、5a層より粘性が強く、より粘土質。
- 5c層: Hue2.5Y5/6 黄褐色、5a層より粘性がやや強い。
- 5d層: Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色、5a層より強い、石灰岩礫(最大10cm大)が混じる。
- 5e層: Hue2.5Y4/4 オリーブ褐色、5層中で唯一しまりが強いが、粘性は最も弱い。
- 6a層: Hue2.5YR4/4 オリーブ褐色、粘土質でやしまりはあるが柔らかい、クチャブロック(2~8cm大)が主体。
- 6b層: Hue2.5YR4/6 オリーブ褐色、6a層より粘性は強く、しまりは弱く柔らかい。
- 6c層: Hue2.5YR4/3 オリーブ褐色、粘性、しまりともに6a層より強い、クチャブロック(20cm大)が主体。

※1a~1b層: 上部湖成層、礫石などを混入したと考えられる。
 ※2層: 湖成層、主に西側でみられる。石畳を埋める層が考えられる。
 ※3層: コラータル層、主に東側でみられる。湖成層と堆積物とを兼ねるようになっている。
 ※4層: ニーヒ層、細粒のコラータルを平坦に堆積した層。2、3層の礫・コラータルを安定して置く層図が考えられる。
 ※5a~5e層: 中程度湖成層、西側へ向かって侵入し、本層を形成。最上層の5a層上面のみ平坦をなすため、5a~5e層: 平坦に堆積したと考えられる。前後や湖成層などの遺物が出土。
 ※6a~6c層: 下部湖成層、三門北側と同様に、クチャブロック層と粘土層が西側へ傾斜しながら互層をなす。遺物はほとんど出土しない。

第15図 南側門廊土層図

門廊の造成について

トレンチ13・14から門廊における造成工程が判明した(第15図、図版3)。

最初に門廊石列を設置する部分に20cm内外の石灰岩礫を方形に敷き詰め、次にその内側にニービ質土を約5cm厚で均衡に敷く。続いてコーラルを敷き固め、門廊石列を配置後、仕上げの粘質土を敷きならし、柱の間隔に合わせて礎石

(ニービヌフニ製)の設置と、門廊石列の内側に沿って石畳を敷設したと考えられる。

なお、造成土の4層と5層からは中国産青磁碗・皿V類及びVI類、備前産播鉢が出土した。これらの遺物は15世紀後半～16世紀前半頃と考えられることより、造成土は円覚寺創建時のものと判断した。



三門南側門廊 (東から)



トレンチ13北壁 (南から)



トレンチ13北壁 (南から)



トレンチ13東壁 (西から)



トレンチ13南壁 (北から)



トレンチ13西壁 (東から)

図版3 南側門廊造成土堆積状況

根固め石 柱を据える礎石を固定するため、礫を敷いたものである。首里城跡銭蔵地区や中城御殿跡でも検出例がみられる。

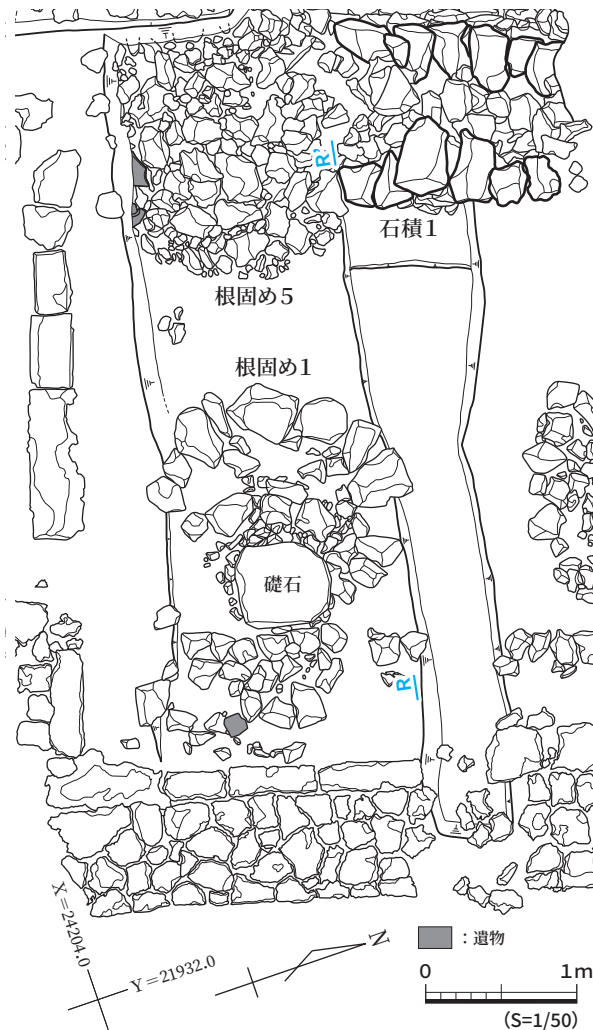
根固め石は、想定範囲を含めて8基検出され、南北方向に4列、東西方向に2列並ぶ。それぞれ約2.5mの等間隔で配置されているが、根固め2・3と根固め6・7の間隔については約3.0mとやや広がっている。

根固め1は、長軸(東西)約2.2m×短軸(南北)約1.8mで、約20~40cm大の石灰岩を円形状に並べ、その内側に約10~20cmの石灰岩礫を配置し、さらに礫と礫の間には2~5cm大の小礫を詰めている。その上に配置された礎石が残る。

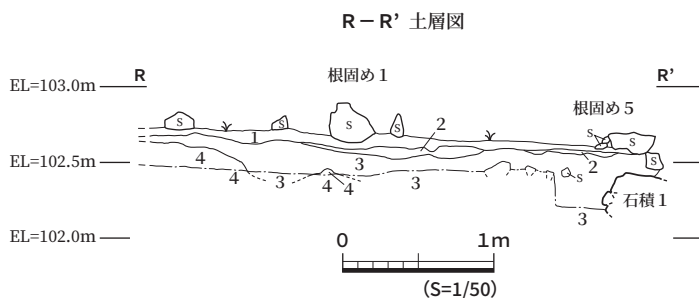
根固め2~4は、一部削平を受けているものの、本来は円形状を呈していたと考えられる。それぞれ外側に約20~30cm大の石灰岩、その内側に約5~15cm大の石灰岩礫を敷き詰めている。規模は直径約1.5mで、礫の敷き詰め方とともに共通の仕様となっている。

根固め5~8は礫が密集する箇所位置するが、根固め5と8については石灰岩礫が円形状に並び、内側がやや窪む箇所を根固めと捉えた。根固め6と7については他の根固めとの位置関係より想定した。

今回検出された根固め石は、柱配置を捉える上で重要である。

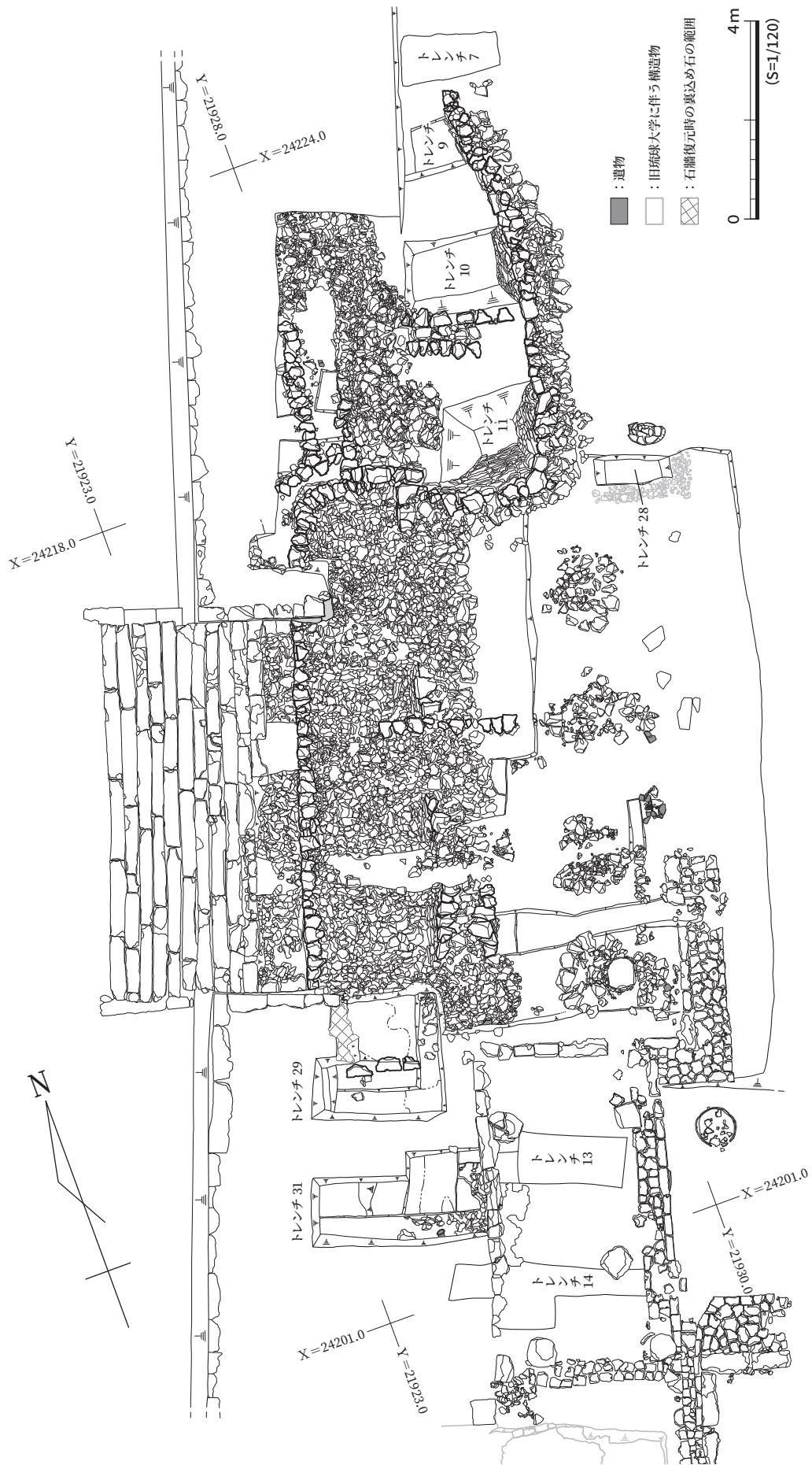


根固め1 (東から)



- 1層: Hue10YR4/4褐色。
粘性、しまりともにやや弱い。小礫(3~5cm大)主体。
- 2層: Hue10YR4/4褐色。
粘性、しまりともに強い。クチャブロック(2~8cm大)主体。
- 3層: Hue2.5Y4/4オリーブ褐色。
粘性、しまりともに強い。
- 4層: Hue10YR4/4褐色。
粘性、しまりともに強い。クチャブロック(2~10cm大)主体。

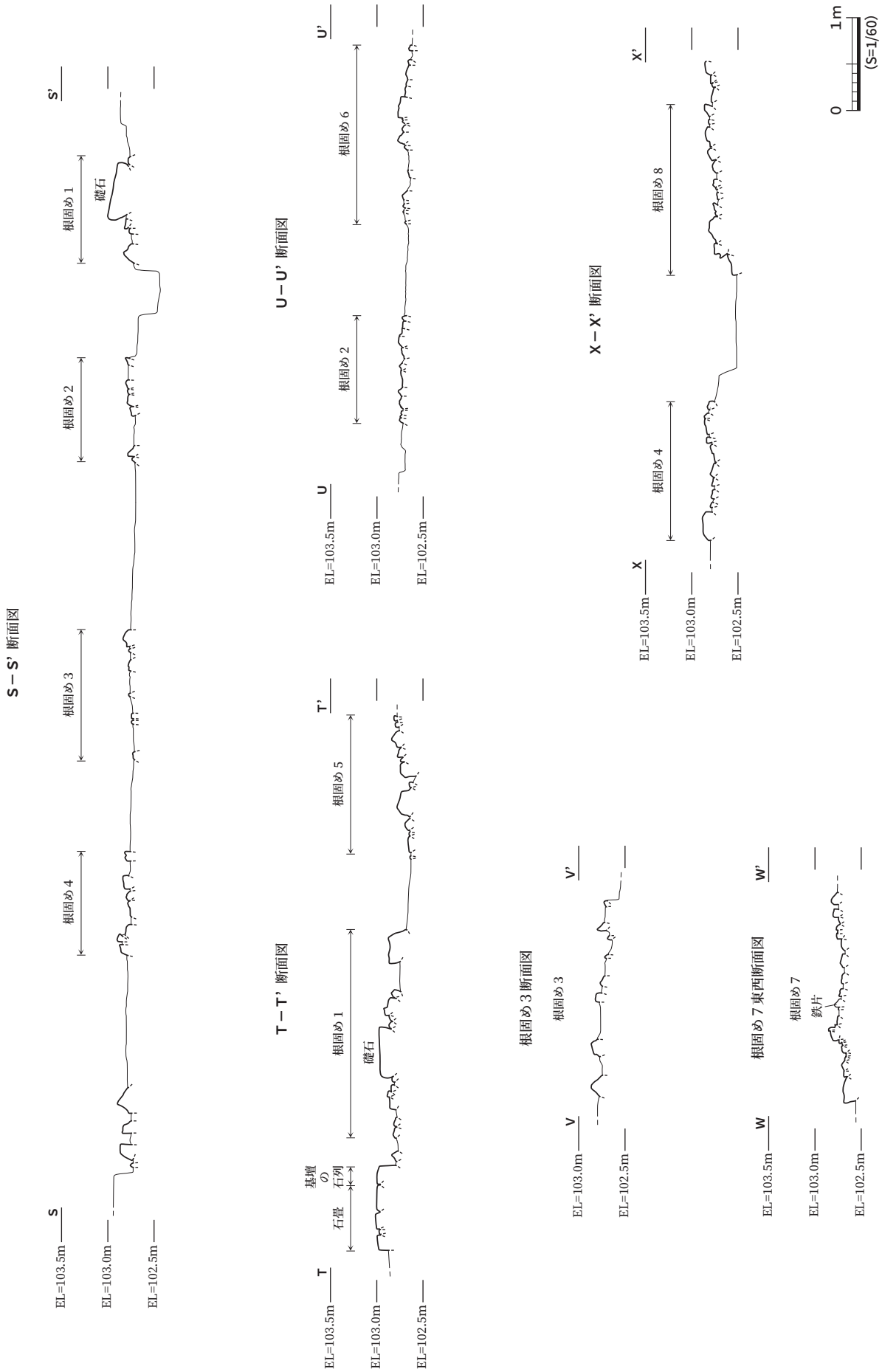
第16図 根固め石



第17図 三門地区 遺構平面図



第18図 三門地区 遺構平面図



第19図 根固め石断面図



三門地区 根固め石 検出状況（東から）



根固め1・2



根固め3・4



根固め5・6



根固め7・8

図版4 根固め石

石積み 造成土を掘り下げると、地中に構築された石積みを7基検出した。それぞれ個別に特徴を記述する。

石積1 三門基壇部から北側にかけて、南北方向にS字状に延びる。最深部では約3mにもおよぶが、根石及び地山の確認には至っていない。石積み下部には、大小の礫が根固めとして敷き詰められ、その直上に25～50cmの雑切石を用いて相方積みで石を積み上げる。石積み南側ではやや丁寧に積まれているものの、北側に行くに従い粗くなり、深度が浅くなる傾向がある。北端は沖縄戦により破壊されたとみられ、その続きを確認することはできない。石積み幅は最大約1.2m、控え石は大きいもので40cmを測り、20～30cm大の石灰岩を裏込め石に使用する。東から西へ勾配を有する。面石の表面には縦5～6cm、横3～4cm大のノミ痕が残る。このことより、面石が風化する間もなく、裏込め石を充填したことが考えられる。

石積み幅も大きく、しっかりした造りであることから、かなり深い位置から積み上げられていると考えられる石積1の機能は、大量の造成土が投入された境内東側からの造成土の土圧を抑える土留めの石積みと考えられる。石積みが放生池側にたわむ形状で積まれているのも、東側からの土圧を吸収するための工法であることも考えられる。

石積2 三門階段のうち、戦後に設置されたとみられる最上段から三段を取り外したその下から検出した。階段石牆と接する両端は50～65×65～80cm大の切石を配置し、その間に25～40cm大の切石を相方積みで丁寧に積み上げる。南北方向に延び、石積4とつながる。石積み幅は最大約40cmで、15～40cm大の石灰岩を裏込め石に使用する。勾配は持たず、ほぼ垂直に積み上げる。石積2の機能は、土留めかつ三門階段を支える石積みであるとともに、前述した石列とつながることが判明したことにより、三門基壇の西縁をなすものであることが明らかになった。

石積2' 石積1の面石から約50cm間を置いて、東西方向に延びる相方積みの石積みである。長さ約1.8mを検出した。遺物は出土していないため、明確な時期は判別できないが、造成土直

上に根石が据えられており、石積1とほとんど時期差が無いものと考えられる。機能としては、石積1を補強するものと考えられる。なお、面石の控え部分には火を受けた痕跡を見ることができる。

石積3 石積み2'の西端から南北方向へ延びる、裏込め石を有する石積みである。西側面は近世期の造成土で埋められており、詳細は不明であるが、石積1・2と同時期に構築された土留めの石積みと考えられる。土留めの石積みを二重に施すことで(石積1及び3)、放生池側にかかる土圧に対し、より強固な地盤の形成を図ったものと考えられる。

石積4 南北方向から東西方向に向けて屈曲する石積みで、石積2、3とつながる。

石積5 石積3を起点にして東西方向に延びる、裏込め石を有しない石積みである。根石は検出されていない。一部火を受けた痕跡が見られる。今回の調査で検出されたのは全体の一部であるため、機能についてははっきりしない。

石積6 石積5を起点にして南北方向に延びる野面積みの石積みである。根石は検出されていない。控え部分の造成土からは明朝系瓦が出土している。石積5同様、検出は一部だけのため、機能についてははっきりしない。

それぞれの構築時期について、石積1～4は円覚寺創建時の基礎事業、石積5、6については明朝系瓦の出土より、近世期と考えられる。なお、文献史料では1652年と1697年に三門修復の記録が見られる。したがって、石積5、6はいずれかの時期の修復工事に伴う基礎事業の改変を示唆するものの可能性がある。

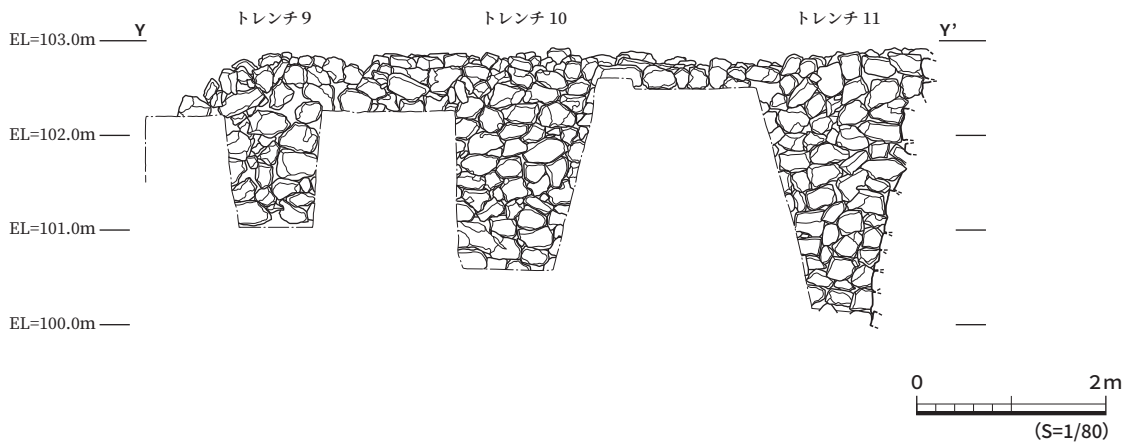


三門北側 石積1～6 (北から)

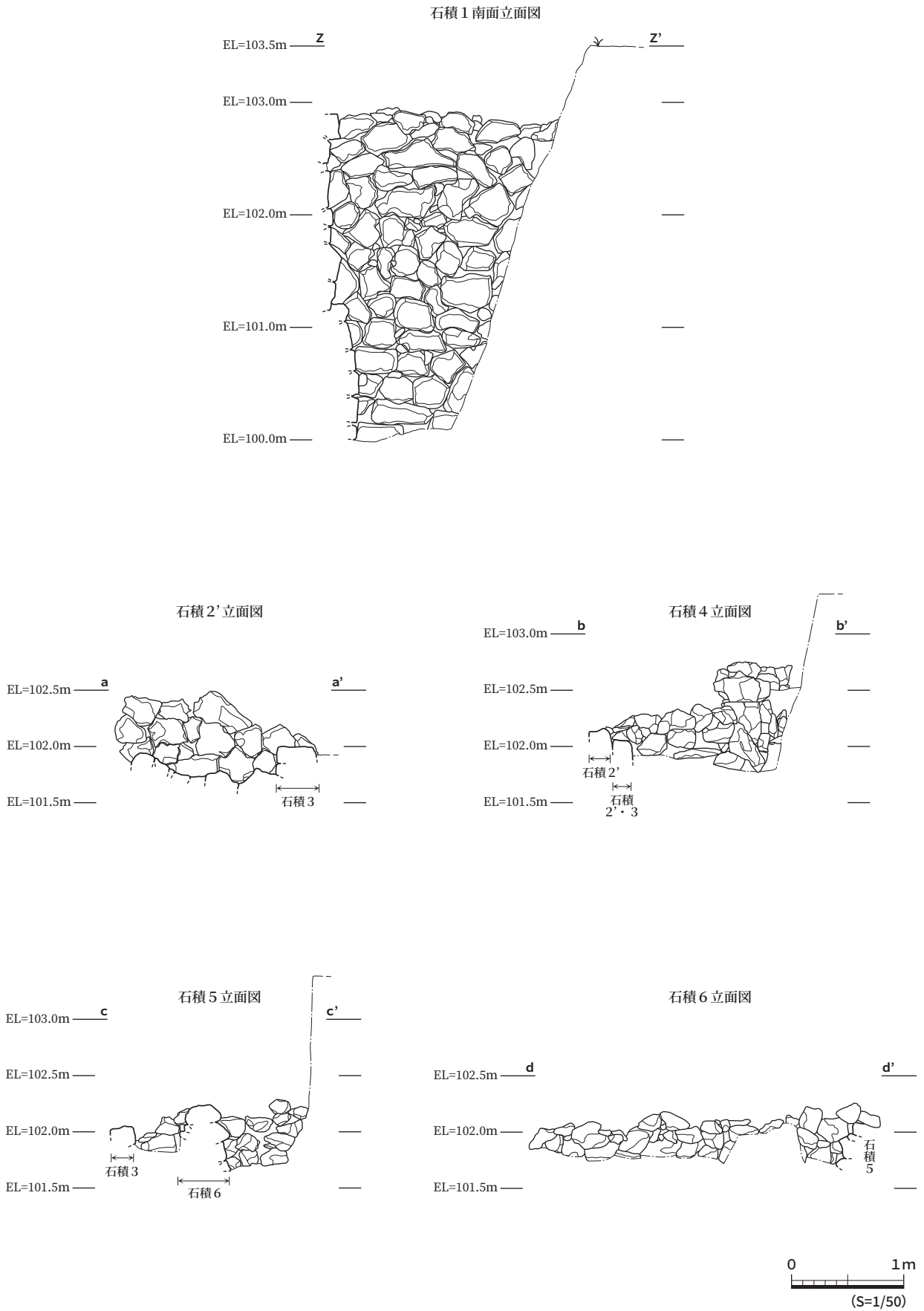
第20図 石積1～6



石積1 東面立面図



第22図 石積1～6



第 23 図 石積 1～6 立面図



石積1 (トレンチ 11内 西から)



石積1 (トレンチ 11内 北から)



石積1 (トレンチ 11内 北西から)

図版5 石積1 (三門北側)



石積2'・3・4 (北西から)



石積2' (東から)



石積2'・4 (北から)



石積3 (西から)



石積3 (南西から)

図版6 石積2'・3・4



石積5・6 (西から)



石積5・6 (北東から)



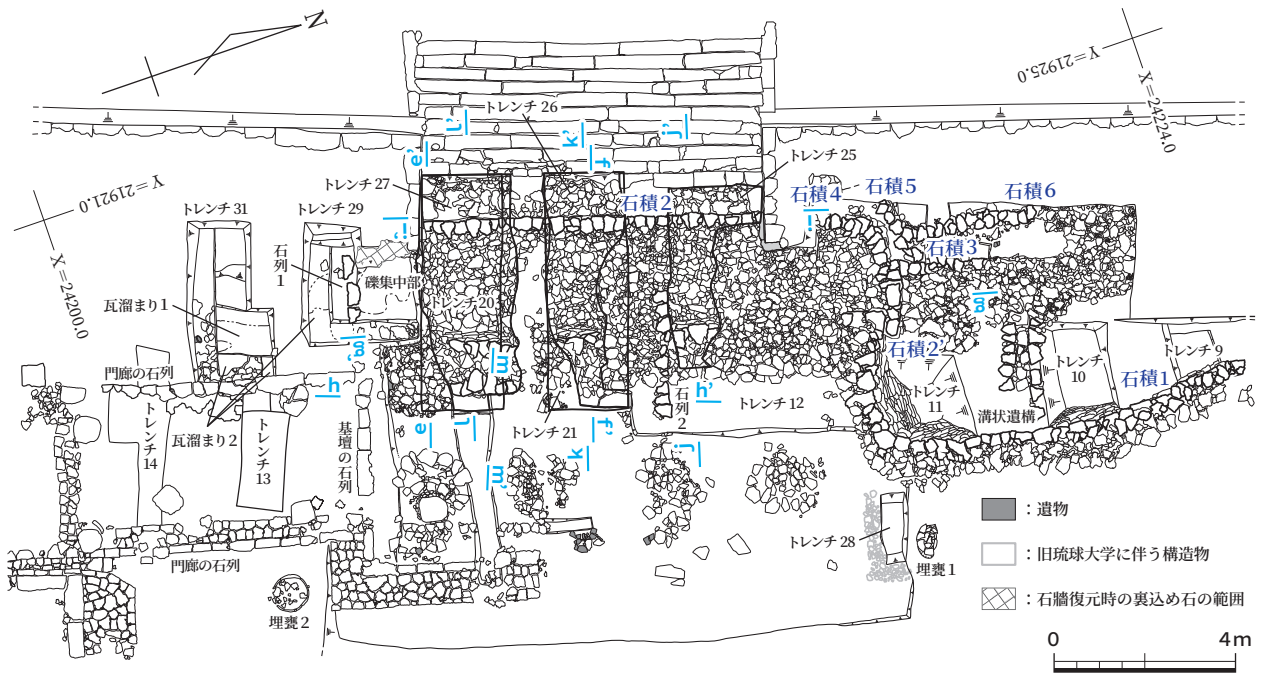
石積6 (西から)

今回検出された7基の石積みのうち、石積1と2は三門地区における造成の様相を知るうえで重要となるため、検出状況について詳細を整理する。

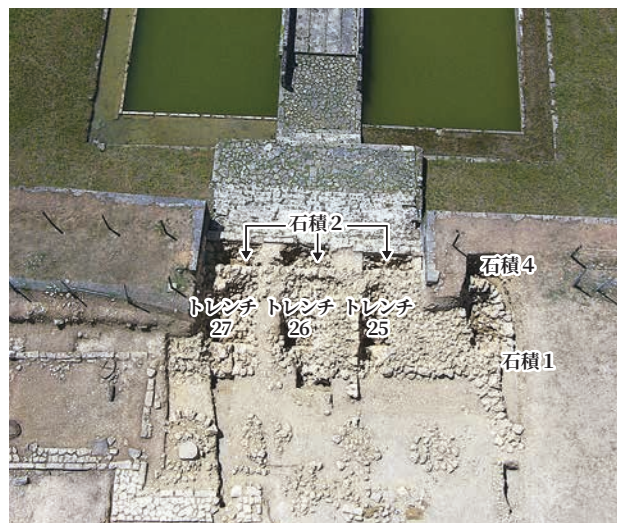
最初に石積2を検出したのはトレンチ20、21の調査時(平成22年度)である。第24図のようにトレンチ掘りを行った際、戦後に復元された三門階段下より石積2を検出し、これにより石積4と一連のものであることが明らかになった。その後、トレンチ25～27の調査(平成25年度)

によって、裏込め石に埋もれた石積1を検出したことで、三門地区における造成の様相が明らかになった。

第27図m-m'土層断面では石積1の掘方が確認されない。つまり、土留めの石積みを先に構築した後に土砂を投入したものと考えられる。さらに石積1の西側には石灰岩礫を投入することで、石積2の裏込め石としての機能に加え、放生池側に向かって流れる雨水の排水を効率よくすることを意識したものと考えられる。

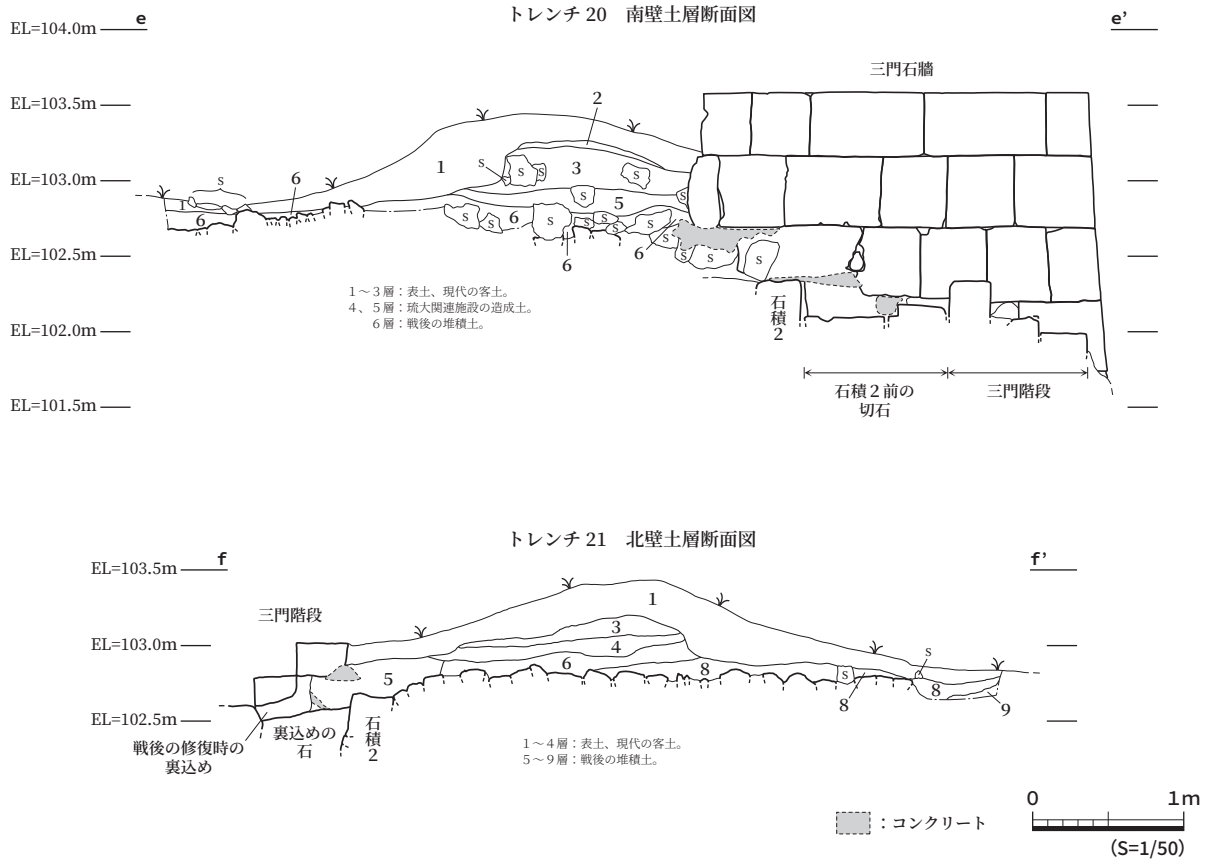


トレンチ 20・21 設定状況 (H22 年度)



トレンチ 25・26・27 設定状況 (H25 年度)

第 24 図 三門地区 遺構平面図



トレンチ 20 南壁 (北から)



トレンチ 20 南壁 (北から)

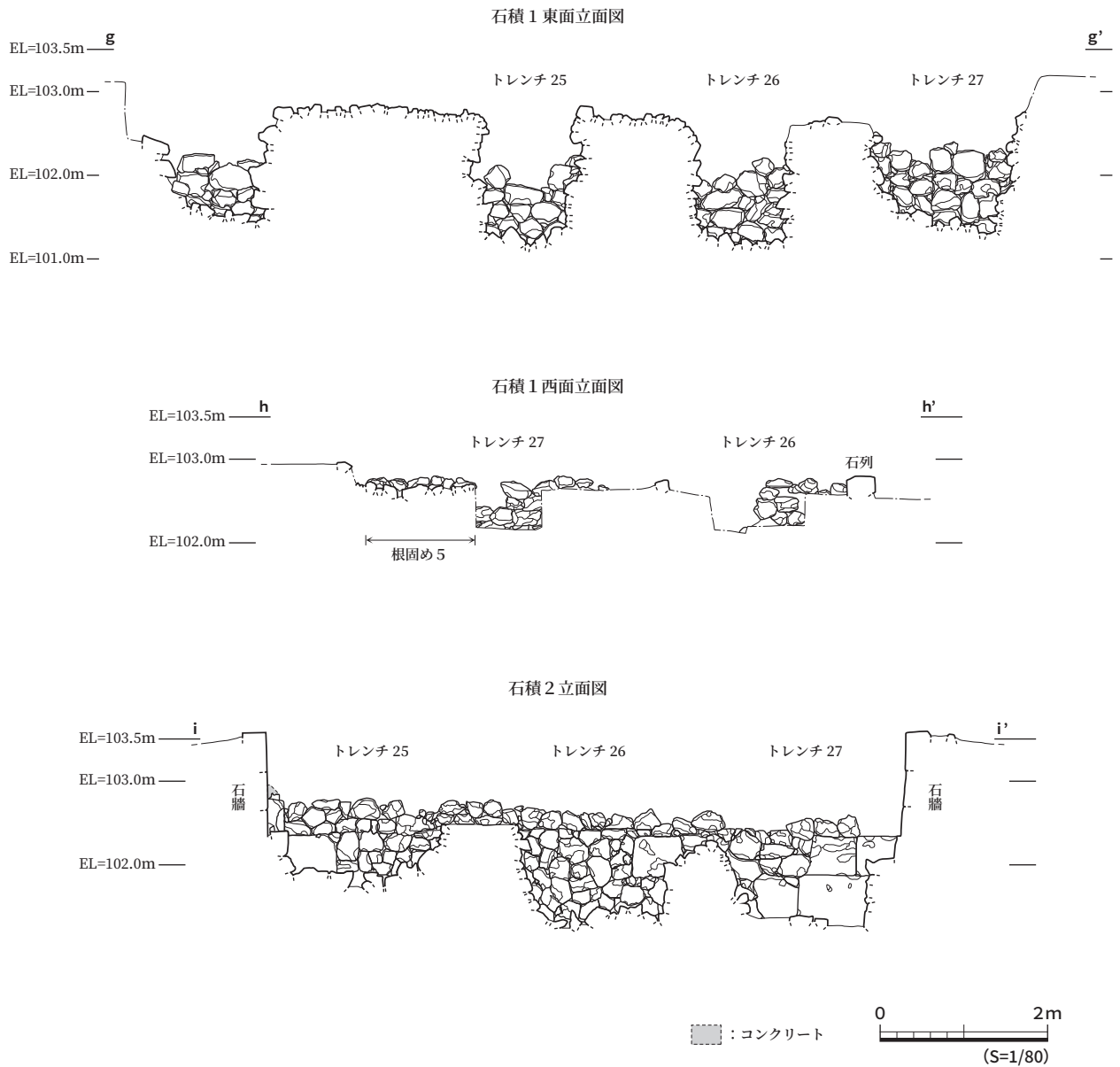


トレンチ 21 北壁 (南から)



トレンチ 21 北壁 (南から)

第 25 図 トレンチ 20、21 土層断面図

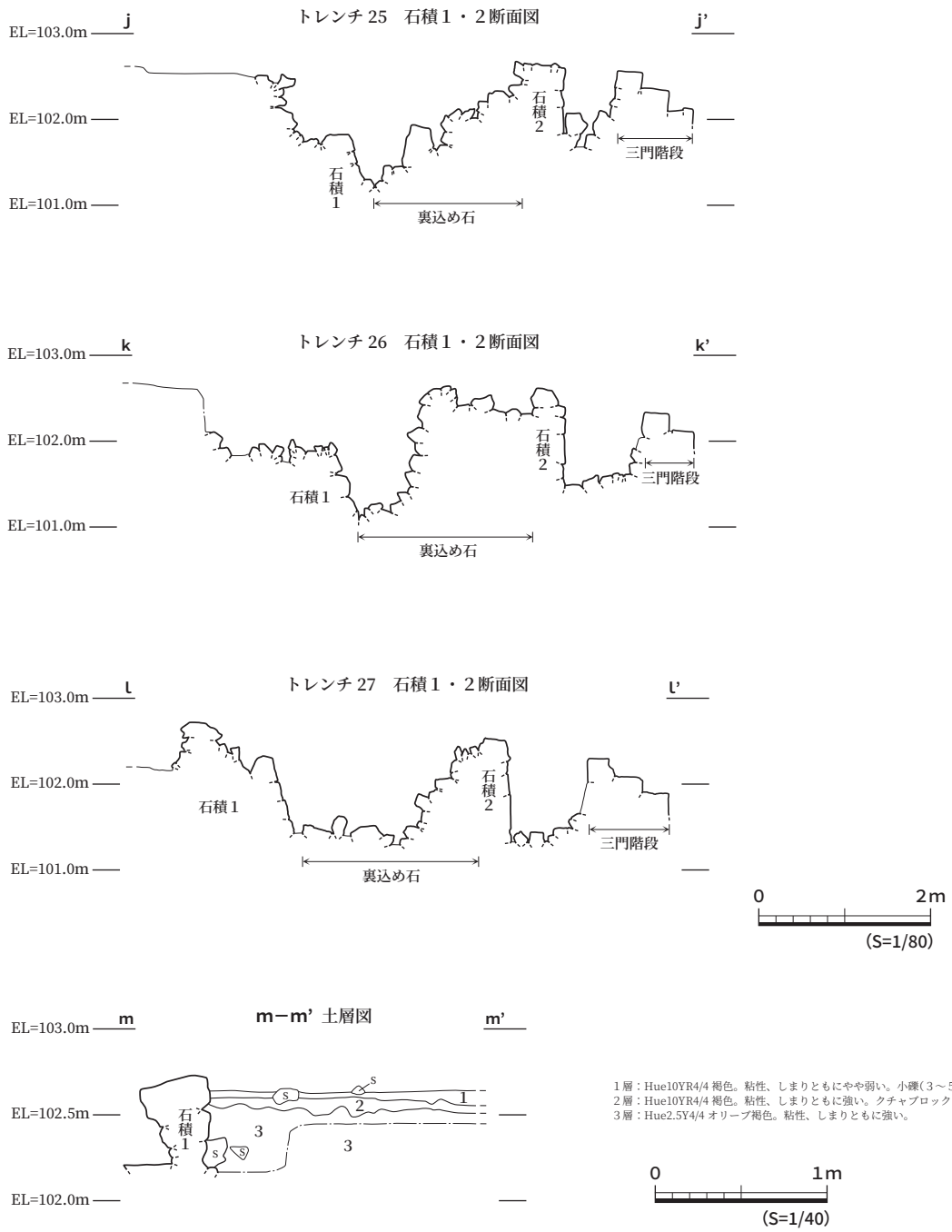


石積1 (トレンチ 25内 北から)



石積1 (トレンチ 27内 北から)

第 26 図 石積1・2



m-m' 断面 (南から)

第 27 図 石積 1・2 断面図、造成土堆積状況



石積1西面（トレンチ27内 西から）



石積1西面（トレンチ25内 西から）



石積1（トレンチ26内 西から）



石積1東面（トレンチ27内 東から）



石積1東面（トレンチ26内 東から）

図版8 石積1（三門基壇部）



石積2西面（トレンチ 25～27内 北から）



石積2西面（トレンチ 25内 西から）



石積2（トレンチ 26内 西から）



石積1・2西面（トレンチ 27内 西から）



石積2（トレンチ 27内 西から）

図版9 石積2

三門の基壇高の検討

三門の復元に際し、重要となるのは三門基壇高の検討である。その三門基壇高を検討するにあたり、遺構として残る三門礎石や三門階段、基壇遺構などとの関係性が手掛かりとなる。そこで、原位置に残る三門礎石の高さを三門基壇高の参考資料とし、三門階段や基壇遺構との位置関係を整理するために、総門から三門礎石までの断面図を作成した(第28図)。

現況の三門階段10段(11～13段のコンクリート製を除く)の蹴上高と踏み面幅の平均値から割り出した13段目は、三門礎石の底面の高さとの高低差が約4cmとあまり差が無い。続く14段目の位置は、三門基壇と考えられる石積2の位置と符合する。これらのことより、三門階段は13段、14段目が三門基壇となることが考えられる。

因みに古写真に見える階段最上段の石は、他の段と比べ、材質や高さが異なっているように見えることから、三門の基壇である可能性が高い。このように古写真からも三門階段が13段、14段目が三門基壇になることがうかがえる。

なお、三門階段について、往時の階段にかさ上げしているのではという考え方もあった(第28図の②を往時の階段ラインとする考え方)。しかしながら階段を観察すると、②で示す段は放生池側に面を持たず、階段側面にあたる北側に面を持っていることから、階段の踏み面とは考えにくい。また、仮に階段と想定した場合、13段目は三門礎石の底面より低くなる。さらにその位置が基壇と考える石積2の位置に来るため、階段数は12段となり、古写真と合わない。これらのことより、②で示すラインは階段の基礎遺構と考えられる。

整理すると、三門礎石の高さを三門基壇高と想定し、三門階段や基壇遺構(石積2)などの位置関係を検討した結果、①が階段ライン、②が階段の基礎となり、段数は13段、14段目は三門基壇となることが考えられる。また三門階段自体は、往時と位置は大きく変わっていないものの、踏み面にあたる石は往時の材を使用しつつ、積み直しなどの改修がなされたものと考えられる。



三門階段 取り外し前 (西から)



三門階段 取り外し前 (北西から)

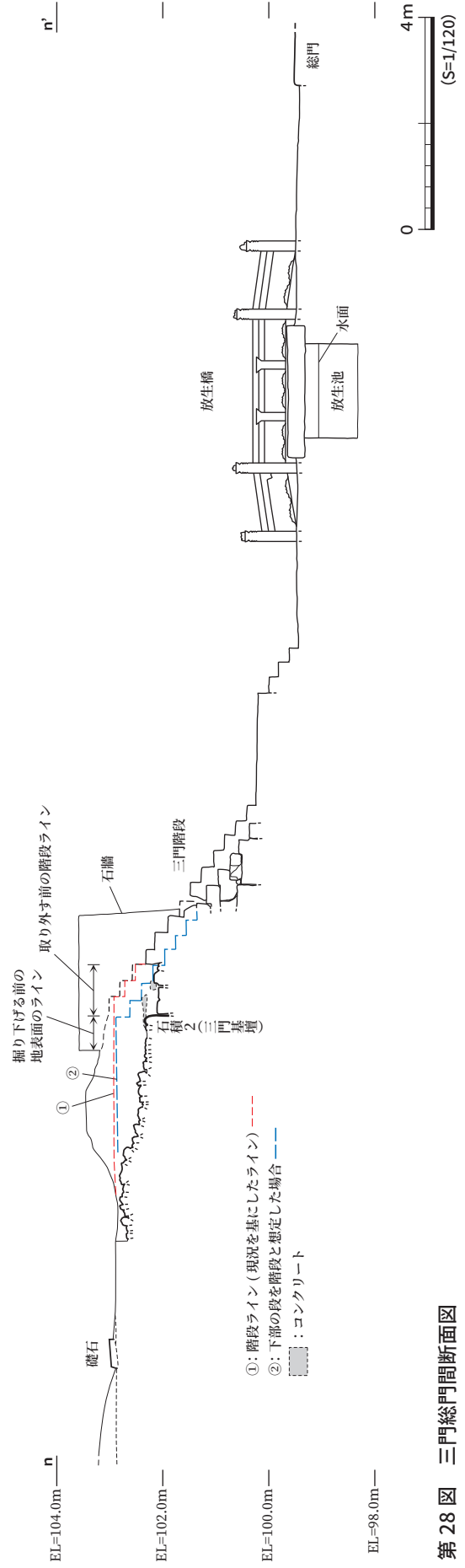
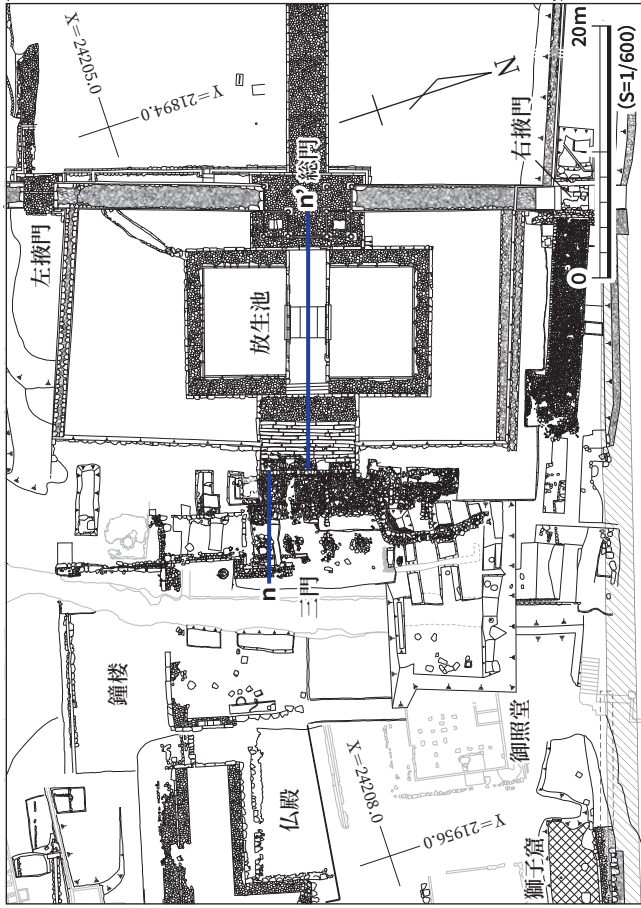


三門階段 (西から)



三門階段 (北から)

図版 10 三門階段

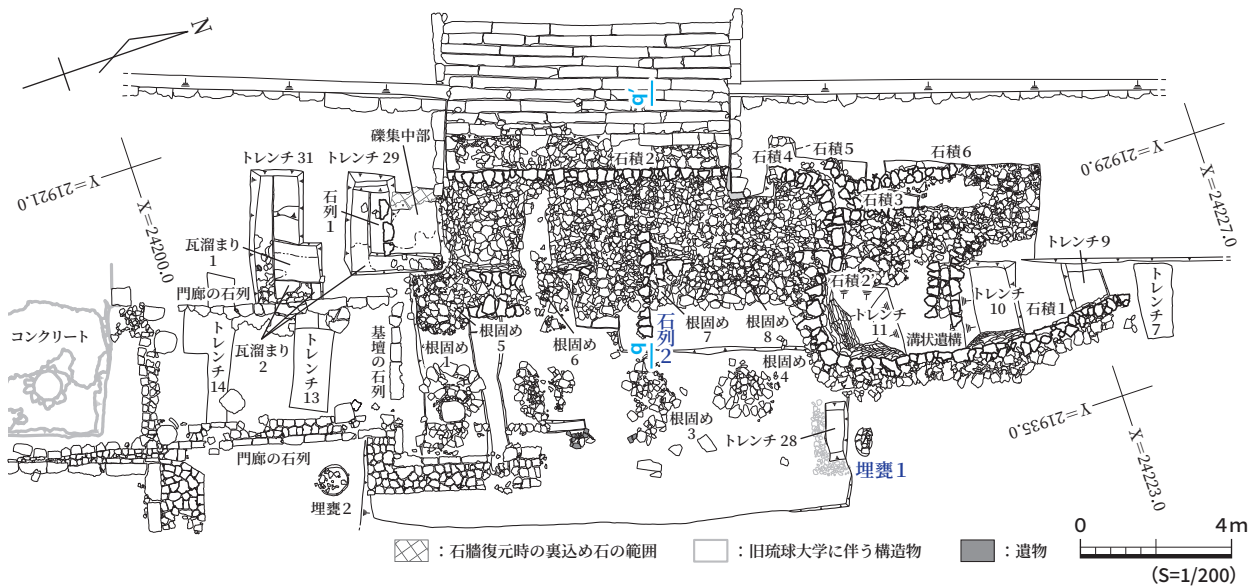


第28図 三門総門間断面図

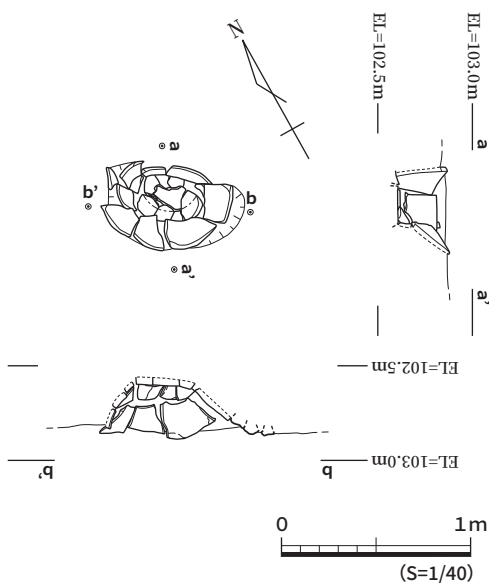
埋甕 1 三門北側で埋甕を1基検出した。埋甕は、防火用の水甕として三門基壇の南東、北東両隅に1基ずつ左右対称に設置されていたことが戦前に撮影された古写真に残っている。過去の調査では基壇南東側の1基(埋甕2)を確認していたが、今回は基壇北東側の1基を検出した。

埋甕残存部の最大径は約70cm、深さ約30cmで、内部の堆積土中にはビー玉やプラスチック製品等の現代遺物が含まれ、戦前まで水甕として機能

していた可能性を示している。平面の残存状況は、北側破片が甕の内側に地盤ごと押し込まれたように楕円形を呈しており、その北側の攪乱部で砲弾片が多数出土していることから、被弾による衝撃で変形した可能性が高い。なお、北側の攪乱部からは、同一個体と思われる大甕胴上部の破片が多数確認できることから、終戦後、被弾した砲弾穴を平場造成する際に、周辺の瓦礫とともに投入されたことが想定できる。



埋甕1平面図



埋甕1内半載状況 (北東から)

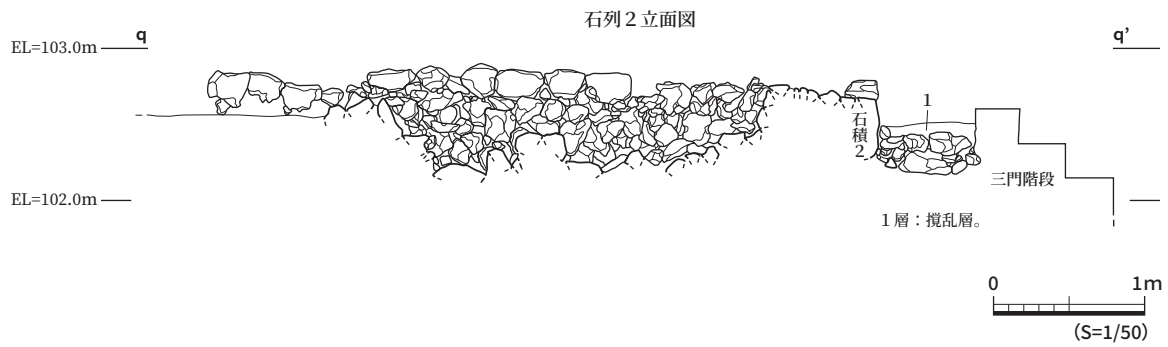


埋甕1検出状況 (南西から)

第29図 埋甕

石列2 三門基壇部で北側に面を持つ石列を検出した。当初、面側は裏込めの石で埋められていた。石列は1段で、裏込めの石の上に据えられており、裏込め石の隙間部分には小礫や土を入れて、地盤の安定を図っている。

石列2は、放生橋の延長上に位置すること、基壇西縁から根固め7の直線上に位置することにより、三門内の通路に関わる遺構の可能性も考えられる。



石列2検出状況（北から）



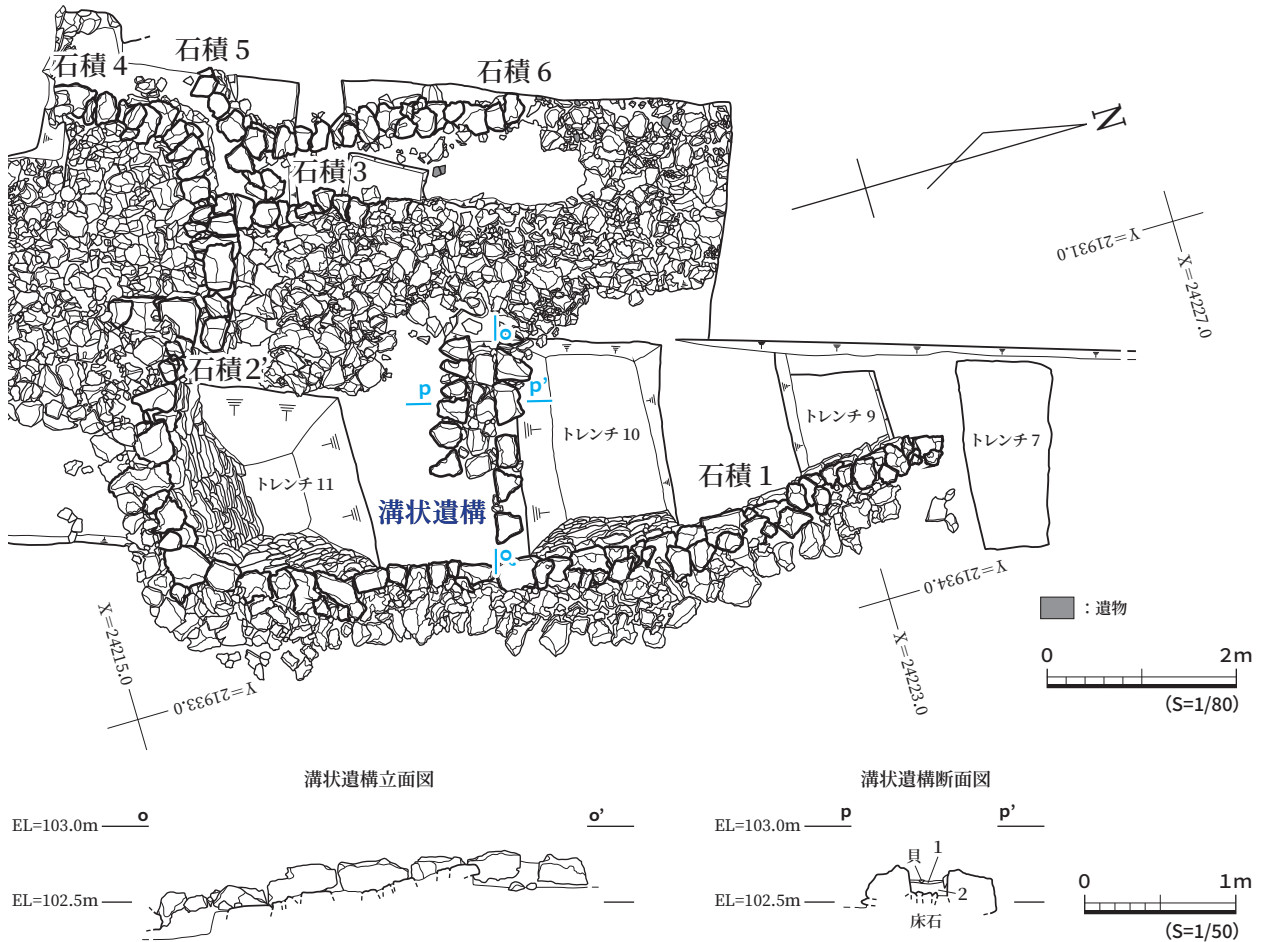
石列2検出状況（北東から）

第30図 石列2

溝状遺構 三門北側において、石積1にほぼ接する形で東西方向に延びる長さ約2.5mの溝状遺構を検出した。側石と床石で構成される。天端石は破壊されており、本来の規模は不明である。底石は西に傾斜しており、三門周辺の雨水を放生池側に排水していたと考えられるが、本遺構は旧平面図や古写真等で確認できないため、暗

渠として埋設されていた可能性が高い。本遺構の西側には、集石が敷設されている状況が確認された。おそらく溝から流れ出た雨水を池側へ誘導するための排水施設と想定される。

構築時期については、周辺から遺物は少なく、不明であるが、造成土上に構築されていることにより、三門の構築と同時期の可能性もある。



溝状遺構検出状況（北から）



溝状遺構検出状況（西から）

第 31 図 溝状遺構

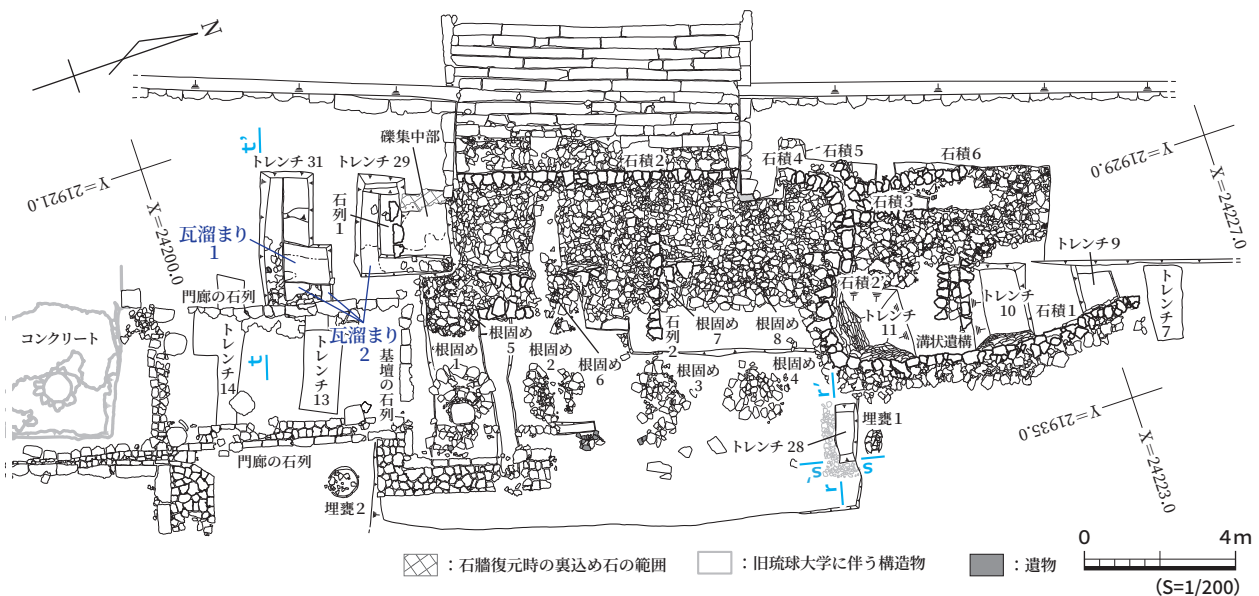
瓦溜まり 多くの瓦片がまとまった状態で、2基検出した。三門は瓦葺きの建物であったことより、これらの瓦片は瓦の葺き替えの際に廃棄されたものと考えられる。

瓦溜まり1 赤色瓦の破片を主体とする。現代遺物も混じって検出されたため、戦後に廃棄されたものと考えられる。

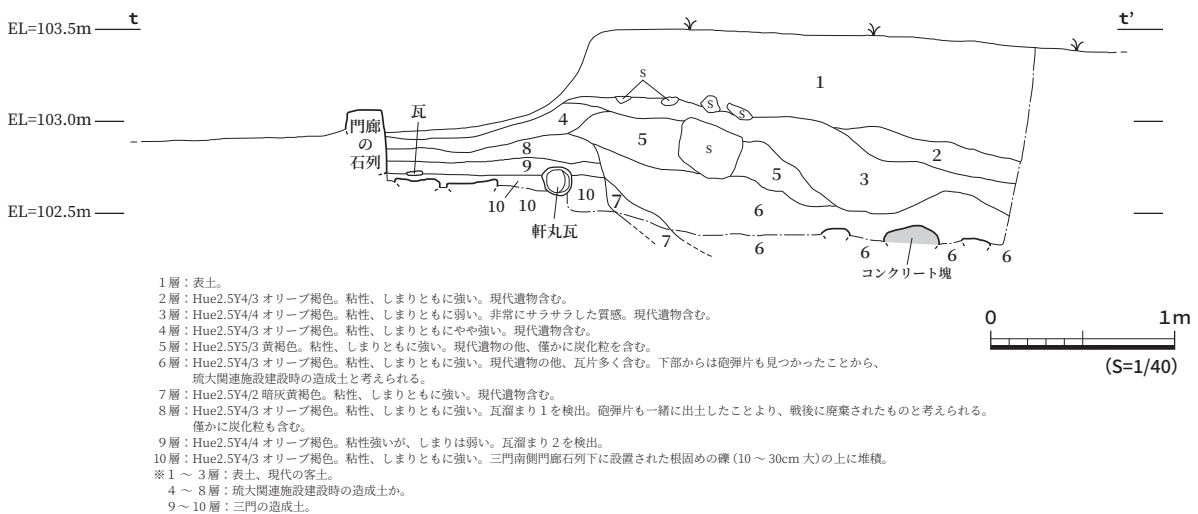
瓦溜まり2 灰色瓦と赤色瓦片が混在する。漆喰の破片も多い。トレンチ29とトレンチ31で検出された。中国産白磁の小碗(第42図28)や沖縄

産施釉陶器(第42図29)が共伴したことより、19世紀以降に廃棄されたものと考えられる。

今回、時期の異なる瓦溜まりを2基検出した。
 なお、文献史料には1588年、1652年、1697年の3回、三門の改修が行われた記録があり、いずれも近世期における改修である。しかしながら、今回発掘された瓦溜まり1は戦後における廃棄、瓦溜まり2は19世紀以降の廃棄を示すことから、記録に残らない三門の改修がなされていた可能性が示唆される。



トレンチ 31 南壁土層図



第32図 瓦溜まり1、2



トレンチ 31 南壁（北から）



トレンチ 29・31 瓦溜まり1・2検出状況（東から）



トレンチ 29 瓦溜まり2検出状況（東から）



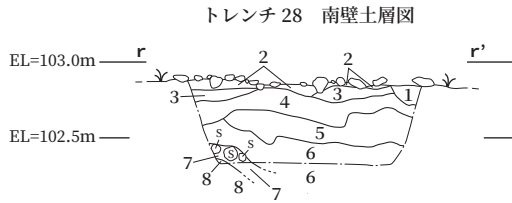
トレンチ 31 瓦溜まり1・2検出状況（東から）



トレンチ 31 瓦溜まり1・2近景（東から）

集石 5～15 cm 大の石灰岩礫がL字状にまとまって検出された。発掘調査当時(平成25年度)は詳細不明の集石遺構として記録した。

しかしながら、その後の資料整理作業によっ

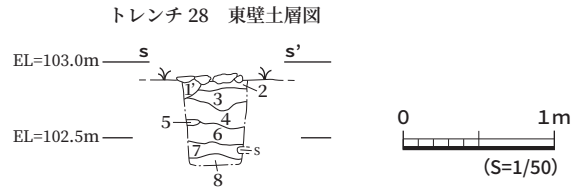


- 1層：攪乱層。
- 1層：枝サンゴを多く含む攪乱層。植栽によるものか。
- 2層：Hue10YR4/4 褐色。やや粘性のある砂質シルト。しまりやや弱い。
- 3層：Hue2.5YR5/2 暗灰色。やや粘性のある砂質シルト。しまりやや弱い。クチャブロック (2～3cm 大)を含む。



トレンチ 28 南壁 (北から)

て、平成20年度の三門北側における発掘調査で確認された琉球大学関連の石積とつながることが判明した。



- 4層：Hue10YR4/4 褐色。やや粘性のある砂質シルト。しまり強い。クチャブロック (2～6cm 大) 主体。
- 5層：Hue10YR4/4 褐色。やや粘性のある砂質シルト。しまり強い。クチャブロック (2～8cm 大) 主体。
- 6層：Hue10YR4/4 褐色。やや粘性のある砂質シルト。しまり強い。クチャブロック (2～10cm 大) 主体。
- 7層：Hue2.5Y5/4 黄褐色。粘性の強い砂質シルト。しまり弱い。石灰岩礫 (2～8cm 大) 主体。
- 8層：Hue2.5Y5/4 黄褐色。粘性の強い砂質シルト。しまり強い。クチャブロック (2～5cm 大) 主体。



トレンチ 28 東壁 (西から)

第33図 集石

遺構小結

以上、三門地区における遺構について報告した。

検出された遺構は、将来の三門復元に向けて重要な基礎資料となるものである。そこで、検出遺構から想定される三門基壇の範囲と、根固め石から想定される柱配置を第34図に示す。

検討の結果、基壇規模は南北約10.8m、東西約7.9m、基壇床面積約85.32㎡を測る。

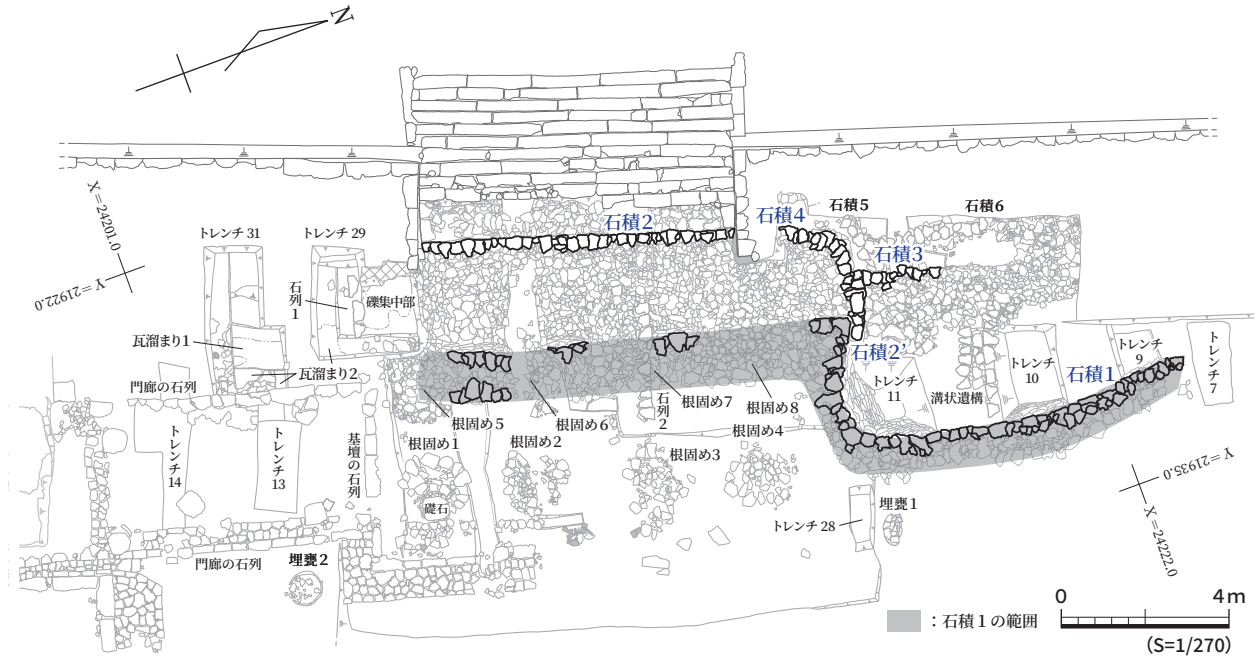
三門地区の遺構を時期別に整理したものが第35～38図である。最初に土地の基盤作りとして

土留めの石積1、2'、3、4を構築する。その後土砂や石灰岩礫を投入して、土留め兼三門基壇及び階段を支える石積2など、地下の遺構を構築する(第35図)。続いて三門基壇や根固め、門廊、溝状遺構、埋甕など三門関連の遺構を配置する(第36図)。三門の階段も土留めの石積み巡らせた後に構築したと考えられ、首里城跡美福門でも類似する遺構が見ついている。

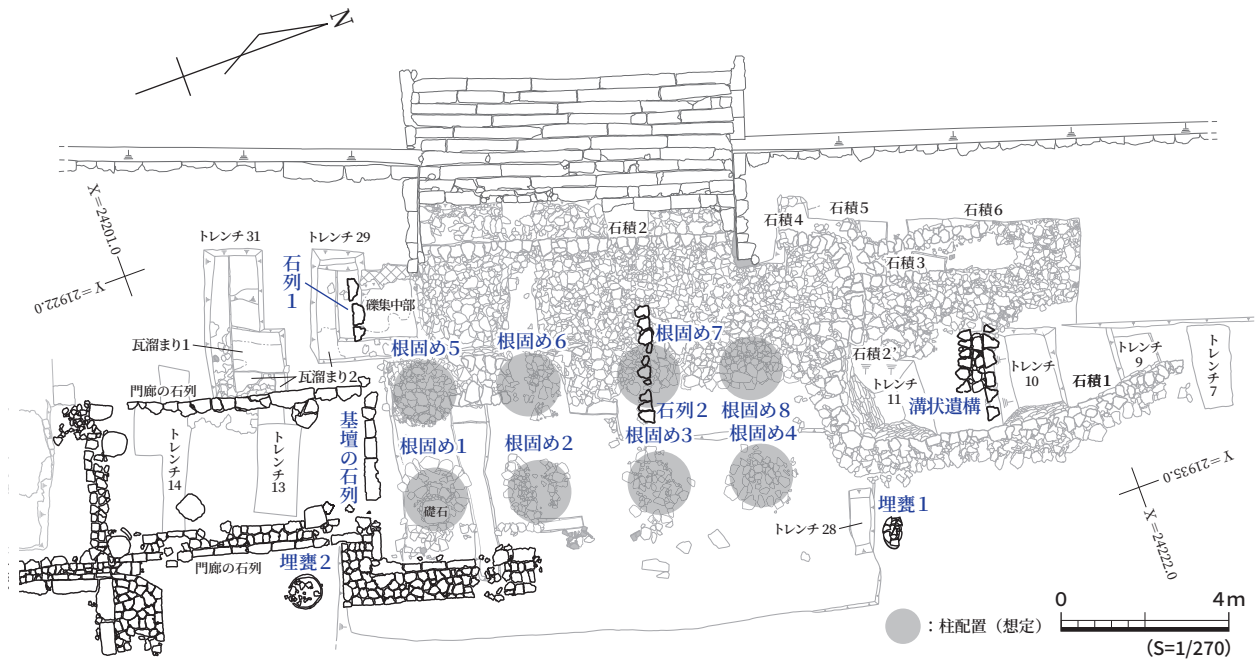
その後、改修または別理由に伴い、石積5、6を構築する(第37図)。最も新しい時期の遺構が瓦溜まり1、2である(第38図)。



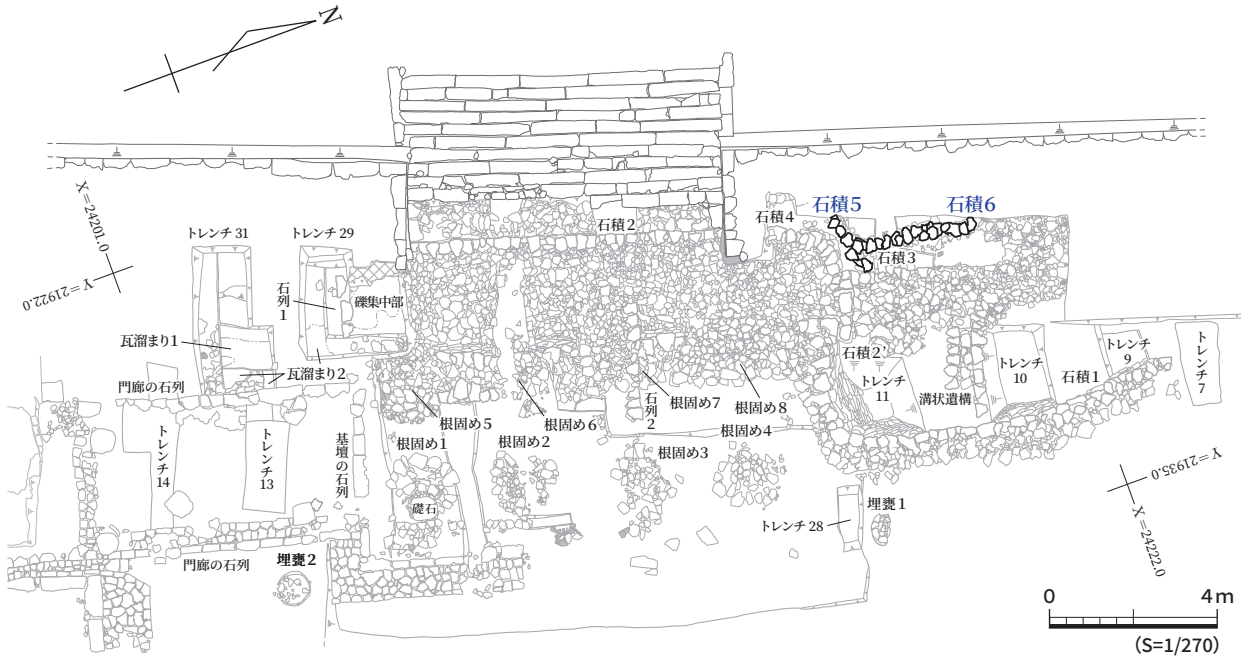
第34図 三門基壇想定図



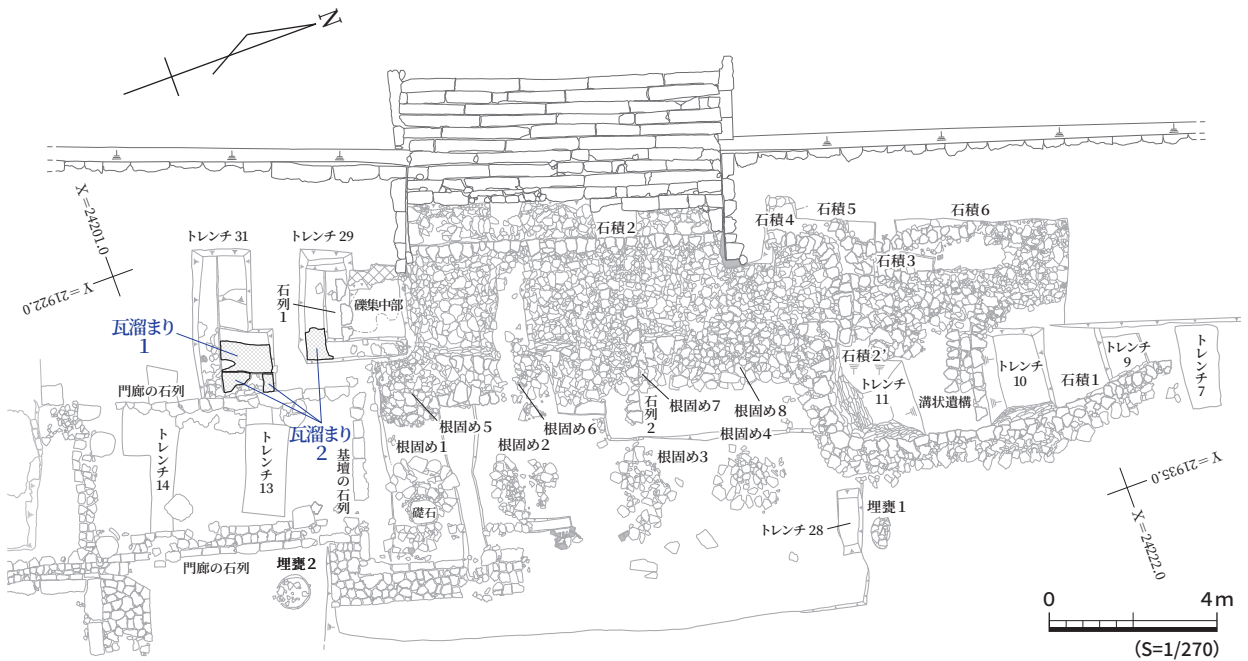
第35図 石積1～4



第36図 根固め石・溝状遺構・埋甕



第 37 図 石積 5・6



第 38 図 瓦溜まり



遺構検出状況（南東から）



遺構検出状況（東から）

図版 12 三門地区 遺構検出状況

2 遺物

三門地区からは総数293点の遺物が出土している(第2表c)。種類別にみると、中国・タイ・日本・沖縄産の陶磁器、土器、銭貨、鉄製品、瓦、埴、石材、漆製品、脊椎動物遺体、貝類遺体などが出土している。最も多いのは瓦である。陶磁器に関しては、15世紀後半～16世紀代に位置づけられる資料が造成土から出土している。これらは円覚寺創建時の様相を示すもので重要である。

ここでは、31点を図化し、33点の写真を掲載している。以下に種類別に記す。個々の所見は遺物観察表にまとめている。

なお、中国産の青磁碗・皿については、瀬戸・仁王・玉城・宮城・安座間・松原による沖縄出土分類(2007)を基本として分類を試みた。中国産の白磁碗・皿については、森田1982、新垣2005を参考として分類を行い、分類記号は分類2007の分類記号があるものはこれを付した。中国産青花の碗・皿については、小野1982を基本とし、分類記号も小野分類を付した。後述する「第4節 表土・攪乱層の遺物」についても同分類を付している。

中国産青磁 碗、皿、盤など17点出土しており(第2表a)、その中から9点を図化した。その多くはV類やVI類に分類される製品である。さらに外面文様より、0類(無文)、1類(蓮弁文)と細分を行った。

碗 V-0類(6)、V-1類(16)、VI-1類(4、17)

皿 V類(7)、V-1類(1)、VI-0類(2、3)

中国産白磁 碗、小碗、皿、小杯、人形など10点出土しており(第2表a)、その中から3点を図化した。

産地は景德鎮窯系、福建系、徳化窯系の製品がみられる。

8は皿DII群で福建産、20は皿E群で景德鎮窯系、28は小碗で徳化窯系である。

中国産青花 碗、皿、瓶など11点が出土しており(第2表a)、その中から1点を図化した。産地は景德鎮窯系の製品がみられる。

18は明代の景德鎮窯系の製品である。

中国産褐釉陶器 壺の胴部片が9点出土した(第2表a)。

中国産色絵 1点出土した。

12は小杯で、器面に被熱の影響がみられる。

タイ産褐釉陶器 壺の胴部片が1点出土した。

本土産磁器 近世の碗が1点、近代(明治以降)の碗や小碗などが4点出土した(第2表a)。

13は肥前・波佐見の碗である。

本土産陶器 肥前産や備前産の播鉢が4点出土しており(第2表a)、その中から1点を図化した。

5は備前産の播鉢である。

沖縄産施釉陶器 沖縄産陶器の中で「上焼(ジョウヤチ)」と称される一群で、器面に釉薬や絵付けを施す製品である。碗、小碗、小杯、急須など8点が出土しており(第2表b)、その中から1点を図化した。

なお、碗及び小碗については釉薬の種類や文様の有無等より分類を行った。

碗 A類 直口口縁。灰釉単掛けで胴部以下露胎となるもの。文様の有無により2種に細分。

A-1 無文。

A-2 鉄釉の文様を施す。

B類 黒釉(鉄釉)を施釉するもの。施釉方法より3種に細分。

B-1 黒釉単掛けで胴部以下露胎となるもの。内底に鉄絵の文様を施す。

B-2 外面に黒釉、内面に白化粧+透明釉で掛け分けるもの。内底は蛇の目釉剥ぎを施す。

B-3 外面に黒釉、内面に灰釉を掛け分けるもの。

C類 白化粧+透明釉を単掛けするもの。文様の有無により2種に細分。

C-1 無文のもの。

C-2 外面に呉須で文様を描くもの。

- D類 透明釉を施釉するもの(白化粧は施さない)。
- 小碗 A類 直口口縁。灰釉単掛け。無文。
B類 黒釉(鉄釉)を施釉するもの。施釉方法より3種に細分。
- B-1 黒釉単掛けで胴部以下露胎となるもの。内底に鉄絵の文様を施す。
- B-2 外面に黒釉、内面に白化粧+透明釉で掛け分けるもの。端反口縁。
- B-3 外面に黒釉、内面に灰釉を掛け分けるもの。端反口縁。
- C類 白化粧+透明釉を単掛けするもの。器形及び文様の有無により3種に細分。
- C-1 胴部を面取りするもの。端反口縁。無文。
- C-2 端反口縁または直口口縁。無文。(29)
- C-3 外面に呉須で文様を描くもの。端反口縁。
- D類 透明釉を施釉するもの(白化粧は施さない)。

沖縄産無釉陶器 沖縄産陶器の中で「荒焼(アラヤチ)」と称される一群で、高火度で焼成された焼き締め陶器である。年代や作法から大きく2種に大別でき、17世紀前半の製品と考えられる焼き締め陶器の一群を初期無釉陶器、17世紀後半以降と考えられる一群を無釉陶器とに分けて報告する。

初期無釉陶器 湧田古窯跡を中心に焼成されたと考えられる資料で、高火度で器面に泥釉などが施釉される一群である。壺の口縁部が1点出土した(第2表b)。

無釉陶器 17世紀後半以降に焼成されたと考えられる一群をまとめた。壺、甕など3点が出土した(第2表b)。

宮古式土器 鍋が1点出土した(第2表b)。19は外面が黒色を呈し、ミガキが施される。

銭貨 銭貨は中国銭2点、日本銭4点の合計

6点が出土した(第2表b)。

14は洪武通寶、24は元祐通寶か、25と26は寛永通寶、15と27は無文銭である。

鉄製品 釘が18点出土しており(第2表b)、その中から1点を図化した。

21は角釘である。

瓦 明朝系瓦が出土している。軒丸瓦2点、軒平瓦5点、丸瓦40点、平瓦66点、丸平不明26点、合計139点出土している(第2表c)。代表的な5点について図化した。

30・32・33は丸瓦で、30と32は褐色系、33は赤色系である。22と31は平瓦で、22は灰色系、31は赤色系である。

埴 19点出土しており(第2表b)、1点について図化し、1点は写真を掲載した。埴は平面形態から分類して5タイプがみられる。分類は上原分類(2011)を参考にした。⊕の刻印がみられるものもあった。

I式

平面に敷き並べるタイプ。灰色系、褐色系、赤色系が出土している。なお、ほとんど破片資料のため、方形か三角形かは判別できない資料がほとんどであるが、方形をA類、三角形をB類とし、さらに厚みからa類(5～6cm厚)、b類(3～4cm厚)に細分される。

II式

平面形が長方形のいわゆる条埴。

III式

端部噛み合わせタイプ。褐色系、赤色系が出土している。

IV式

外観に下駄状の突起を有するタイプ。形態が方埴のものはA類に分けられる。褐色系が1点出土している。23が相当する。

その他、三門南側門廊の造成土からは朱色の漆製品が破片の状態を検出された。漆製品は2種が確認されている。

漆製品 三門南側門廊の造成土より破片の状態で2点出土した(第2表b)。2種類の製品が確

認されている。これらは土ごと取り上げた。

第39図 a の漆製品の破片は、塗膜が橙色がかかった朱色を呈する。生地部分は腐食して土質化しているが、塗膜の内側に布目が確認できる。この技法は「布着せ」といい、漆器の生地を補強するために用いられる技法である。劣化により、形状については判然としないが、器物類の可能性が高い。

次に第39図 b の漆製品の破片は、赤色の傾向

が強い朱色を呈するものである。塗膜のみの検出であり断定はできないが、布目が見られないことより、器物ではなく建築部材の塗膜の可能性はある。

なお、伴出した細かい塗膜片について、漆の成分分析を目的とした自然科学分析を行ったところ、化学組成が中国産漆の成分と近似するという結果が得られた。



漆製品の出土状況 a



漆製品の出土状況 b

第 39 図 漆製品の出土状況 a,b

第2表 三門地区遺物出土状況 a

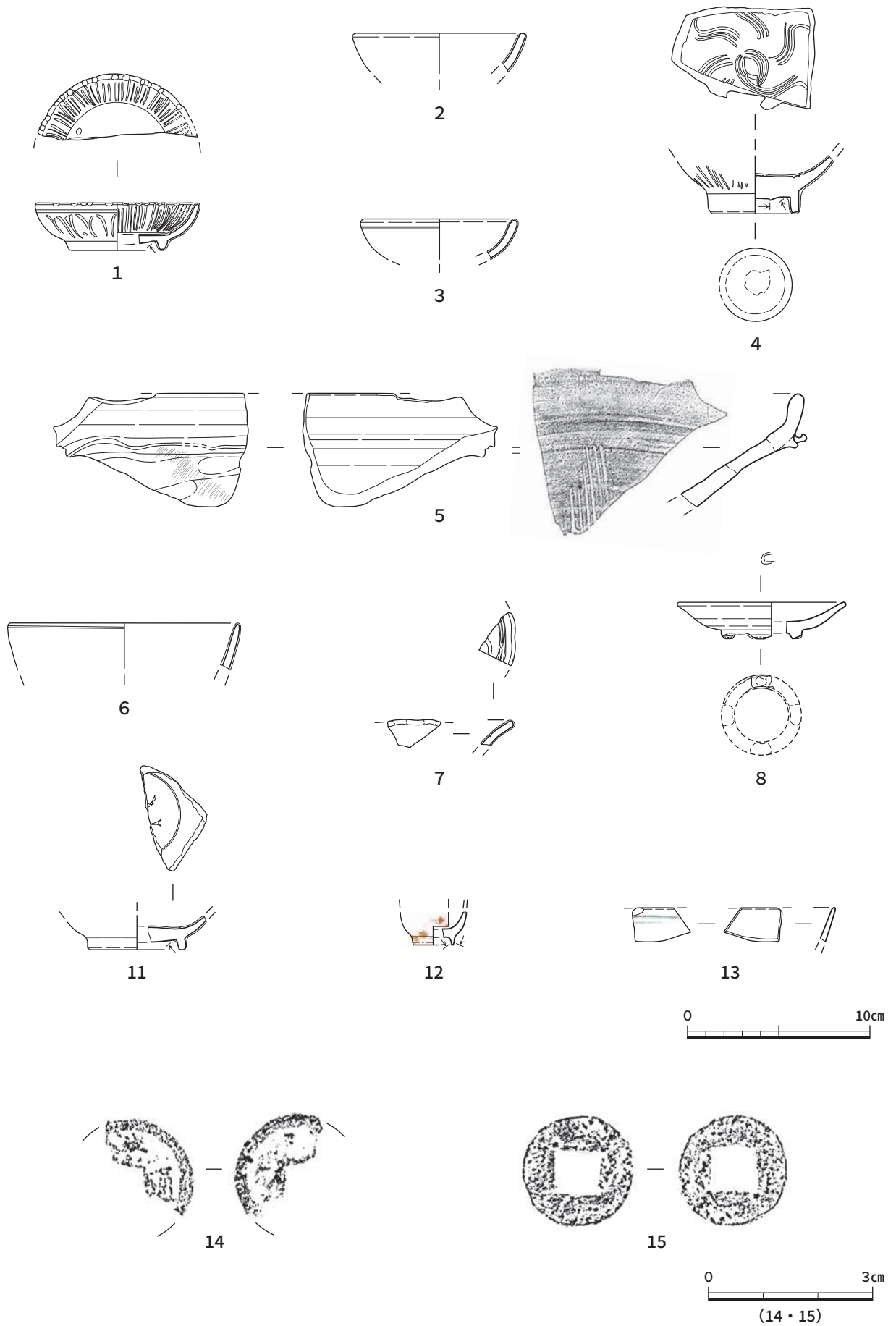
産地(国)/種類 年代/産地(窯)/器種 分類/色調 部位/その他	中国産												タイ産											
	青磁						白磁						青花				本土産							
	碗		皿		盤		福建		景德鎮		徳化		明代		清代		合計		視繪陶器		磁器		肥前・波佐見	
	V-0 口縁部	V-1 口縁部	V-1 口縁部	V-1 口縁部	V-1 口縁部	V-1 口縁部	D群 口縁部	D群 口縁部	E群 口縁部	皿 口縁部	小碗 口縁部	人形 口縁部	皿 口縁部	碗 口縁部	景徳鎮 口縁部	瓶 口縁部	碗 口縁部	碗 口縁部	碗 口縁部	小碗 口縁部	碗 口縁部	碗 口縁部	碗 口縁部	碗 口縁部
	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	底 部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部
トレンチ8 造成土下部																								
トレンチ8 造成土																								
トレンチ8 粘土質造成土																								
トレンチ11 造成土																								
トレンチ13 4層(ニード層)																								
トレンチ13 5層																								
トレンチ13 造成土																								
トレンチ27 サブトレンチ2 3層																								
造成土(1層)上面																								
造成土内																								
トレンチ8 石積1																								
トレンチ10 石積1 造成土																								
トレンチ11 石積1 12層																								
トレンチ11 石積1 造成土																								
石積1 上面																								
石積1 クチャ混わり茶褐色土																								
石積1 西側溝内																								
石積2																								
石積2 埋土																								
石積3・4 埋土																								
石積3・5																								
石積4・5																								
石積4 南側張部・埋土																								
石積5																								
石積5 埋土																								
石積5・6 埋土																								
石積6																								
石積6 埋土																								
栗石 埋土																								
集石 埋土																								
トレンチ21 裏込め内																								
トレンチ25 裏込め内																								
トレンチ26 石積2 裏込め内																								
裏込め内																								
裏込め内																								
根固め3 清掃中																								
トレンチ31 瓦溜まり1内 D.1																								
トレンチ31 瓦溜まり1内 D.2																								
トレンチ31 瓦溜まり1内 D.3																								
トレンチ31 瓦溜まり1内 D.4																								
トレンチ31 瓦溜まり2																								
トレンチ31 瓦溜まり2内 D.5																								
トレンチ31 瓦溜まり2 検出中																								
総計	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2

第3表 三門地区遺物観察一覧 a

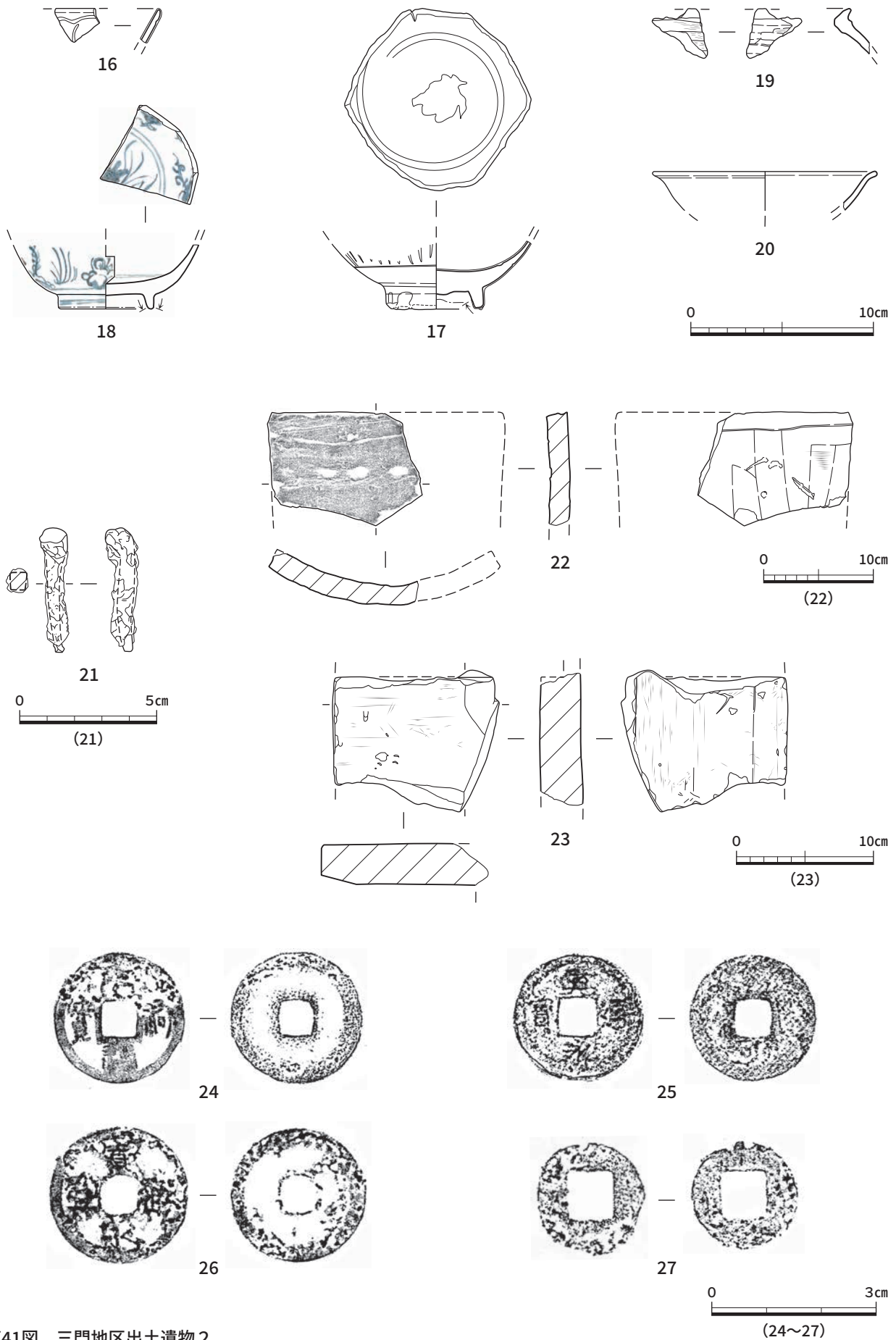
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (高さ)			
第 40 図 図版 13	1	青磁	皿	口縁部 底部	V-1類	9.0	5.2	2.6	素地は灰白色。釉は透明感のある暗 オリーブ灰色。内外面に蓮弁文。 口唇部は稜花状。	H20 三門南 トレンチ 13 4層 (ニービ層)
	2	青磁	皿	口縁部	VI-0類	9.6	—	—	素地は灰白色。釉はオリーブ灰色。 両面に貫入あり。	H20 三門南 トレンチ 13 4層 (ニービ層)
	3	青磁	皿	口縁部	VI-0類	8.6	—	—	素地は灰白色。釉はオリーブ灰色。 両面に貫入あり。外面口縁部に1本 の沈線。	H20 三門南 トレンチ 13 4層 (ニービ層)
	4	青磁	碗	底部	VI-1類	—	4.7	—	素地は灰白色。釉は透明感のある暗 オリーブ灰色。外底を蛇の目釉剥ぎ。 外面に細蓮弁文、内面に捻花文。	H20 三門南 トレンチ 13 5層
	5	本土産 陶器	播鉢	口縁部	—	—	—	—	素地は灰色で白色粒や黒色粒を含む。 器面は灰赤色を呈する。内面に6本 の櫛目。備前。	H20 三門南 トレンチ 13 5層
	6	青磁	碗	口縁部	V-0類	12.8	—	—	素地は灰白色。釉は透明感のある暗 オリーブ灰色。外面口縁部に1本 の沈線。	H20 三門南 トレンチ 13 造成土
	7	青磁	皿	口縁部	V類	—	—	—	素地は灰白色。釉は透明感のある緑 灰色。内面に文様。口唇部は稜花状。	H20 三門南 トレンチ 13 造成土
	8	白磁	皿	口縁部 底部	D II群	9.2	4.0	2.0	素地は灰白色。釉は透明感のある灰白 色で、両面に施釉。内底に重ね焼き の目痕あり。抉り入り高台。福建産。	H20 三門北 トレンチ 8 造成土下部
	9	タイ産 褐釉 陶器	壺	胴部	—	—	—	—	素地はにぶい橙色で、赤色粒や石英 を多く含む。釉は黒色で外面に施釉。 メナムノイ窯。	H25 三門 トレンチ 27 サブトレンチ 2 3層
	10	埴	—	—	Ia式	—	—	—	灰色。刻印有り。 厚さ：4.9cm 重量：460g	H25 三門 造成土 (1層) 上面
	11	青磁	皿	底部	—	—	5.0	—	素地は灰白色。釉はオリーブ灰色で、 高台内側まで施釉。両面に貫入。 内底に文様あり。	H25 三門 裏込め内
	12	中国産 色絵	小杯	底部	—	—	2.2	—	素地及び釉は灰白色。畳付を釉剥ぎ。 外面はわずかに絵付けが残るが、被 熱の影響か、文様などは不明瞭。	H25 三門 トレンチ 25 裏込め内
	13	本土産 磁器	碗	口縁部	—	—	—	—	素地は灰白色。被熱の影響か、文様 などは不明瞭。波佐見。	H25 三門 裏込め内
	14	銭貨	洪武 通寶	—	—	—	—	—	銭文：洪口通口。初鑄年：1368年。 明。鑄のため、銭文はやや不鮮明。 厚さ：0.2cm 重量：1.7g	H25 三門 裏込め内
	15	銭貨	無文銭	—	—	—	—	—	外径：2.0cm 孔径：0.8cm 厚さ：0.1cm 重量：1.5g	H25 三門 根固め 3 清掃中
第 41 図 図版 14	16	青磁	碗	口縁部	V-1類	—	—	—	素地は灰白色。釉はオリーブ灰色で、 両面に貫入あり。	H20 三門北 石積 1 上面
	17	青磁	碗	底部	VI-1類	—	5.0	—	素地は黄灰色。釉はオリーブ灰色で、 高台内側まで施釉。両面に貫入。 内底に文様あり。畳付に胎土目付着。	H20 三門北 トレンチ 8 石積 1
	18	青花	碗	底部	—	—	5.0	—	素地は灰白色。外面に唐草文。景德 鎮窯。明代。内面にも文様有り。	H20 三門北 トレンチ 11 石積 1 12層
	19	宮古式 土器	鍋	口縁部	—	—	—	—	胎土は橙色で、白色粒を多く含む。 外面はミガキが施され、黒色を呈する。 内面は工具によるナデが施される。	H25 三門 トレンチ 26 石積 2 裏込め内
	20	白磁	皿	口縁部	E群	12.3	—	—	素地は灰白色。釉は不透明な灰白色 で、両面に施釉。景德鎮窯。	H21 三門北 石積 3・5
	21	鉄製品	角釘	—	—	4.5	—	0.6	全体的に錆膨れがみえる。 重量：6.6g	H21 三門北 石積 5・6 埋土

第3表 三門地区遺物観察一覧 b

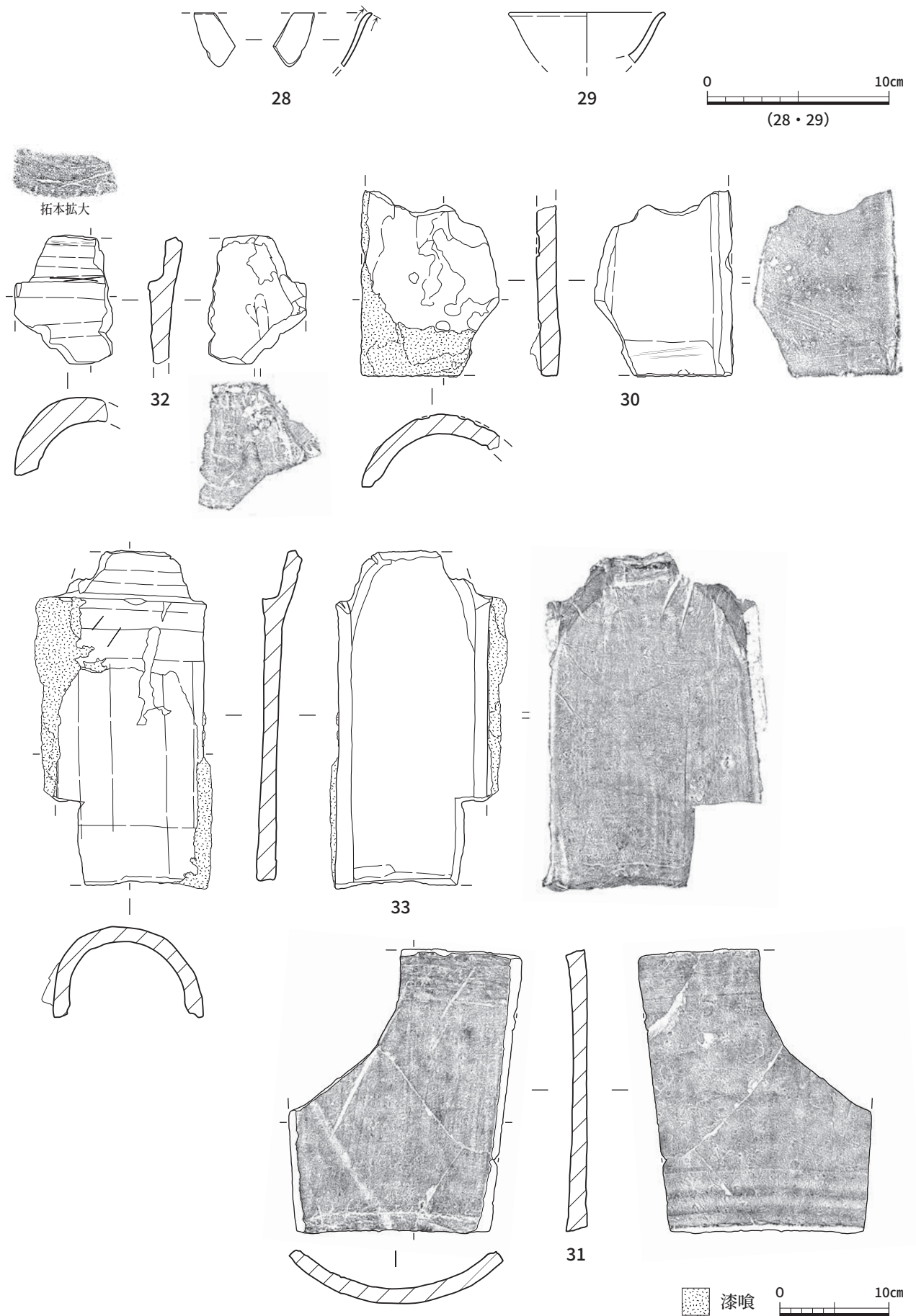
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
					口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第 41 図 図版 14	22	明朝系 平瓦	—	広端部	—	—	—	灰色。凹面に布目痕と桶板綴り紐圧痕がみられる。最大厚：2.0cm 重量：380g 角1	H21 三門北 石積5・6 埋土
	23	磚	—	—	IV式	—	—	褐色。裏面の端部は斜めに薄く削りが施される。厚さ：3.0cm 重量：440g	H21 三門北 石積6 埋土
	24	錢貨	元祐 通寶？	—	—	—	—	錢文：○祐通寶。篆書。 初鑄年：1086年。北宋。 外径：2.4cm 孔径：0.6cm 厚さ：0.11cm 重量：2.4g	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり1内 D.2
	25	錢貨	寛永 通寶 3期	—	—	—	—	錢文：寛永通寶。3期。 外径：2.32cm 孔径：0.65cm 厚さ：0.1cm 重量：2.2g	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり1内 D.3
	26	錢貨	寛永 通寶 3期	—	—	—	—	錢文：寛永通寶。3期。 外径：2.45cm 孔径：0.7cm 厚さ：0.11cm 重量：2.5g	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり1内 D.1
	27	錢貨	無文錢	—	—	—	—	外径：1.9cm 孔径：0.8cm 厚さ：0.08cm 重量：0.8g	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり1内 D.4
第 42 図 図版 15	28	白磁	小碗	口縁部	—	—	—	素地は白色。口唇部を釉剥ぎ。徳化窯系。	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり2
	29	沖繩産 施釉 陶器	小碗	口縁部	C-2類	8.6	—	素地は褐灰色。両面に白化粧し、透明釉を施釉。	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり2内 D.5
	30	明朝系 丸瓦	—	端部	—	—	—	褐色。凸面の外周に漆喰が残る。凸面の表面は被熱の影響か、剥離がみられる。端部は約3cm幅の面取りを施す。 重量：640g 角1	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり2
	31	明朝系 平瓦	—	広端部 } 狭端部	—	—	—	赤色。凸面の狭端部に横なで痕がみられる。凹面に布目痕と桶板綴り紐圧痕がみられる。狭端長：17.7cm 厚さ：1.3cm 重量：1,080g 角3	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり2
	32	明朝系 丸瓦	—	玉縁部	—	—	—	褐色。段部分に「×」のへら描き印有り。玉縁裏の側面は2回の面取り。 玉縁部：4.3cm 重量：260g 角1	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり2 検出中
	33	明朝系 丸瓦	—	玉縁部 } 端部	—	—	—	赤色。筒部に2本のへら描き印有り。凸面の外周に漆喰が残る。玉縁裏の側面は2回の面取り。端部は約0.5～1.5cm幅の面取りを施す。 玉縁部：4.5cm 重量：1,740g 角3	H28 三門南 トレンチ31 瓦溜まり2 検出中



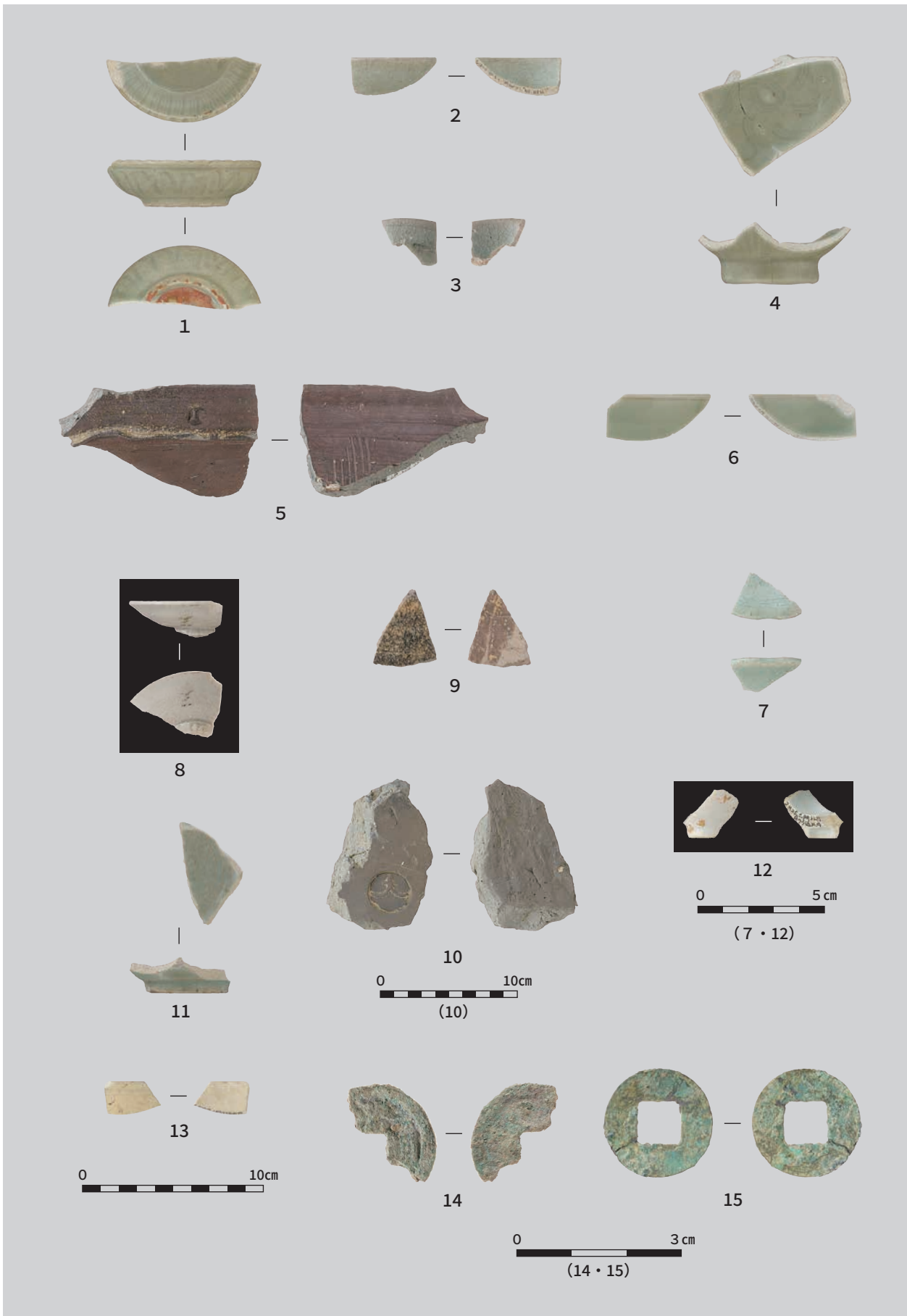
第40図 三門地区出土遺物 1



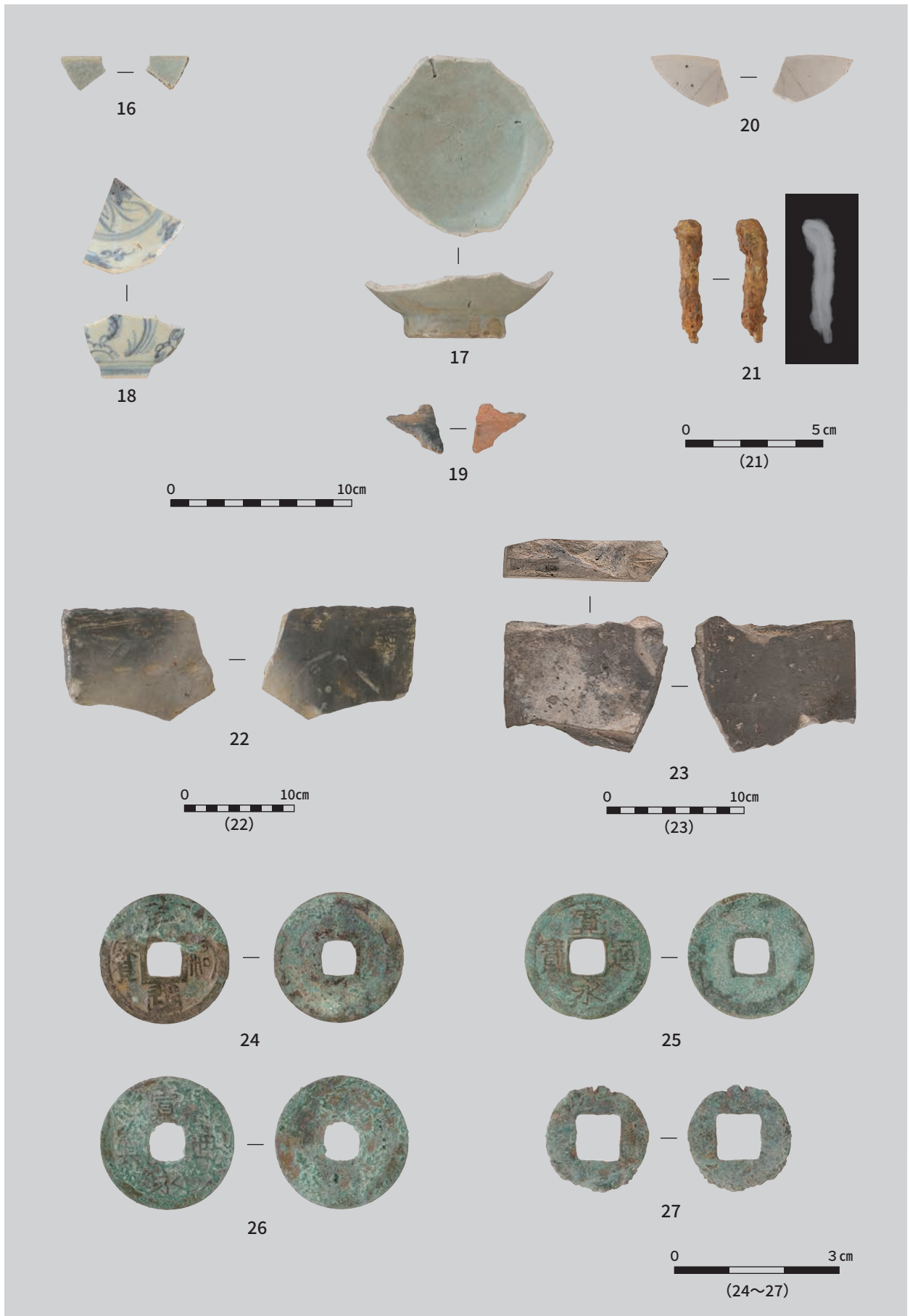
第41図 三門地区出土遺物2



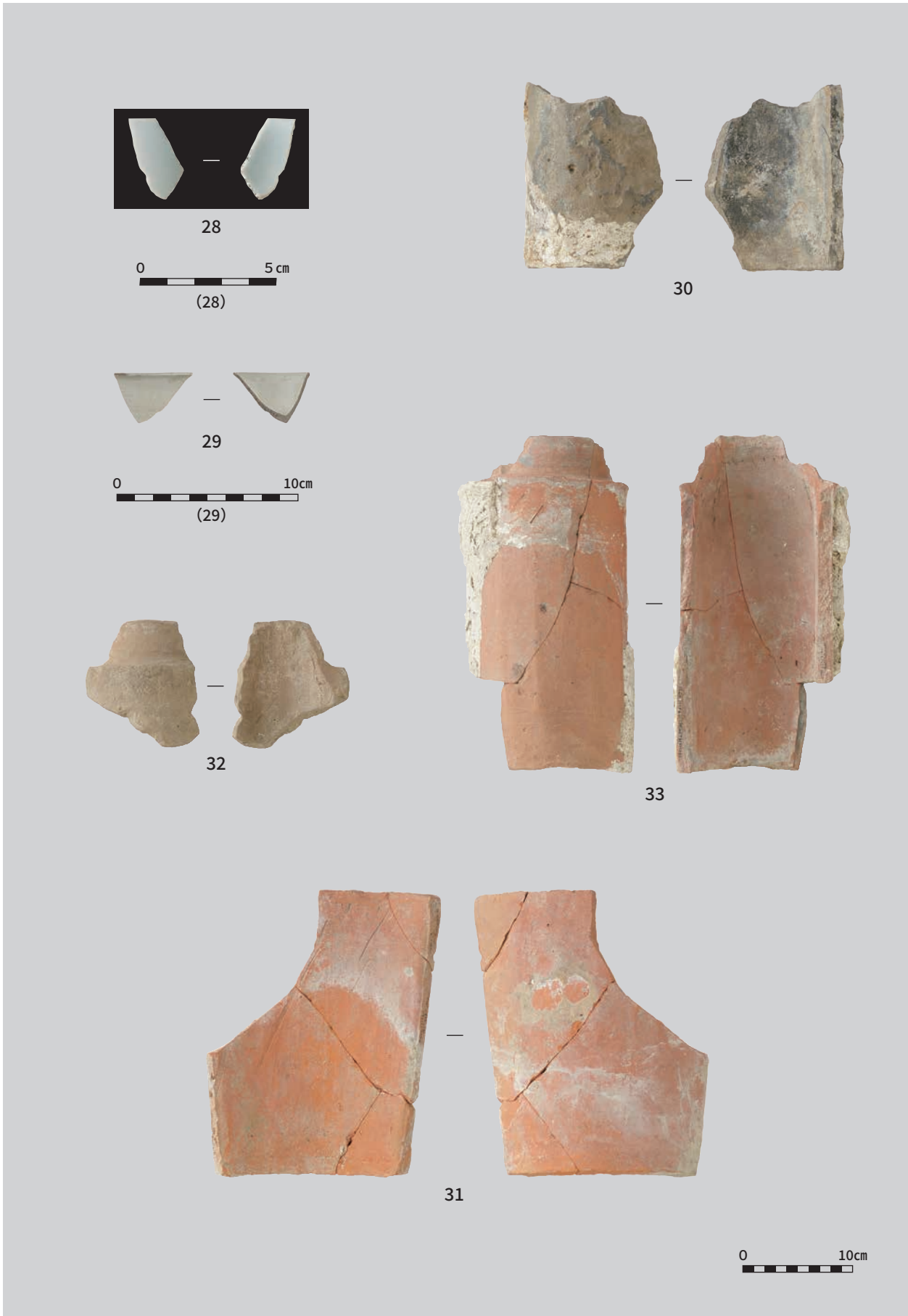
第42図 三門地区出土遺物3



図版13 三門地区出土遺物 1



図版14 三門地区出土遺物2



図版15 三門地区出土遺物3

第4節 表土・攪乱層の遺物

三門地区の表土や攪乱層から出土した遺物をまとめて報告する。

本層からは総数1,814点が出土している。その内訳をみると、瓦、塼、礎盤などの三門に特徴的な建築部材の他、陶磁器類など多種多様な遺物が得られた。ここでは遺物の種類別に報告する。なお、図化作業は代表的なものについて行い、必要に応じて写真のみ掲載した資料もある。それ以外の遺物については集計作業を行った。

1 中国産青磁

中国産青磁は碗、皿、盤、瓶、袋物など20点出土した(第4表)。その多くはV類やVI類に分

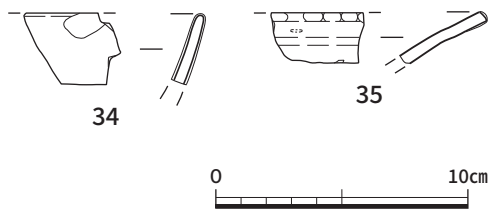
類される製品である。これらは外面文様より、0類(無文)、2類(雷文帯)と細分を行った。その他、福建産の製品も僅かにみられる。以下、個々の所見を遺物観察表にまとめる。

第4表 中国産青磁出土状況一覧

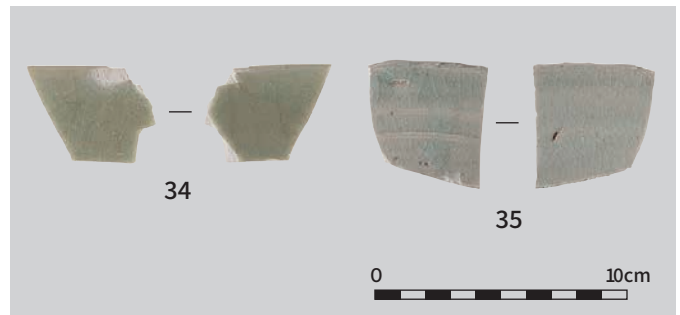
器種	分類	部位	個数
碗	V-2類	口縁部	2
	V-0類	口縁部	1
	幅広高台碗	口縁部	1
皿	—	胴部	4
	VI類	底部	1
	—	底部	2
盤	V類	胴部	2
	—	口縁部	2
瓶	—	胴部	1
袋物	—	胴部	1
器種不明	—	胴部	3
中国産青磁総計			20

第5表 中国産青磁観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第43図 図版16	34	碗	V-0類	—	—	—	素地は灰白色。釉は明オリーブ灰色で、厚く施される。両面に貫入。	H25 三門 攪乱
	35	盤	—	—	—	—	素地及び釉は灰白色。口唇部は方形を呈し、稜花状に削る。福建産。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱



第43図 中国産青磁



図版16 中国産青磁

2 中国産白磁

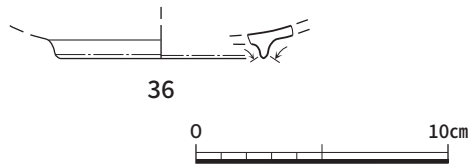
中国産白磁は碗、皿、小碗、小杯、壺、人形など19点出土した(第6表)。産地は、福建系、景德鎮窯系、徳化窯系に分けられ、年代は15～19世紀頃の製品が得られている。以下、個々の所見を遺物観察表にまとめる。

第6表 中国産白磁出土状況一覧

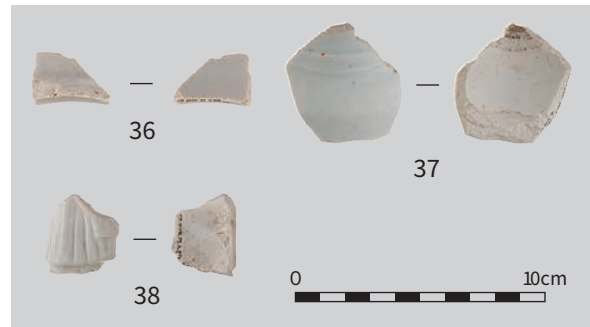
産地	器種	分類	部位	個数
福建	碗	—	胴部	2
			口縁部	1
	皿	D群	底部	1
			胴部	1
景德鎮	碗	E群	胴部	1
	皿	E群	口縁部	1
			底部	1
			胴部	1
徳化	小碗	—	口縁部	1
			胴部	3
	小杯	—	底部	2
—	皿	—	—	1
			底部	1
	壺	—	胴部	1
中国産白磁総計				19

第7表 中国産白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第44図 図版17	36	皿	底部	E群	—	8.0	—	素地及び釉は灰白色。両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。景德鎮窯。	H25 三門 攪乱
	37	壺	胴部	—	—	—	—	素地は白色。釉は透明感のある灰白色。外面のみ施釉。肩部は稜をもつ。福建産か。	H28 三門南 攪乱
	38	人形	—	—	—	—	—	素地は白色。釉は透明感のある灰白色で、外面のみ施釉。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ30 攪乱



第44図 中国産白磁



図版17 中国産白磁

3 中国産青花

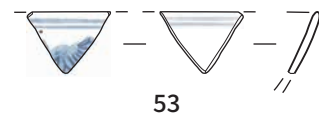
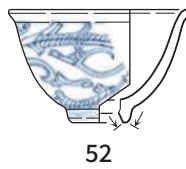
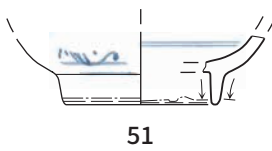
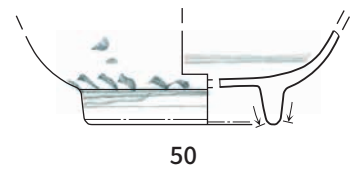
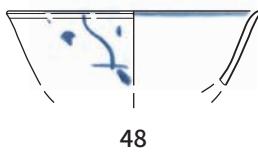
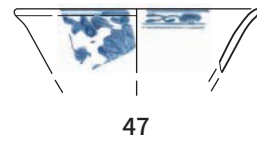
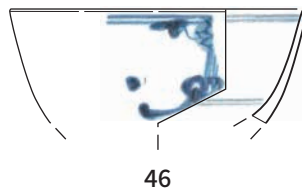
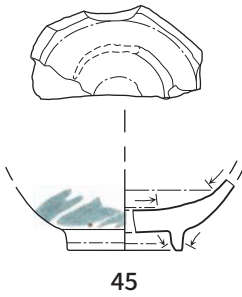
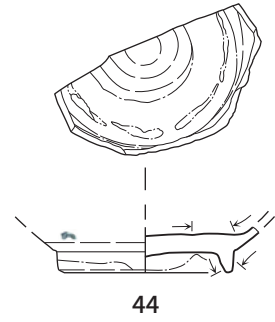
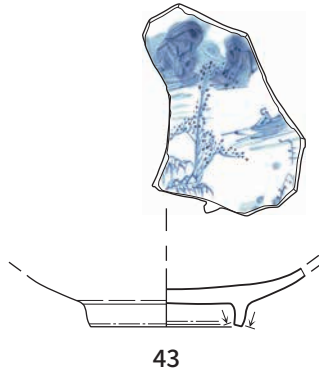
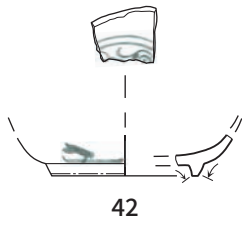
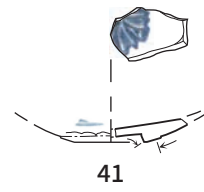
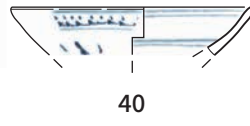
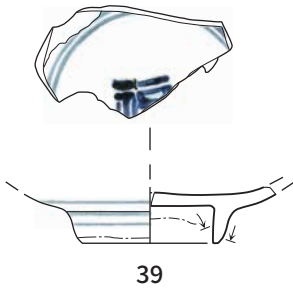
中国産青花は明代及び清代の製品が出土している。碗、皿、小碗、小杯、鉢、大鉢など78点出土した(第8表)。産地は、景德鎮窯系、福建系、徳化窯系に分けられ、年代は15～19世紀頃の製品が得られている。以下、個々の所見を遺物観察表にまとめる。

第8表 中国産青花出土状況一覧

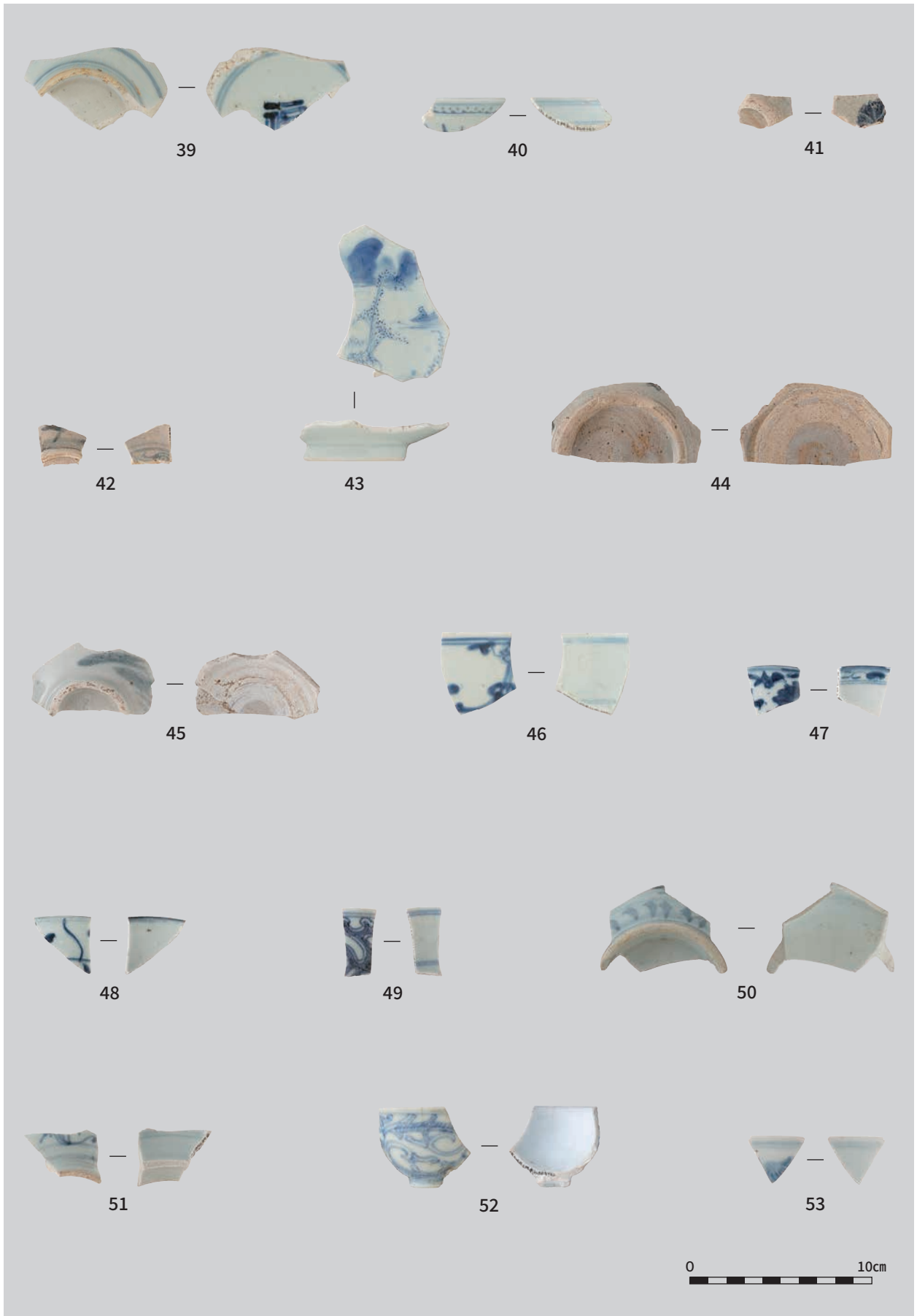
年代	産地	器種	分類	部位	個数
明代	景德鎮	碗	B群	底部	2
			—	胴部	1
		皿	C群	口縁部	1
				底部	2
	胴部			1	
漳州窯	皿	—	底部	2	
清代	景德鎮	碗	—	口縁部	2
				胴部	6
		小碗	—	口縁部	2
				底部	1
		皿	—	底部	1
	胴部			1	
	小杯	—	胴部	1	
			鉢	—	胴部
	徳化	碗	—	口縁部	10
				底部	4
				胴部	5
		小碗	—	口縁部	2
				口縁部～底部	1
	皿	—	口縁部	1	
			小杯	—	胴部
	福建	碗	—	底部	2
				胴部	2
	福建・広東	碗	—	口縁部	5
底部				3	
胴部				5	
—	皿	—	口縁部	1	
			大鉢	—	胴部
—	碗	—	口縁部	2	
			胴部	2	
—	碗	—	口縁部	1	
			胴部	4	
中国産青花総計					78

第9表 中国産青花観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (高さ)			
第45図 図版18	39	碗	底部	B群	—	5.4	—	素地は灰白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。高台脇から高台内にかけて釉剥ぎ。内底の二重圏線の中に「福」字文。景德鎮窯。明代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	40	皿	口縁部	C群	9.6	—	—	素地は灰白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。外面に波濤文と芭蕉文。景德鎮窯。明代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	41	皿	底部	C群	—	3.0	—	素地は灰白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。外底に砂が付着。内底に菊花文。景德鎮窯。明代。	H25 三門 攪乱
	42	皿	底部	—	—	5.8	—	素地は淡黄色。黄色味を帯びた灰白色の釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。内外面に文様あり。景德鎮窯。明代。	H25 三門 表採
	43	皿	底部	—	—	6.0	—	素地は灰白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。内底に人物、山水文。景德鎮窯。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	44	碗	底部	—	—	6.4	—	素地は灰白色。明緑灰色の釉を両面に施釉し、畳付を釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。内底に重ね焼きの痕あり。福建・広東系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	45	碗	底部	—	—	4.6	—	素地は灰白色。透明感のある灰白色の釉を両面に施釉し、畳付を釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。内底に重ね焼きの痕あり。福建産。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	46	碗	口縁部	—	11.8	—	—	素地は白色。灰白色の釉を両面に施釉。外面に草花文。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	47	碗	口縁部	—	9.7	—	—	素地は白色。灰白色の釉を両面に施釉。内外面に草花文。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	48	碗	口縁部	—	10.0	—	—	素地は白色。灰白色の釉を両面に施釉。外面に仙芝祝寿文。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	49	碗	口縁部	—	—	—	—	素地は白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。外面に龍文か。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 29 攪乱
	50	碗	底部	—	—	7.4	—	素地は灰白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。高台は高い。外面に草花文。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	51	碗	底部	—	—	6.0	—	素地は灰白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。高台は高い。外面に草花文か。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	52	小碗	口縁部 底部	—	7.2	2.2	4.5	素地は灰白色。灰白色の釉を両面に施釉。畳付を釉剥ぎ。外面に雲龍文。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
53	小碗	口縁部	—	—	—	—	素地は白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。外面に花文。徳化窯系。清代。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱	



第45図 中国産青花



図版 18 中国産青花

4 中国産褐釉陶器

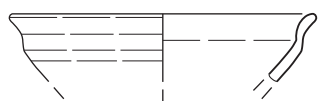
中国産褐釉陶器は碗、壺など20点出土した(第10表)。以下、個々の所見を遺物観察表にまとめる。

第11表 中国産褐釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第46図 図版19	54	碗	口縁部	—	12.2	—	胎土は橙色で、白色粒を含む。オリーブ褐色の釉を両面に施釉。口縁は「く」の字状に折れる。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	55	壺	底部	—	—	12.0	胎土は灰褐色で、白色粒を多く含む。暗灰黄色の釉を両面に施釉。	H21 三門北 石積 5 表土
	56	壺	底部	—	—	13.2	胎土は灰褐色で、白色粒、黒色粒を含む。暗オリーブ褐色の釉を両面に施釉。外底に目痕が残る。	H25 三門 攪乱
	57	壺	底部	—	—	16.4	胎土はにぶい赤橙色で、多くの白色粒と僅かな黒色粒を含む。内面に灰褐色の釉が釉垂れ状に残る。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱

第10表 中国産褐釉陶器出土状況一覧

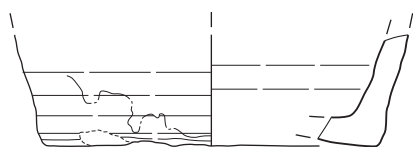
種類	器種	部位	個数
褐釉陶器	碗	口縁部	1
		底部	4
	壺	胴部	14
		胴部	1
中国産褐釉陶器総計			20



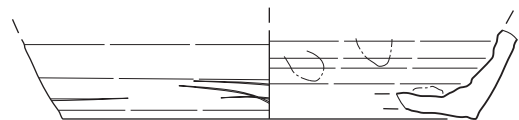
54



55



56



57



第46図 中国産褐釉陶器



図版 19 中国産褐釉陶器

5 その他の中国産陶磁器

その他の中国産陶磁器は瑠璃釉の小碗1点、三彩の水注が1点出土した(第12表)。

58は水注の胴部片である。小破片のため、写真のみ掲載する。鳥の目と考えられる部位が僅

かに残っていることより、鳥形の水注と考えられる。素地は黒色や褐色粒を多く含む。外面は緑色の釉の上に、一部黒色の釉が施釉される。

H28三門南トレンチ30攪乱出土。

第12表 その他の中国産陶磁器出土状況一覧

種類	器種	部位	個数
瑠璃釉	小碗	口縁部	1
三彩	水注	胴部	1
その他の中国産陶磁器総計			2



図版 20 その他の中国産陶磁器

6 タイ産褐釉陶器

タイ産褐釉陶器は壺の胴部片が5点出土した。産地は、メナムノイ窯の製品が得られている。すべて小破片のため、集計のみ行った。

7 本土産磁器

本土産磁器は、染付、色絵などがあり、産地は肥前や瀬戸・美濃産などが確認された(第13表)。

年代的には17世紀～19世紀代(明治以前)の製品と明治以降の製品に分けられる。なお、明治以降の近代磁器については絵付け技法により分類を行った。

17～19世紀代 肥前の碗、皿、角皿、鉢など12点が出土している。このうち特徴的な1点について写真を掲載し、それ以外については集計のみ行った。

肥前 59は鉢の胴部片である。『円覚寺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター 2002)の第51図の鉢と同一製品と考えられる。

近代(明治以降) 碗、小碗、皿、小杯、鉢、急須、蓋、袋物、合子、パレットなど102点が出土している。主に瀬戸・美濃産である。碗、小碗、皿については、絵付け技法により以下のように分類した。なお、近代磁器については今回図化はせず、1点について写真を掲載し、それ以外は集計のみ行った。

- 碗・小碗 A類 型紙絵付け。
- B類 銅版絵付け。
- C類 ゴム版絵付け。
- D類 吹き絵。

- E類 通常の染付。
- F類 クロム青磁。
- 皿 A類 型紙絵付け。
- B類 銅版絵付け。
- C類 通常の染付。

第13表 本土産磁器出土状況一覧

産地	器種	分類	部位	個数
肥前	碗	染付	口縁部	1
			胴部	2
	皿	色絵	底部	1
			角皿	染付
	鉢	—	胴部	1
—	碗	—	胴部	1
		色絵	口縁部	1
	皿	色絵	胴部	4
小計				12
種類	器種	分類	部位	個数
近代	碗	A類	口縁部	3
			底部	1
			胴部	6
		B類	口縁部	2
			胴部	1
			C類	口縁部
		E類	口縁部	2
			口縁部	1
		色絵	口縁部	2
			胴部	1
		—	口縁部	5
			底部	2
	胴部		3	
	小碗	B類	口縁部	1
			胴部	3
		E類	口縁部	3
			口縁部～底部	1
			底部	2
		F類	胴部	1
			口縁部	6
		色絵	口縁部	1
	底部		2	
	—	底部	1	
	皿	A類	口縁部	3
			底部	1
		B類	口縁部	1
			C類	胴部
—		口縁部	3	
		口縁部～底部	1	
		底部	3	
小杯	色絵	底部	1	
		口縁部	3	
	—	口縁部～底部	2	
		底部	4	
	胴部	1		
鉢	—	口縁部～底部	1	
急須	—	口縁部	4	
		底部	2	
		胴部	2	
	注口	1		
蓋	色絵	—	2	
	—	—	2	
袋物	—	口縁部	1	
		胴部	4	
合子	—	口縁部～底部	1	
パレット	—	—	1	
器種不明	色絵	胴部	1	
		口縁部	1	
—	—	胴部	2	
近代小計				102
本土産磁器総計				114

第14表 本土産磁器観察一覧

図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (高さ)		
図版 21	59	水鉢	胴部	—	—	—	素地は白色。明緑灰色の釉を両面に施釉。 外面に竹笹文。内面に文様あり。肥前。	H25 三門 攪乱
	60	小碗	口縁部～ 底部	E類	—	—	外面に染色体文。口鏝。近代。	H28 三門南 トレンチ 29 攪乱



図版 21 本土産磁器



※沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『円覚寺跡』第51図(図版47)より転載

8 本土産陶器

本土産陶器は、碗、皿、鉢、挿鉢、壺、急須、蓋など14点が出土した(第15表)。産地は肥前(肥前系含む)・備前・薩摩・丹波等が確認されており、年代的には15世紀代に遡る資料も一部みられるが、近世以降の資料が多い。以下に特徴的な5

点を図化する。

肥前系(肥前・唐津・内野山ほか)

61は肥前産の皿、62、63は唐津産二彩手の鉢である。その他、内野山産の碗胴部片が出土している。

備前産

64は播鉢である。

薩摩産

65は白薩摩の合子の蓋である。その他、急須や壺の胴部片が出土している。

丹波産

碗、播鉢が出土している。

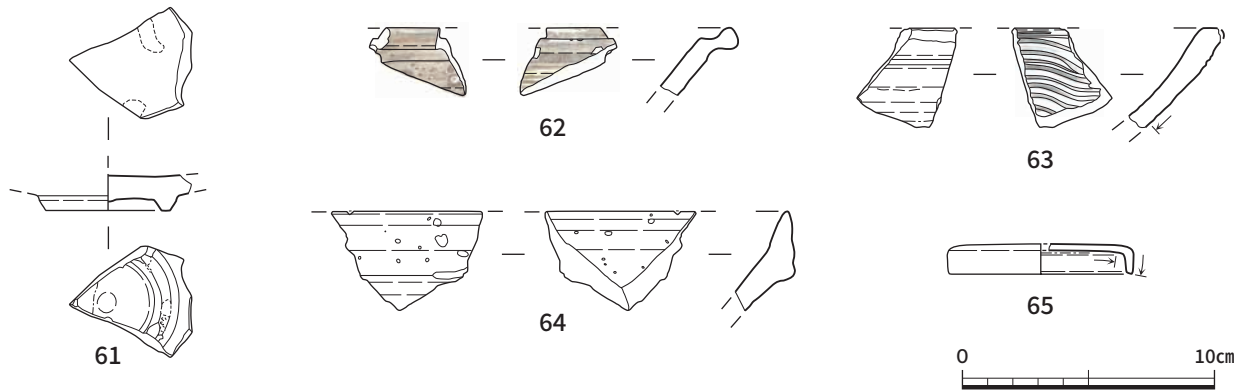
その他、近代の製品と考えられる急須や蓋が出土している。

第15表 本土産陶器出土状況一覧

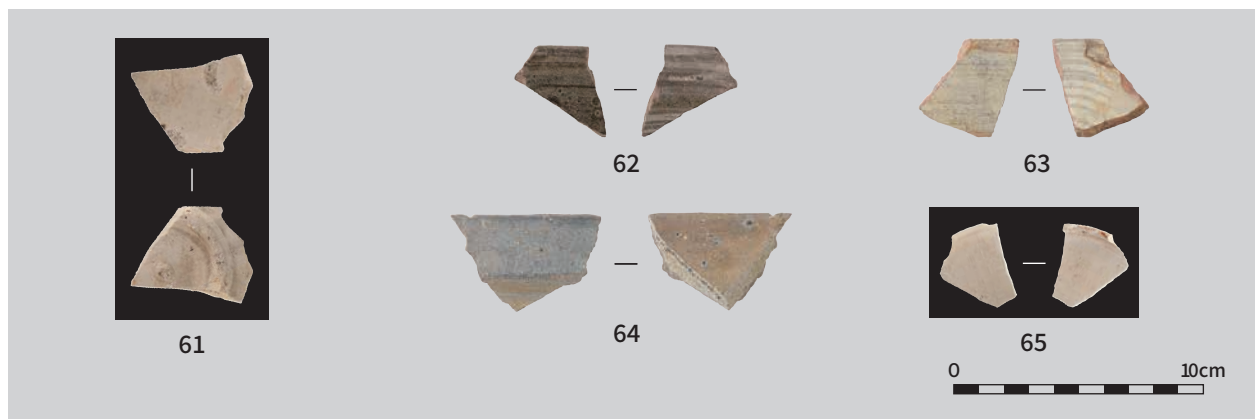
種類	産地	器種	部位	個数
陶器	肥前	皿	底部	1
	肥前・唐津	鉢	口縁部	2
	肥前・内野山	碗	胴部	1
	備前	播鉢	口縁部	1
	薩摩	急須	胴部	1
		壺	胴部	1
		合子の蓋	—	1
	丹波	碗	口縁部	1
		播鉢	胴部	2
	—	急須	胴部	1
近代	—	急須	口縁部	1
	—	蓋	—	1
本土産陶器総計				14

第16表 本土産陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (高さ)		
第47図 図版22	61	皿	底部	—	4.9	—	素地は灰白色で黒色粒を含む。灰白色の釉を両面に施釉。内底及び畳付に胎土目あり。肥前。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	62	鉢	口縁部	—	—	—	素地はにぶい橙色で黒色粒と白色粒を含む。暗オリーブ色の釉を両面に施釉。内面に白土で刷毛目の波状文。肥前・唐津の二彩手。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	63	鉢	口縁部	—	—	—	素地はにぶい橙色で黒色粒と白色粒を含む。灰褐色の釉を両面に施釉。内面に白土で刷毛目の波状文。肥前・唐津の二彩手。	H25 三門 攪乱
	64	播鉢	口縁部	—	—	—	素地は灰黄色で白色粒や黒色粒を含む。外面は灰色、内面はにぶい黄橙色を呈する。備前。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	65	合子の蓋	—	—	7.2	1.2	素地は白色で、微小な黒色粒を含む。内面の縁部分以外に透明釉を施釉。両面に貫入あり。白薩摩。	H28 三門 南トレンチ 30 攪乱



第47図 本土産陶器



図版22 本土産陶器

9 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は、碗、小碗、皿、鉢、瓶、急須、酒器、蓋、鍋、壺、油壺、火取、香炉、火炉、袋物など164点が出土した(第17表)。

なお、碗及び小碗については釉葉の種類や文

様の有無等より分類を行った。分類の詳細については「第3章 第3節 三門地区の遺構と遺物」(59～60頁)で触れている。

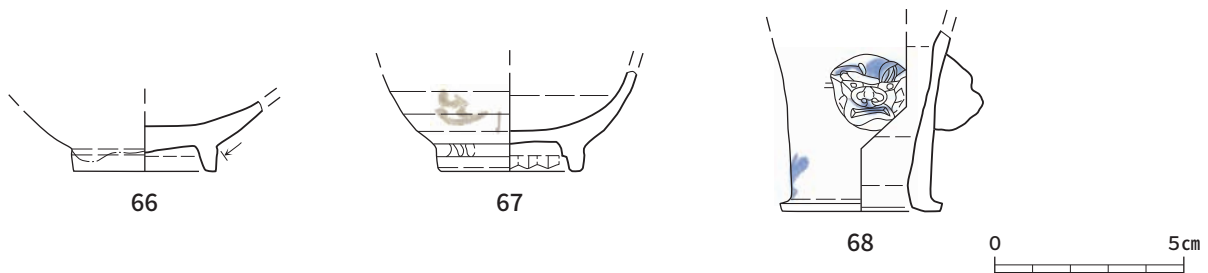
66は小碗A類、67は小碗、68は外面に獣面(獅子)を貼り付け。

第17表 沖縄産施釉陶器出土状況一覧

器種	分類	部位	個数	器種	分類	部位	個数
碗	A類	口縁部	8	小碗	C類	口縁部	8
		底部	2			底部	1
		胴部	7			胴部	2
	B-1類	口縁部	1		D類	口縁部	2
		底部	1			—	底部
		胴部	1		皿	口縁部	2
	B-2類	口縁部	1	鉢	胴部	1	
		底部	1		口縁部	11	
		胴部	1	瓶	底部	1	
	B-3類	口縁部	1		胴部	4	
		底部	2	急須	口縁部	1	
	C-2類	口縁部	4		底部	1	
		胴部	1		胴部	1	
	C類	口縁部	7	酒器	口縁部	3	
		底部	4		胴部	7	
		胴部	3	蓋	口縁部	3	
D類	胴部	1	—		胴部	5	
—	口縁部	1	鍋	—	4		
小碗	A-1類	底部	1	壺	口縁部	1	
	A類	底部	1		胴部	4	
	B-1類	底部	1	油壺	胴部	4	
		胴部	1	火取	胴部	1	
	B-2類	口縁部	2	香炉	底部	1	
		底部	1		口縁部	3	
		胴部	1	香炉か	胴部	1	
	B-3類	口縁部	3		底部	1	
		B類	底部	1	火炉	口縁部	1
	C-1類	口縁部	1	胴部		2	
		底部	3	袋物	底部	2	
		胴部	1		胴部	14	
	C-2類	口縁部	3	器種不明	胴部	3	
	C-3類	胴部	1	沖縄産施釉陶器総計		164	

第18表 沖縄産施釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (高さ)			
第48図 図版23	66	小碗	底部	A類	—	3.8	—	素地はにぶい黄色。灰釉を高台以外に施釉。	H28 三門南 トレンチ 29 攪乱
	67	小碗	底部	—	—	3.7	—	素地は灰褐色。内面ににぶい黄褐色の釉を施釉。外面に白土で文字または文様が描かれる。高台内の削りが明瞭。	H25 三門 攪乱
	68	香炉?	底部	—	—	4.2	—	素地は暗赤色。外面に暗赤褐色の釉を施釉しその上に青色の釉で絵付け。外面に獣面(獅子)を貼り付け。	H28 三門南 トレンチ 31 攪乱



第48図 沖縄産施釉陶器



図版 23 沖縄産施釉陶器

10 沖縄産無釉陶器

17世紀前半の製品と考えられる焼き締め陶器の一群を初期無釉陶器、17世紀後半以降と考えられる無釉陶器と分けて報告する。

初期無釉陶器

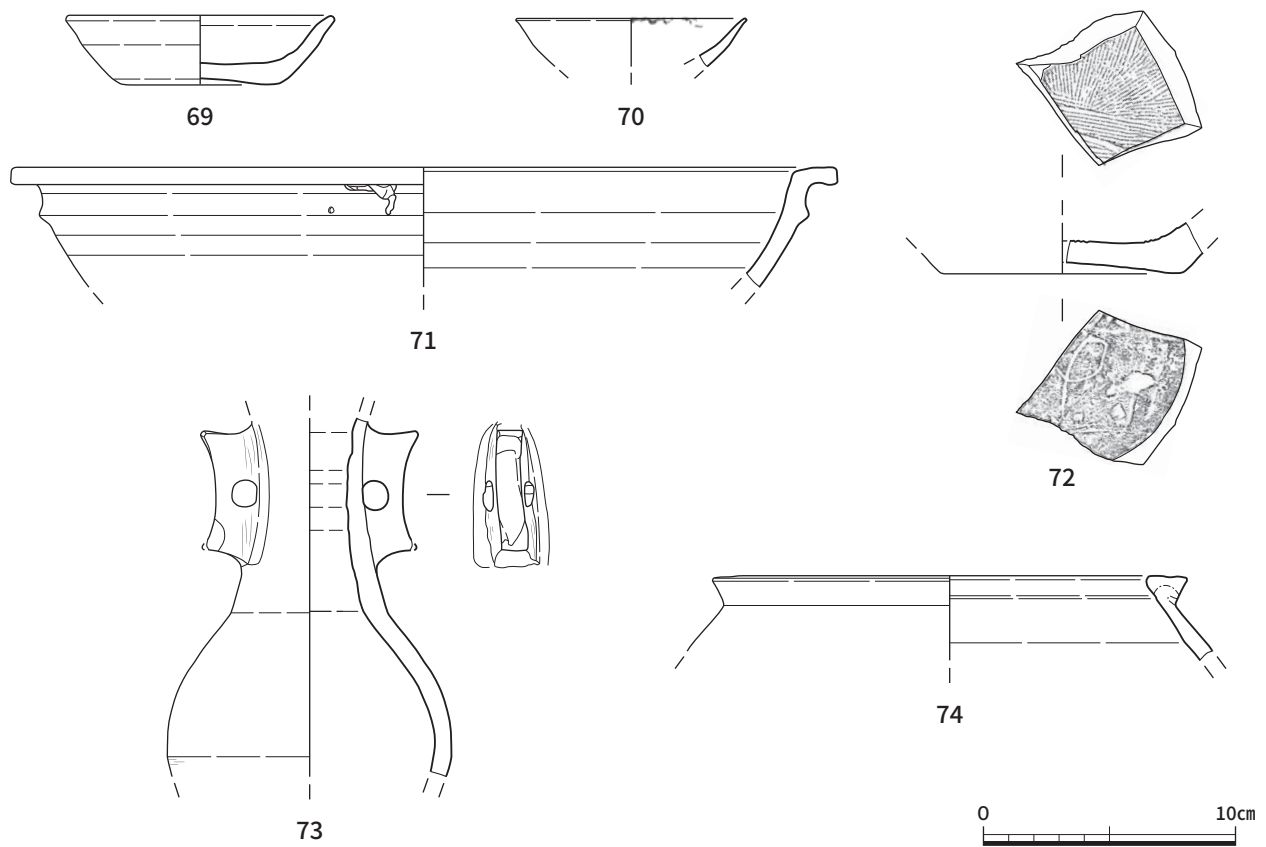
17世紀前半の製品と考えられる焼き締め陶器の一群で、湧田古窯跡を中心に焼成されたと考えられる。高火度で器面に泥釉などが施釉される。碗、皿、鉢、播鉢、瓶、急須、壺、灯明皿、器種不明など17点が出土した(第19表)。

第 19 表 初期沖縄産無釉陶器出土状況一覧

器種	部位	個数
碗	口縁部	1
	底部	1
皿	口縁部	1
	口縁部～底部	1
鉢	口縁部	1
播鉢	底部	1
	胴部	1
瓶	胴部	1
急須	胴部	1
壺	口縁部	1
	胴部	1
灯明皿	口縁部	1
器種不明	底部	1
	胴部	4
初期沖縄産無釉陶器総計		17

第 20 表 初期沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第 49 図 図版 24	69	皿	口縁部 └ 底部	—	10.7	6.0	2.7	素地は明赤褐色と黄灰色を呈し、大小の石英粒を含む。内面は暗赤褐色の泥釉?を施釉。ベタ底。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	70	灯明皿	口縁部	—	9.1	—	—	素地は褐灰色～灰色を呈する。微小な石英粒を含む。内面口唇部に煤が付着する。	H28 三門南 トレンチ 31 攪乱
	71	鉢	口縁部	—	32.8	—	—	素地は暗赤褐色を呈し、赤色粒や石英粒を僅かに含む。外面は黒褐色の泥釉を施釉。外面口縁部下部に稜をもつ。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	72	播鉢	底部	—	—	9.6	—	素地は灰褐色を呈し、石英粒を含む。白色の筋がマーブル状に混じる。内面は黒褐色、外面はオリブ黒色の泥釉を施釉。外底に「a」状の線刻あり。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	73	瓶	胴部	—	—	—	—	素地は灰褐色を呈し、石英粒を含む。内面は灰色で、外面は黒褐色の泥釉を施釉。耳に孔のある双耳瓶。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	74	壺	口縁部	—	18.8	—	—	素地は灰黄褐色を呈し、石英粒を含む。白色の筋がマーブル状に多く混じる。内面はにぶい黄褐色、外面は褐灰色の泥釉を施釉。口縁断面形は三角形を呈する。内面口縁部下部に凹みあり。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱



第49図 初期沖縄産無釉陶器



図版 24 初期沖縄産無釉陶器

無釉陶器

17世紀後半以降に焼成されたと考えられる一群である。碗、皿、鉢、搦鉢、植木鉢、急須、蓋、

鍋、壺、甕、香炉、灯明皿、袋物、器種不明など65点が出土した(第21表)。

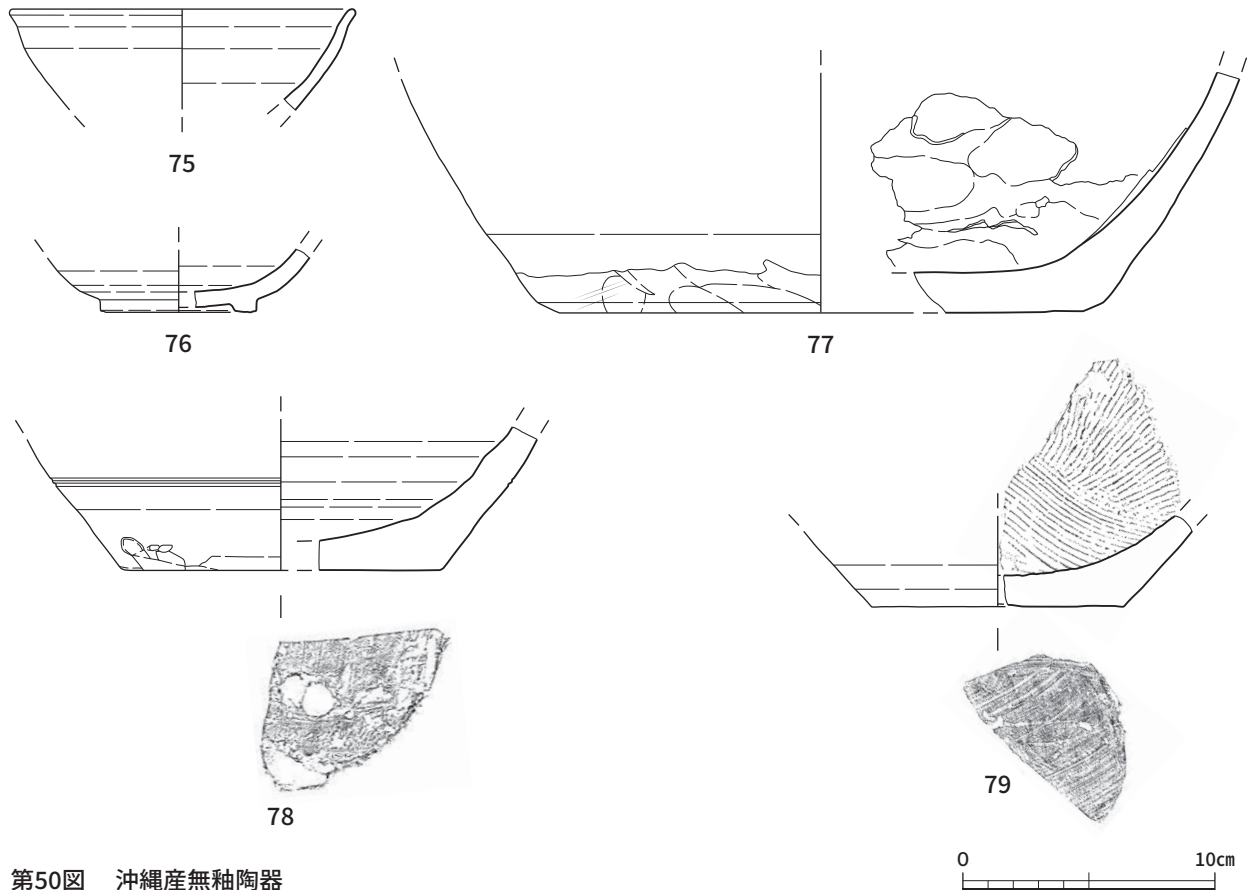
77は鉢で、内面に石灰分が厚く付着している。

第21表 沖縄産無釉陶器出土状況一覧

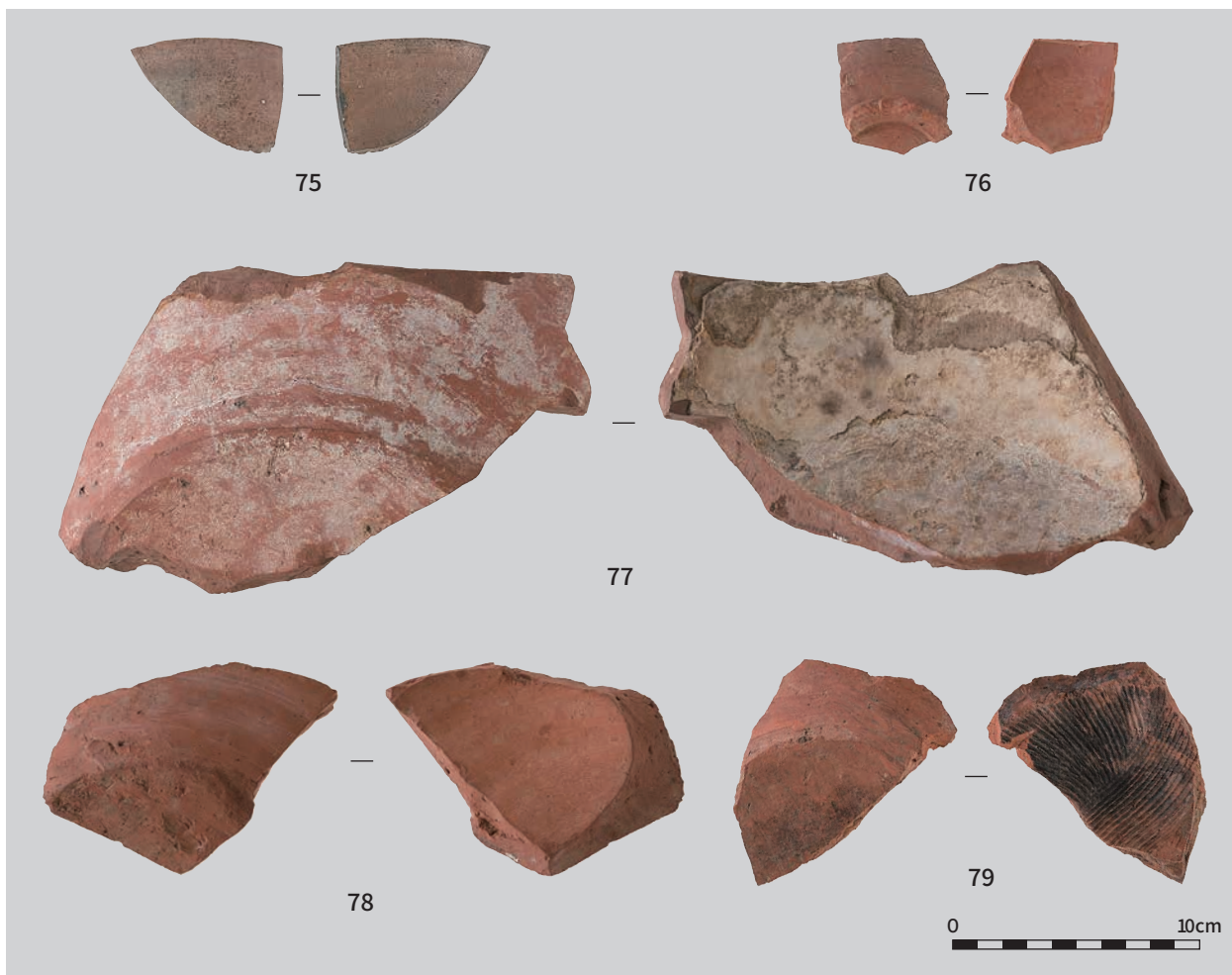
器種	部位	個数	器種	部位	個数
碗	口縁部	1	鍋	蓋	2
	底部	1		取手	2
皿	底部	1	壺	口縁部	2
	鉢	口縁部		6	底部
底部		3		胴部	11
搦鉢	胴部	3	甕	底部	1
	口縁部	4		胴部	2
	植木鉢	底部	1	香炉	底部
胴部		6	灯明皿	口縁部	1
口縁部		1	袋物	底部	1
急須	取手	1	器種不明	胴部	12
急須の蓋		1	沖縄産無釉陶器総計		65

第22表 沖縄産無釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第50図 図版25	75	碗	口縁部	—	13.7	—	素地は灰色、器面はにぶい黄褐色を呈する。外面口縁部から胴部にかけて緩い稜をもつ。	H 25 三門 攪乱
	76	碗	底部	—	—	5.8	素地及び器面は明赤褐色を呈する。高台は低く、畳付は内側方向へ斜めを呈する。	H 25 三門 攪乱
	77	鉢	底部	—	—	20.8	素地はにぶい赤褐色、器面は赤褐色を呈する。内面に石灰分が厚く付着する。	H 25 三門 表採
	78	鉢	底部	—	—	12.6	素地及び器面は明赤褐色を呈する。外底に円状の工具痕?がみられる。	H 25 三門 表採
	79	搦鉢	底部	—	—	10.0	素地は橙色で、器面は赤褐色を呈する。内面に楕目を密に施す。内面及び外底に煤が付着する。	H 25 三門 表採



第50図 沖縄産無釉陶器



図版25 沖縄産無釉陶器

11 石器・石製品

石器は砥石2点、石製品は礎盤、硯、石板片など6点が出土している。その他、石材片も18点出土している(第23表)。以下に特徴的な4点を図化する。

80は硯で、裏面に銘が刻まれている。81～83は輝緑岩製の礎盤である。上面観が真円形を呈し、縁部に緩やかな抉りを巡らせる。上面には円形の柱の跡が残る。また、中央部分には円形

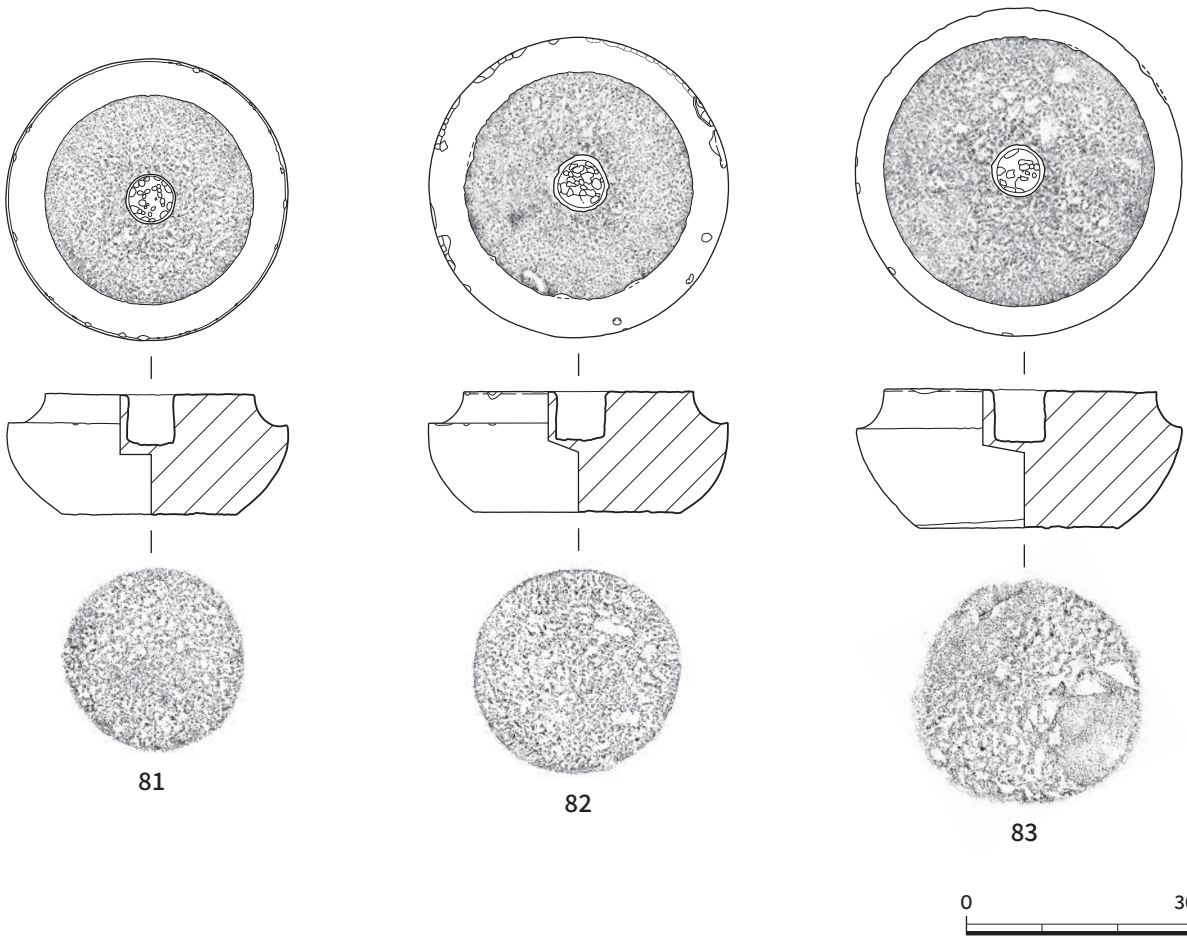
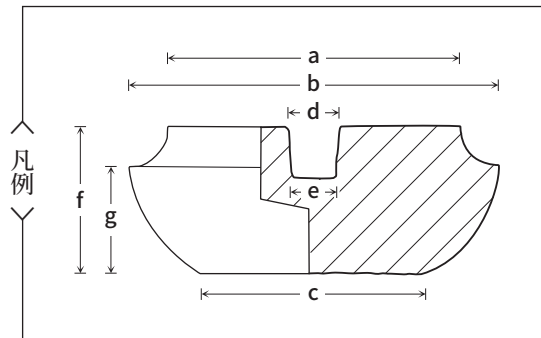
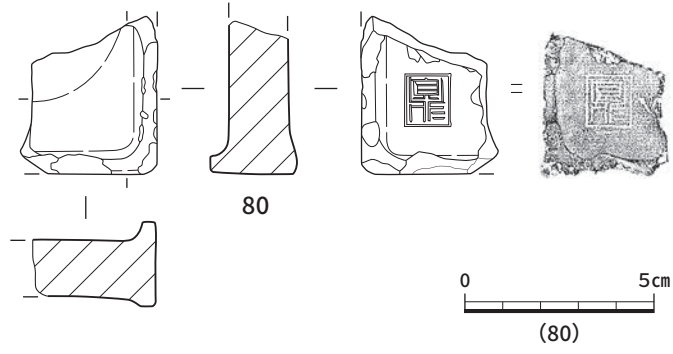
の臍穴がみられる。上面以外は研磨が丁寧に施されるが、文様などはみられない。

第23表 石器・石製品・石材出土状況一覧

種類	器種	個数
石器	砥石	2
石製品	礎盤	4
	硯	1
	石板か	1
石材	—	18
総計		26

第24表 石製品観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第51図 図版26	80	硯	—	—	—	—	全体的に丁寧なミガキが施される。陸部分は凹みがみられる。裏面には銘が刻まれる。石材は泥岩。	H28 三門南 トレンチ30 攪乱
	81	礎盤	—	a : 27.5 b : 37.2	c : 23.3 d : 5.9 e : 6.0	f : 16.1 g : 12.2	円形状の柱跡がみられる。石材は輝緑岩。 重量 : 37kg	H20 三門北 トレンチ7
	82	礎盤	—	a : 30.4 b : 39.6	c : 27.3 d : 6.4 e : 6.1	f : 16.0 g : 11.9	円形状の柱跡がみられる。石材は輝緑岩。 重量 : 41.5kg	H20 三門北 トレンチ9
	83	礎盤	—	a : 36.0 b : 43.1	c : 26.3 d : 6.85 e : 6.6	f : 18.4 g : 13.2	円形状の柱跡がみられる。石材は輝緑岩。 重量 : 54.5kg	H20 三門北 トレンチ7



第51図 石製品



図版 26 石製品

12 玉類

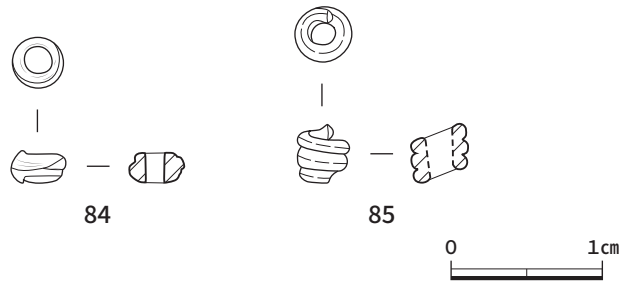
玉類は2点出土している(第25表)。材質はガ

ラス製である。84は螺旋状の筋が確認される。

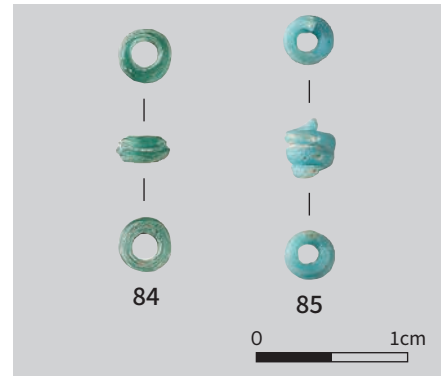
85は2つの玉がコイル状に連なっている。

第25表 玉類観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第52図 図版27	84	玉	—	—	0.35	孔径 0.15	0.25	素材はガラスで、微細な気泡が観察される。巻き付けによる溝がみられる。青緑色。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	85	玉	—	—	0.35	孔径 0.15	0.4	素材はガラスで、微細な気泡が観察される。巻き付け技法で、二つの玉が連なる。青色。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱



第52図 玉類



図版 27 玉類

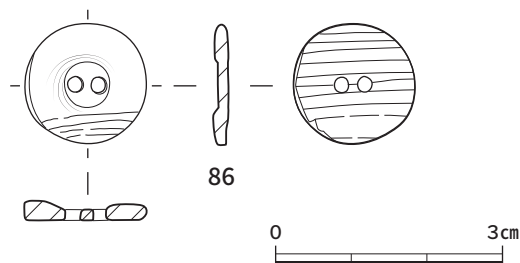
13 貝製品

貝製品はボタンが1点出土している。その他、断面に加工痕の残るヤコウガイの破片が1点得

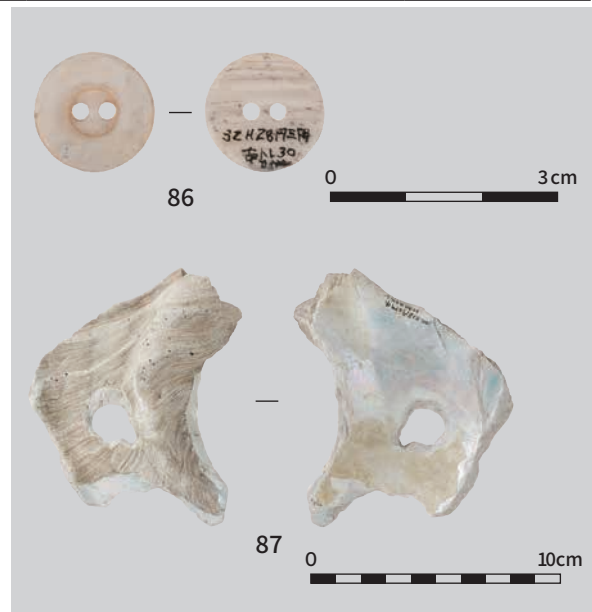
られている(第26表)。86は全体的に丁寧に磨かれており、表面は中央部分が1段窪む。

第26表 貝製品観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)			
第53図 図版28	86	貝製品	ボタン	—	1.6	1.6	0.25	表面の中央部分は一段凹み、二つの孔を穿つ。裏面は平坦。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
図版28	87	ヤコウガイ片	—	—	10.6	5.7	厚み 最大2.7 最小0.8	断面の一部に加工痕有り。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱



第53図 貝製品



図版 28 貝製品

14 漆製品

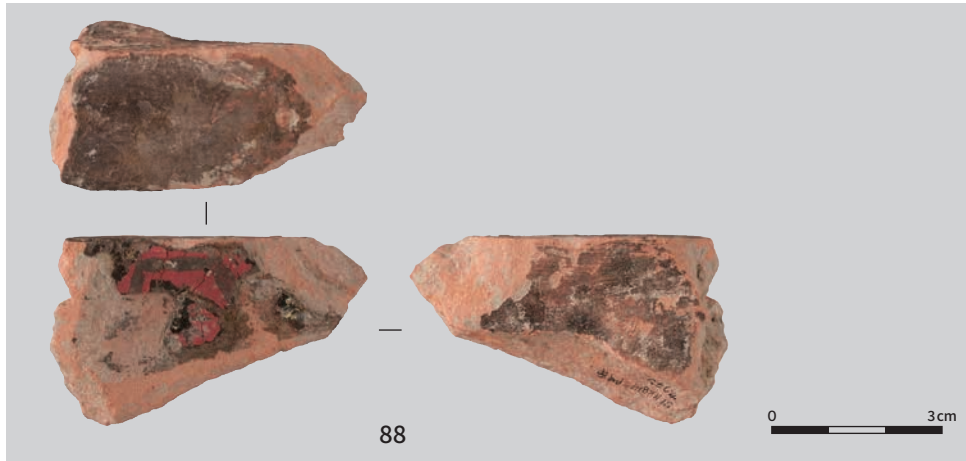
漆製品は器種不明の製品が1点出土している(第27表)。最初に黒漆を塗り、さらにその上に赤色漆や金箔を施している。上面は平坦に仕上げられ、外面から内面に向かって、斜めに下がる。

全体形及び文様などについても不明である。

長軸5.5cm。短軸3.3cm。厚み(最大)2.4cm。重量39.3g。H28三門南攪乱出土。

第27表 漆製品観察一覧

図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
図版29	88	漆製品	—	—	—	—	長軸：5.5cm 短軸：3.3cm 厚み：2.15cm 重量：39.3g	H28 三門南 攪乱



図版29 漆製品

15 円盤状製品

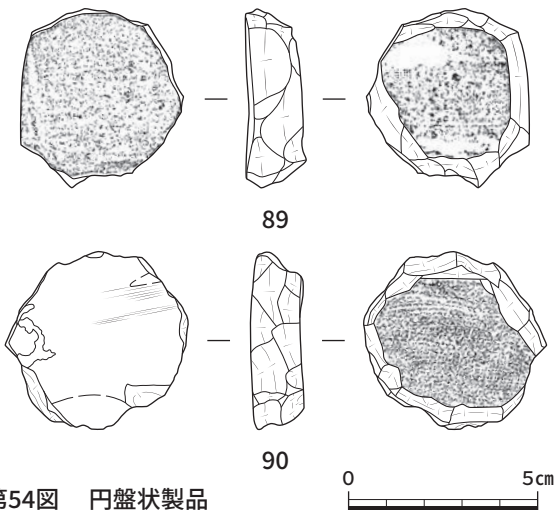
円盤状製品は3点出土している(内2点第28表)。素材別にみると、中国産褐釉陶器1点、明

朝系瓦2点である。特徴的な2点を図化する。

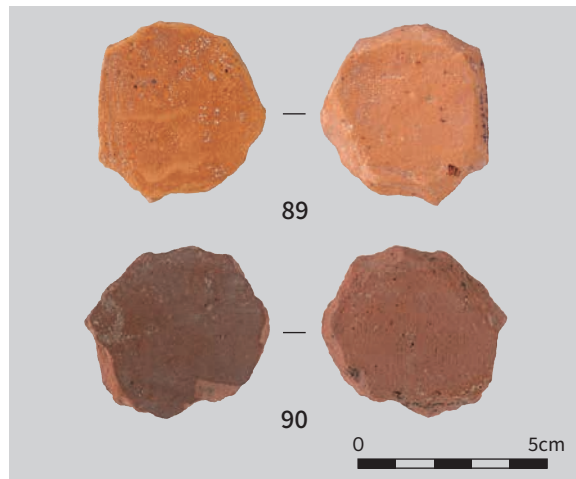
89、90は明朝系瓦を素材としたものである。

第28表 円盤状製品観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第54図 図版30	89	円盤状製品	—	4.6	4.3	1.6	素材：瓦。内面から外面方向に打割。 重量：31.0g	H25 三門 トレンチ25 掘り下げ中
	90	円盤状製品	—	4.85	4.7	1.35	素材：瓦。内面から外面方向に打割。 重量：34.0g	H28 三門南 トレンチ30 攪乱



第54図 円盤状製品



図版30 円盤状製品

16 煙管

煙管は2点出土している(第29表)。陶器製と金属製がみられる。

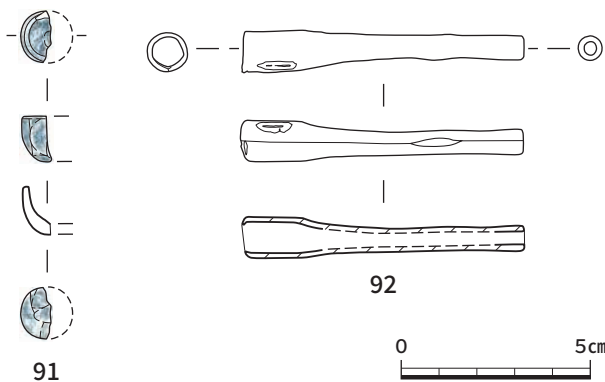
91は陶器製の雁首で、火皿部分である。火皿の外径は1.35cmを測る。H28三門南トレンチ30

第30表 煙管観察一覧

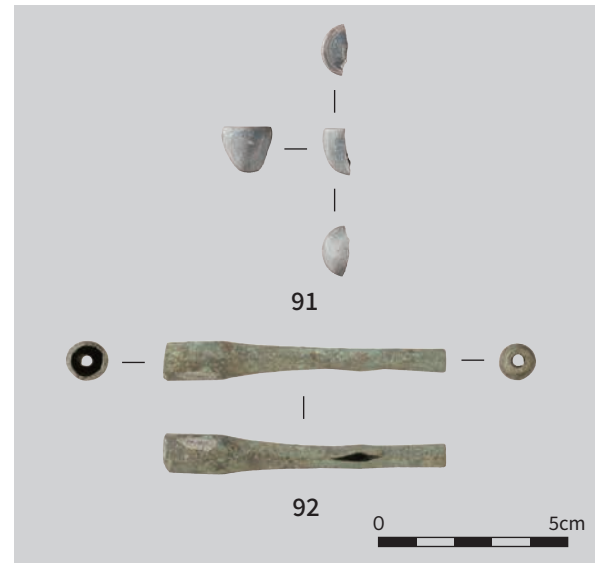
挿図番号 図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第55図 図版31	91	煙管	雁首	-	-	-	素材：陶器。 火皿外径：1.35cm 重量：0.9g	H28 三門南 トレンチ30 攪乱
	92	煙管	吸口	-	-	-	素材：金属製。長さ：7.5cm 小口径：1.05cm 口付径：0.65cm 重量：10.2g	H25 三門 攪乱

第29表 煙管出土状況一覧

素材	部位	個数
陶器	雁首	1
金属製品	吸口	1
煙管総計		2



第55図 煙管



図版31 煙管

17 銭貨

銭貨は中国銭1点、日本銭6点、コイン1点、不明2点の合計10点が出土した(第31表)。

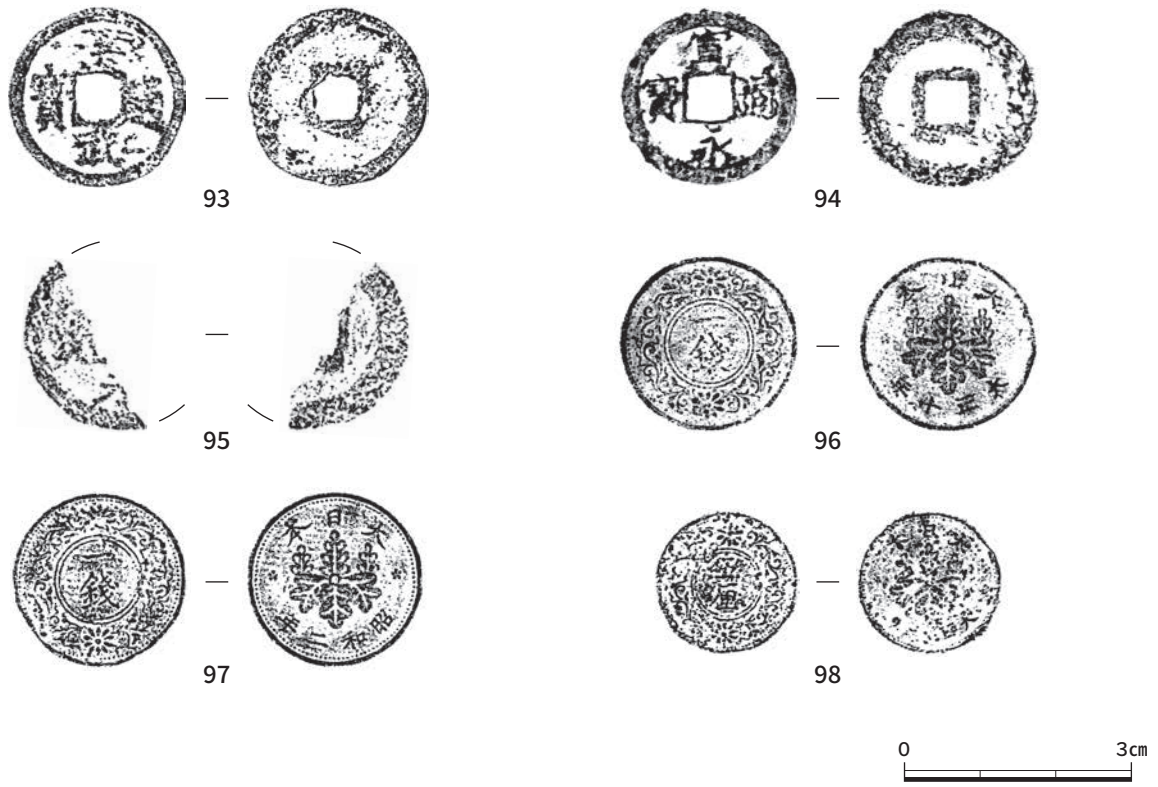
93は洪武通寶。94、95は寛永通寶。96、97は一銭。98は五厘銭である。

第32表 銭貨観察一覧

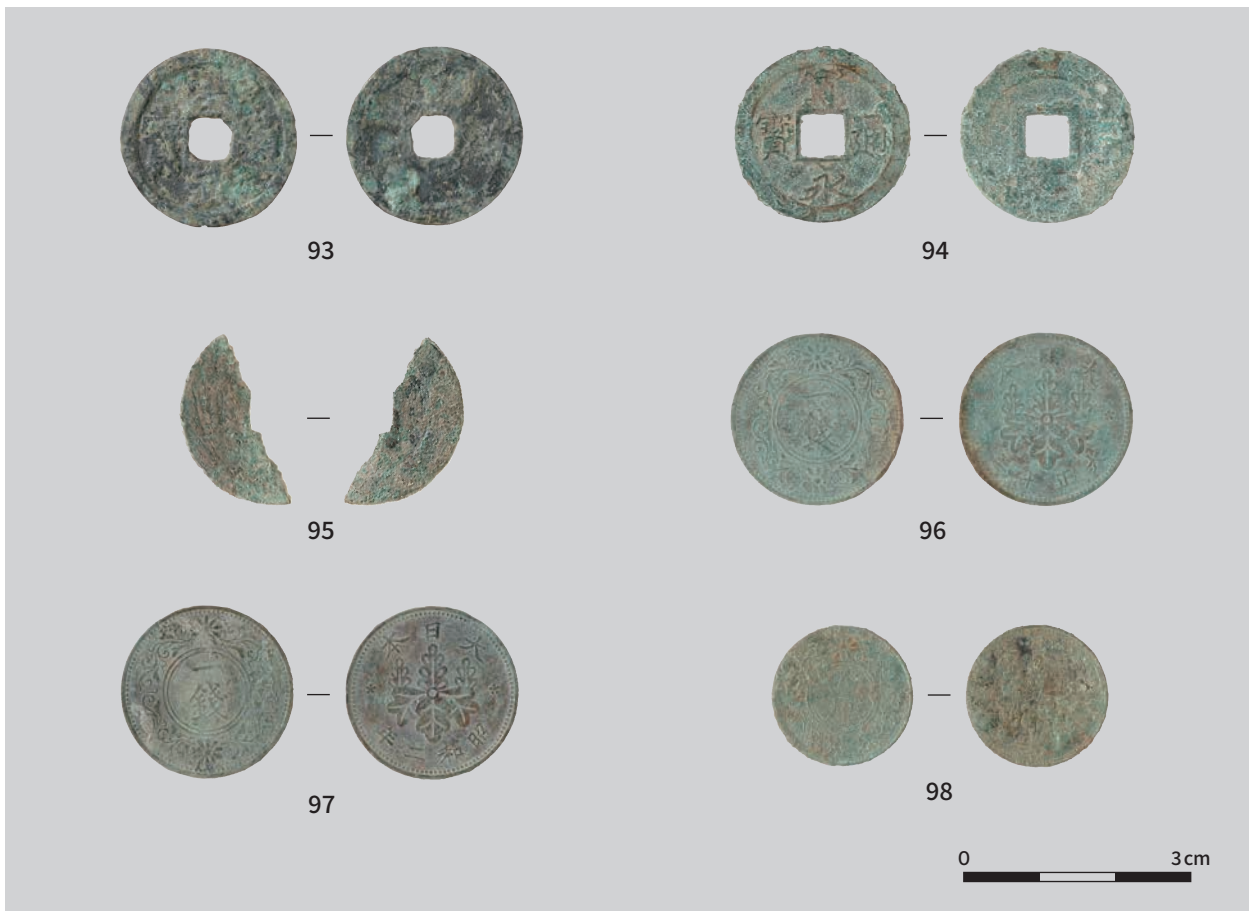
挿図番号 図版番号	種類	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
第56図 図版32	93	銭貨	洪武通寶	-	-	-	銭文：洪武通寶。初鑄年：1368年。明。 外径：2.35cm 孔径：0.54cm 厚さ：0.17cm 重量：4.4g	H25 三門 攪乱
	94	銭貨	寛永通寶 3期	-	-	-	銭文：寛永通寶。3期。 外径：2.35cm 孔径：0.56cm 厚さ：0.13cm 重量：2.7g	H28 三門南 トレンチ29 攪乱
	95	銭貨	寛永通寶	-	-	-	銭文：□永□○。厚さ：0.13cm 重量：1.5g	H25 三門 攪乱
	96	銭貨	一銭	-	-	-	大正十年。 外径：2.3cm 厚さ：0.13cm 重量：3.6g	H28 三門南 トレンチ30 攪乱
	97	銭貨	一銭	-	-	-	昭和二年。 外径：2.31cm 厚さ：0.12cm 重量：3.6g	H28 三門南 トレンチ30 攪乱
	98	銭貨	五厘銭	-	-	-	大正〇年。 外径：1.88cm 厚さ：0.11cm 重量：2.0g	H28 三門南 トレンチ30 攪乱

第31表 銭貨出土状況一覧

年代	分類	初鑄年	個数
明	洪武通寶	1368	1
江戸	寛永通寶	-	1
江戸	寛永通寶3期	1697	1
-	〇〇元寶	-	1
近代	一銭	-	2
近代	五厘銭	-	1
近代	コイン	-	1
-	銭種不明	-	2
銭貨総計			10



第56図 銭貨



図版32 銭貨

18 金属製品

金属製品は鍵1点、金具1点、銃弾1点、葉莢1点の合計4点が出土した(第33表)。

そのうち1点について写真を掲載し、それ以外は集計のみ行った。

99は金具であり、表面に金が確認されること

第33表 金属製品出土状況一覧

種類	器種	個数
金属製品	鍵	1
	金具か	1
	銃弾	1
	葉莢	1
金属製品総計		4

により、全体的に金メッキが施される。長軸1.9cm、短軸1.5cm、厚さ0.06cm、重量0.6g、H25三門トレンチ25掘り下げ中出土。



図版33 金属製品

19 鉄製品

鉄製品は角釘34点、蝶番1点、覆輪1点、鉄鍬1点、金具1点の合計38点が出土した(第34表)。

そのうち2点について写真を掲載し、それ以外は集計のみ行った。

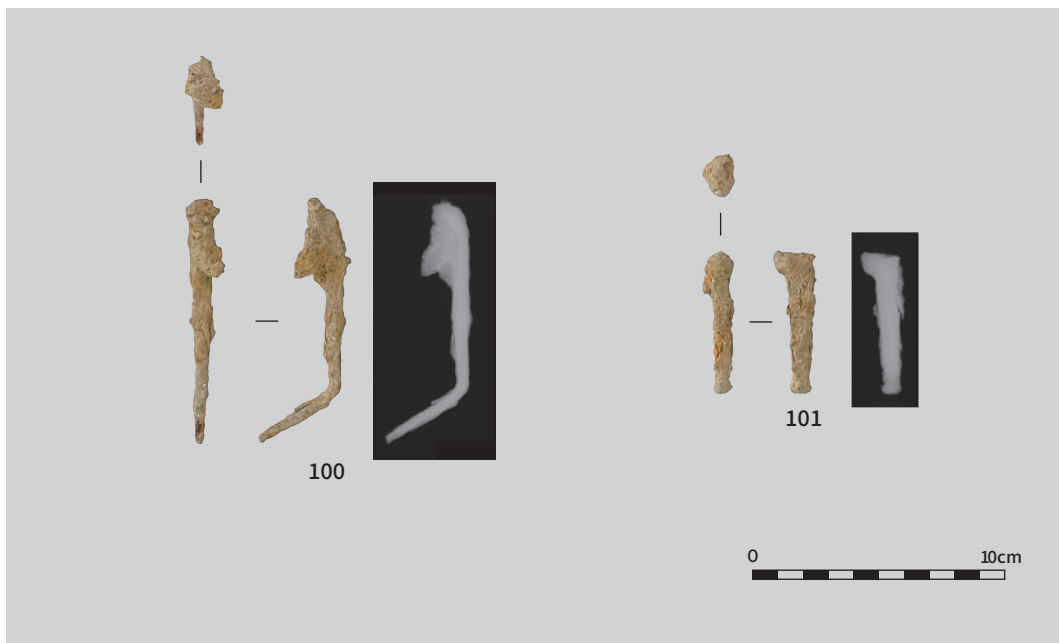
100、101ともに角釘である。

第34表 鉄製品出土状況一覧

種類	器種	個数
鉄製品	角釘	34
	蝶番	1
	覆輪	1
	鉄鍬	1
	金具か	1
鉄製品総計		38

第35表 鉄製品観察一覧

図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
図版34	100	角釘	—	9.9	1.5	0.8	頭部欠損。全体的に錆膨れがみえる。 重量：27.7g	H28 三門南 トレンチ31 攪乱
	101	角釘	—	5.8	1.1	0.7	全体的に錆膨れがみえる。 重量：16.8g	H28 三門南 トレンチ31 攪乱



図版34 鉄製品

20 瓦

明朝系瓦が出土している。軒丸瓦16点、軒平瓦16点、丸瓦249点、平瓦611点、丸平不明144点、合計1036点が出土した(第36表)。

代表的な17点について図化を行い、23点について写真を掲載した。

軒丸瓦 色調別には褐色系、赤色系に区分できる。瓦当文様は側視2型に分類されるものがほとんどである。

104は瓦当部から玉縁部まで残る。105は瓦当面及び瓦当裏の下部にマンガン釉が塗布される。

軒平瓦 色調別には灰色系、褐色系、赤色系に区分できる。瓦当文様は側視1型に分類されるものがほとんどである。

110は小振りのサイズである。

丸瓦 色調別には灰色系、褐色系、赤色系に区分できる。113は褐色系で玉縁部の段部分に「×」印をしたヘラ描きがある。

平瓦 色調別には灰色系、褐色系、赤色系、さらに焼成が堅緻で沖縄産無釉陶器のような質感をもち、断面が赤色のものを硬質陶器質として区分した。

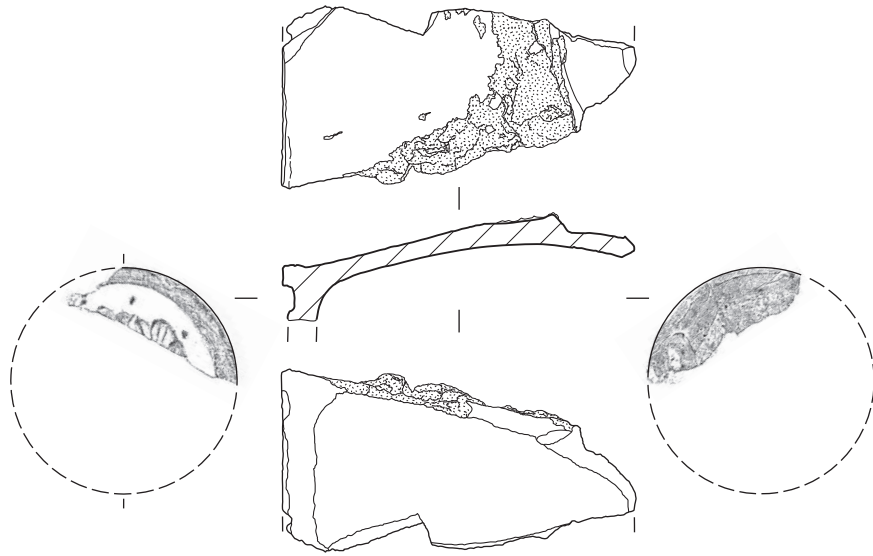
117は灰色系で、凸面に二本線のヘラ描き印、120は灰色系で、凸面に一本線のヘラ描き印がみられる。

第36表 瓦出土状況一覧

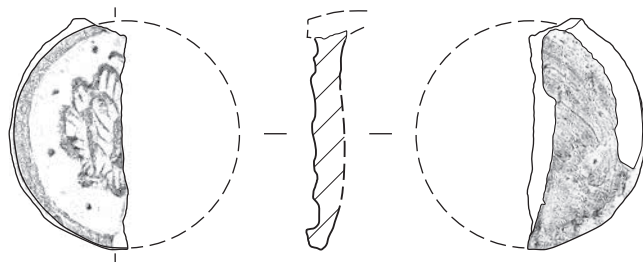
種類	色調	分類	部位	個数	
軒丸瓦	褐色	側視2型 円覚1Bb式	瓦当部	1	
		側視2型 天界1Bb式	瓦当部	1	
		—	瓦当部	1	
	赤色	側視2型 円覚III a01式	瓦当部	1	
		側視2型 第III文様系	瓦当部	6	
		側視2型	瓦当部	2	
		—	瓦当部~玉縁部	1	
—	瓦当部	3			
明朝系軒丸瓦小計				16	
軒平瓦	灰色	—	瓦当部	1	
	褐色	側視1型 第III文様系 Ba式	瓦当部	2	
		—	瓦当部	1	
	赤色	側視1型 御茶III Ba01式	瓦当部	1	
		側視1型 第III文様系 Ba式	瓦当部	7	
		—	瓦当部	4	
明朝系軒平瓦小計				16	
明朝系丸瓦	灰色	—	玉縁部	13	
			端部	9	
			筒部	1	
	褐色	—	玉縁部	26	
			端部	20	
			筒部	27	
	赤色	—	玉縁部~端部	3	
			玉縁部	69	
			端部	36	
			筒部	45	
	明朝系丸瓦小計				249
	明朝系平瓦	灰色	—	広端部	56
狭端部				23	
筒部				60	
褐色		—	広端部	37	
			狭端部	31	
			筒部	52	
赤色		—	広端部~狭端部	8	
			広端部	113	
			狭端部	81	
			筒部	134	
硬質陶器質		—	広端部	5	
			狭端部	4	
			筒部	7	
明朝系平瓦小計				611	
丸平不明	灰色	—	筒部	39	
	褐色	—	筒部	67	
	赤色	—	筒部	38	
明朝系丸平不明小計				144	
明朝系瓦総計				1036	

第 37 表 瓦観察一覧

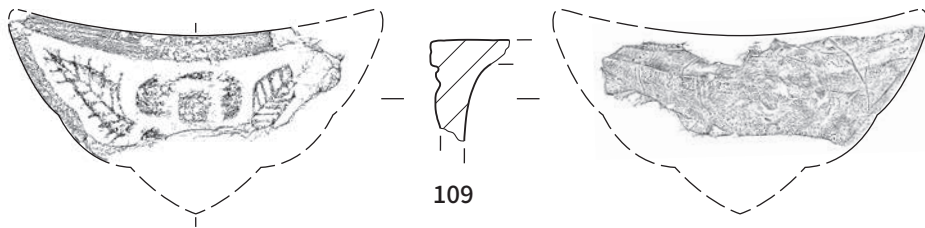
挿図番号 図版番号	種類	部位	色調	分類	観察事項	出土地	
第 57 図 図版 35	102	明朝系 軒丸瓦	瓦当部	褐色	側視 2 型 円覚 1Bb 式	瓦当推定径：14.0cm 重量：160g	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	103	明朝系 軒丸瓦	瓦当部	褐色	側視 2 型 天界 1Bb 式	全体的に風化しており、瓦当の文様はやや不明瞭。 瓦当推定径：13.0cm 重量：340g	H28 三門南 トレンチ 31 瓦溜まり 1 検出中
	104	明朝系 軒丸瓦	瓦当部 玉縁部	赤色	側視 2 型	凸面の外周に漆喰が残る。玉縁裏の側面は 1 回 の面取り。瓦当径 15.0cm 玉縁部：5.4cm 重量：680g 角 1	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	105	明朝系 軒丸瓦	瓦当部	赤色	側視 2 型 円覚 III a01 式	瓦当裏のナデは比較的丁寧である。瓦当文様及 び縁、筒部、瓦当裏の下部にマンガノ釉が塗布 される。瓦当径：15.2cm 重量：280g	H28 三門南 トレンチ 29 攪乱
	106	明朝系 軒丸瓦	瓦当部	赤色	側視 2 型 第 III 文様系	瓦当裏のナデは比較的丁寧である。 瓦当推定径：14.0cm 重量：180g	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	107	明朝系 軒平瓦	瓦当部	褐色	側視 1 型 第 III 文様系 Ba 式	瓦当裏は横方向のナデがみられる。 重量：140g	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	108	明朝系 軒平瓦	瓦当部	褐色	側視 1 型 第 III 文様系 Ba 式	全体的に風化がみられ、文様は薄く、やや不明 瞭である。瓦当裏は左上から右方向へのナデ がみられる。重量：360g	H28 三門南 トレンチ 31 サブトレンチ 1 攪乱
	109	明朝系 軒平瓦	瓦当部	赤色	側視 1 型 御茶 III Ba01 式	瓦当面は風化がみられ、文様は薄い。瓦当裏は 横方向と斜め方向へのナデがみられる。 重量：540g	H25 三門 表採
	110	明朝系 軒平瓦	瓦当部	赤色	側視 1 型 第 III 文様系 Ba 式	造りが小さい。瓦当裏のナデは比較的丁寧である。 重量：120g	H28 三門 石階段 表採
第 58 図 図版 36	111	明朝系 丸瓦	端部	灰色	—	全体的に風化がみられる。凸面の外周に漆喰が 残る。端部は約 1.5～2.5cm 幅の面取りを施す。 重量：740g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	112	明朝系 丸瓦	端部	灰色	—	造りが大きい。端部は約 1.5cm 幅の面取りを施 す。重量：860g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	113	明朝系 丸瓦	玉縁部	褐色	—	全体的に風化がみられる。段部分に「×」のヘラ 描き印有り。玉縁裏の側面は 1 回の面取り。 玉縁部：4.6cm 重量：660g 角 2	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	114	明朝系 丸瓦	玉縁部	褐色	—	全体的に風化がみられる。凸面の外周に漆喰が 残る。玉縁裏の側面は 1 回の面取り。 重量：300g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	115	明朝系 丸瓦	玉縁部	褐色	—	凸面に漆喰が残る。玉縁部に 1 本線のヘラ描き 印有り。玉縁裏の側面に面取りがみられる。 玉縁部：4.2cm 重量：100g	H 28 三門南 トレンチ 29 攪乱
第 59 図 図版 37	116	明朝系 丸瓦	玉縁部 端部	赤色	—	凸面の外周に漆喰が残る。 玉縁部：3.9cm 重量：1,400g 角 2	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	117	明朝系 平瓦	広端部	灰色	—	凸面に 2 本線のヘラ描き印有り。凹面に布目痕 と桶板綴り紐圧痕がみられる。 厚さ：1.8cm 重量：460g	H 28 三門南 トレンチ 31 サブトレンチ 1 攪乱
	118	明朝系 平瓦	広端部	灰色	—	凹面に布目痕と桶板綴り紐圧痕がみられる。 厚さ：1.4cm 重量：480g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 29 攪乱
	119	明朝系 平瓦	広端部	灰色	—	凹面に布目痕と桶板綴り紐圧痕がみられる。 厚さ：1.6cm 重量：340g	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
第 60 図 図版 38	120	明朝系 平瓦	狭端部	灰色	—	凹面に漆喰が残る。凸面に 1 本線のヘラ描き印 有り。 厚さ：1.5cm 重量：300g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 31 サブトレンチ 1 攪乱
	121	明朝系 平瓦	狭端部	灰色	—	凹面に漆喰が残る。 厚さ：1.3cm 重量 340g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	122	明朝系 平瓦	広端部 狭端部	赤色	—	凸面の両端側には幅広の浅いナデによる凹みが みられる。凹面の広端部側に桶板綴り紐圧痕が みられる。 狭端部：19.6cm 厚さ 1.4cm 重量：820g 角 3	H 28 三門 表採
	123	明朝系 平瓦	広端部	硬質 陶器質	—	凹面に布目痕と桶板綴り紐圧痕がみられる。 厚さ：2.0cm 重量：240g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	124	明朝系 平瓦	狭端部	硬質 陶器質	—	凸面の端部には幅広のナデによる凹みがみられる。 厚さ：1.7cm 重量：320g 角 1	H 28 三門南 トレンチ 30 攪乱



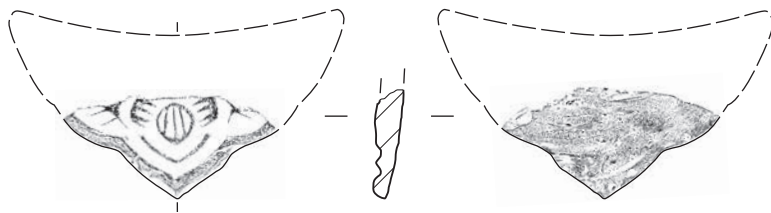
104



105



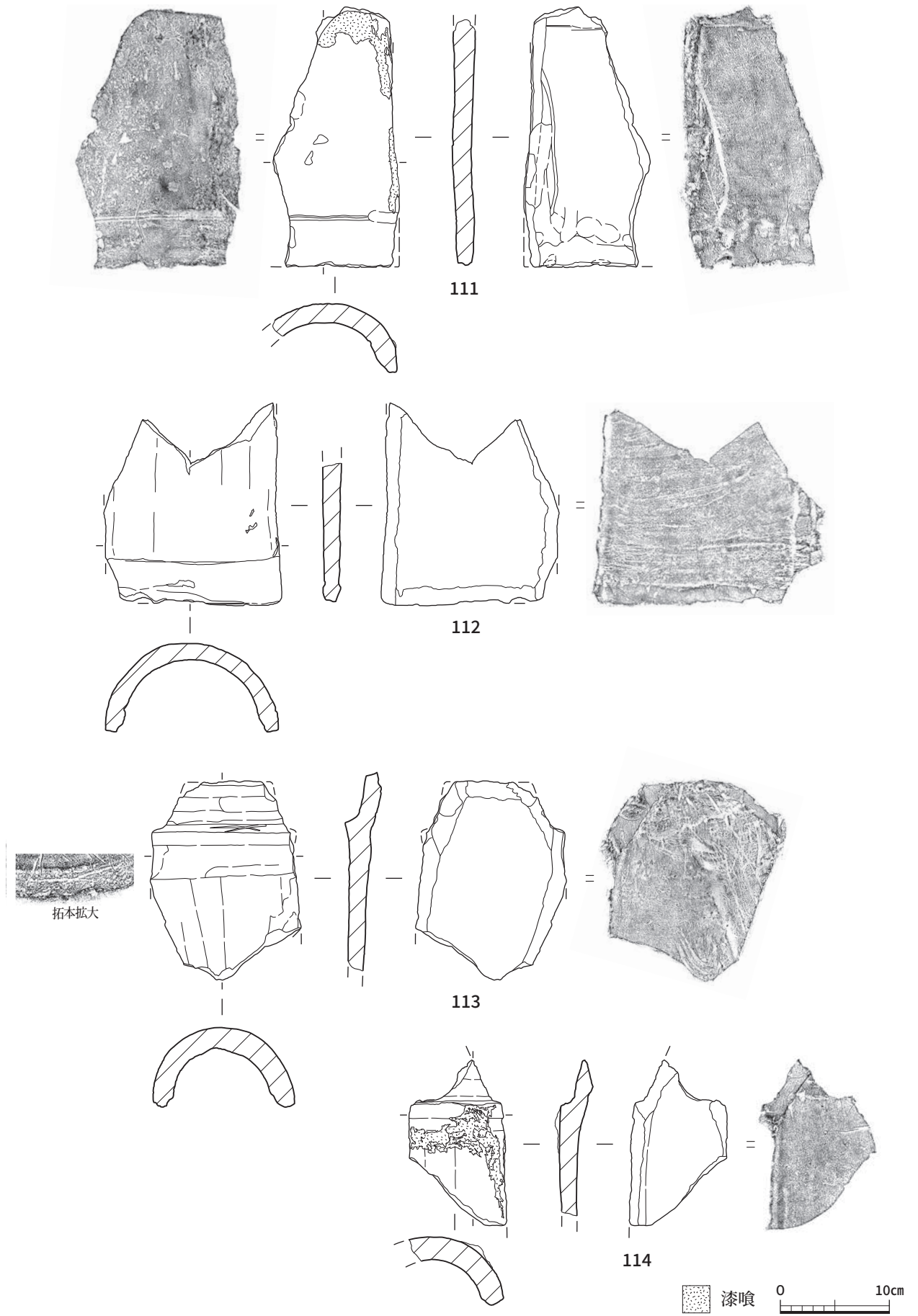
109



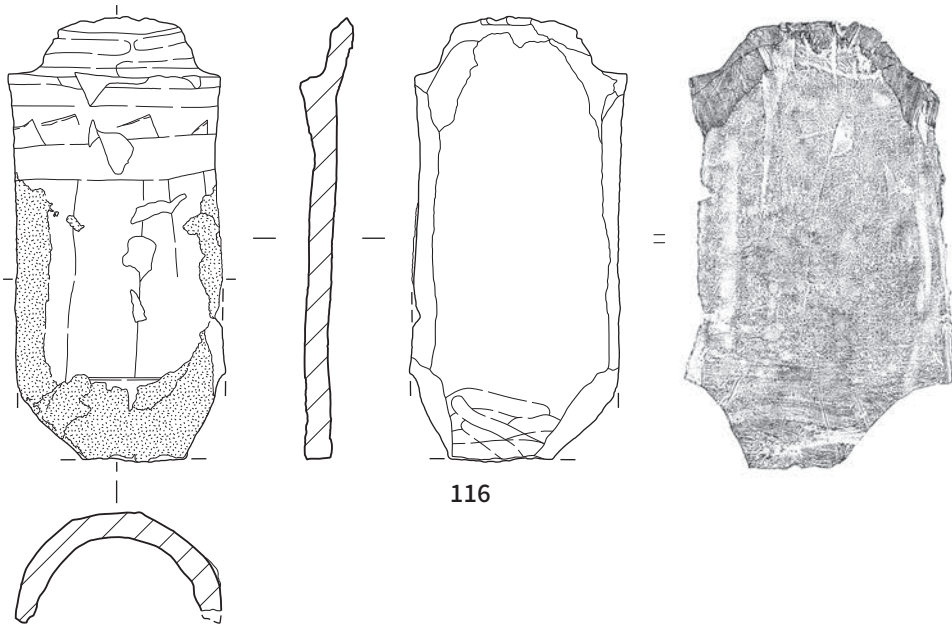
110



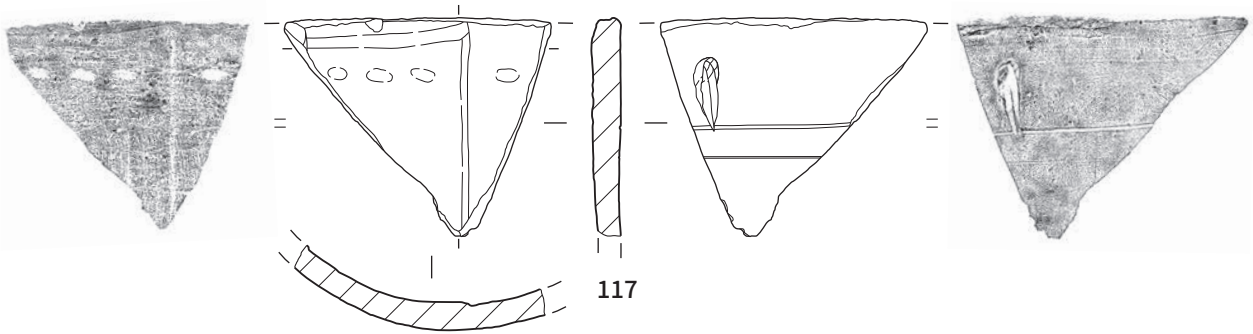
第57図 瓦1



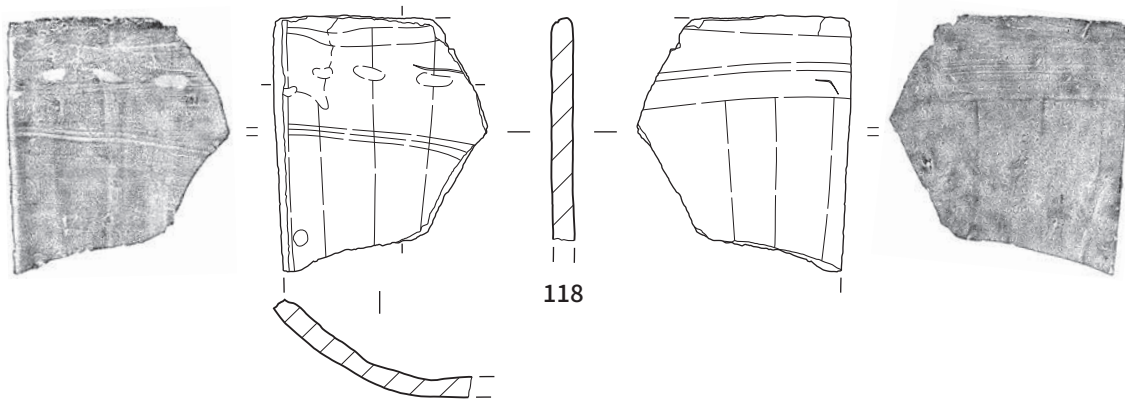
第58図 瓦2



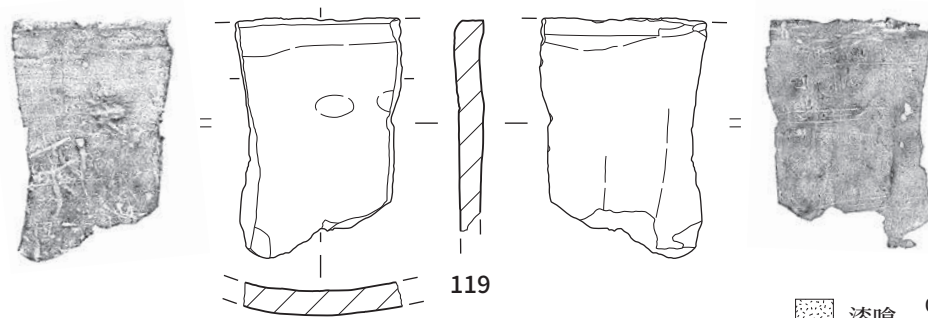
116



117



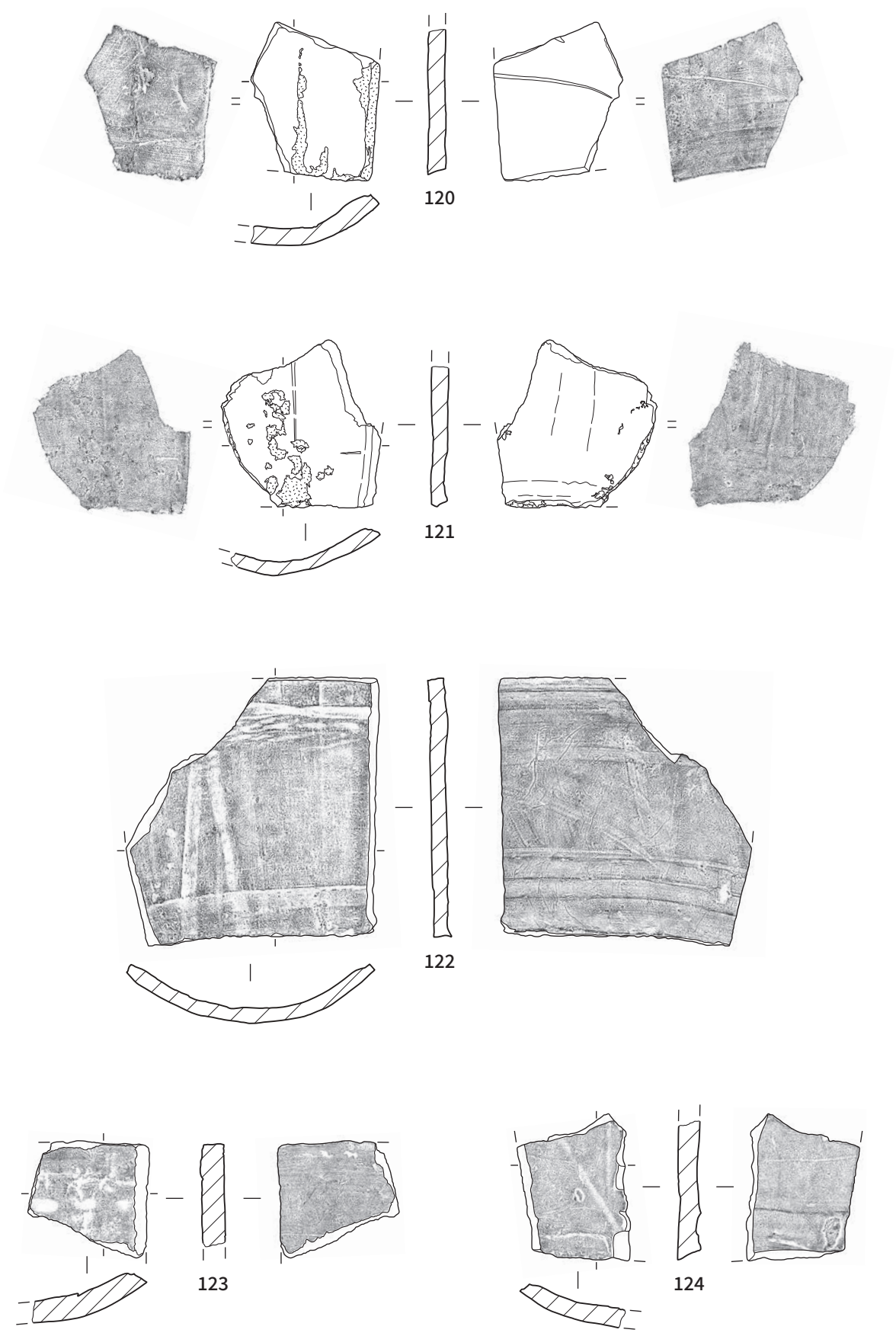
118



119

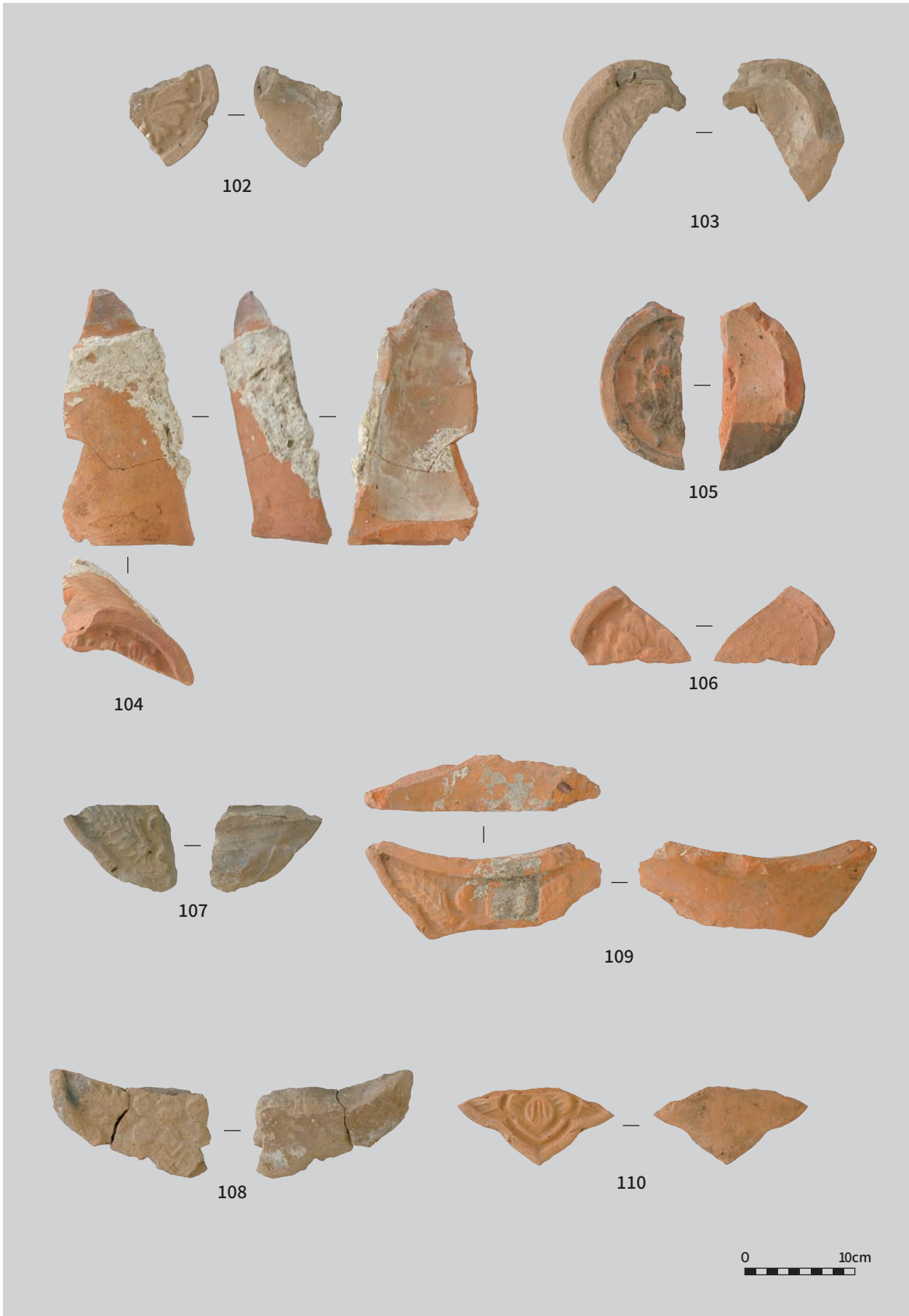


第59図 瓦3



漆喰 0 10cm

第60図 瓦4



図版 35 瓦 1



図版 36 瓦 2



図版 37 瓦 3



図版 38 瓦 4

21 埴

埴は灰色系、褐色系、赤色系に区分でき、上原分類(2011)のI式(平面に敷き並べるタイプ)、III式(端部噛み合わせタイプ)、IV式(外観に下駄状の突起を有するタイプ)など合計79点が出土した(第38表)。中には⊕の刻印がみられるものもあった。

代表的な9点について図化を行い、13点について写真を掲載した。

125、126は○の中に「大」と「二」、135は⊕の刻印と一本線のへら描き印がみられる。

※ I 式

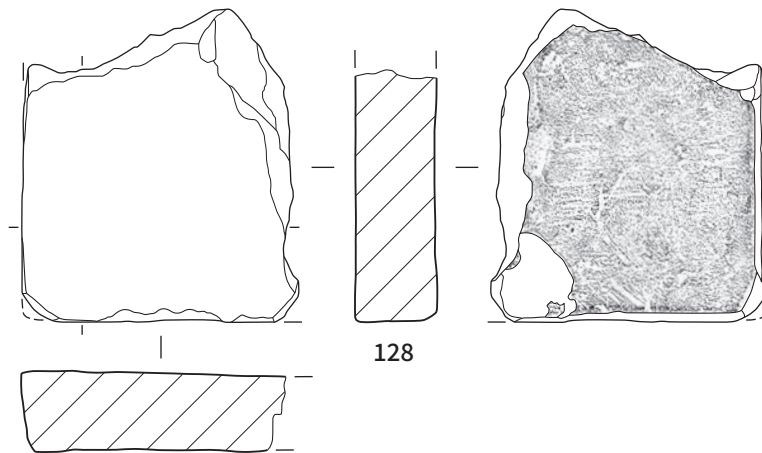
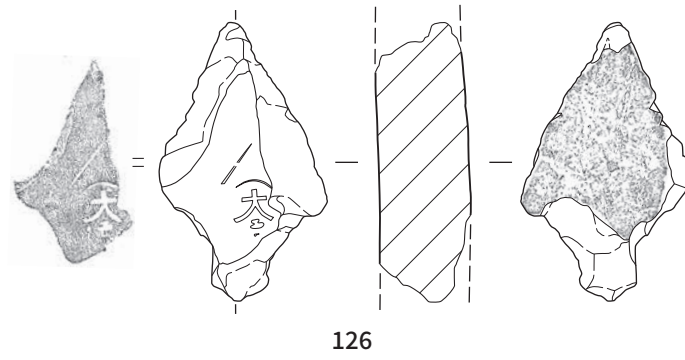
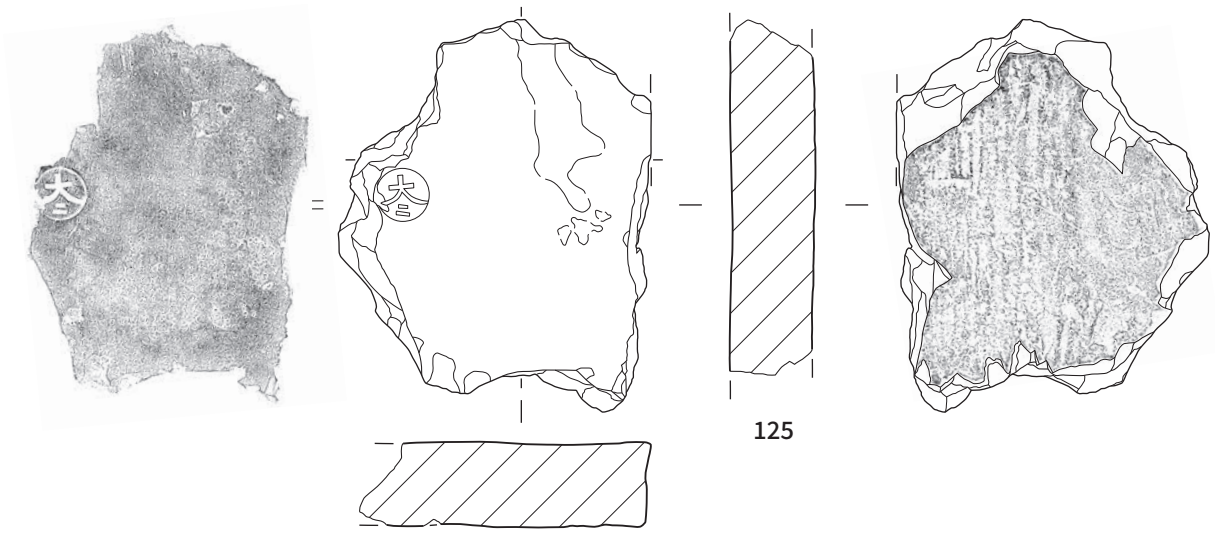
方形をA類、三角形をB類とし、さらに厚みからa類(5～6cm厚)、b類(3～4cm厚)に細分。

第38表 埴出土状況一覧

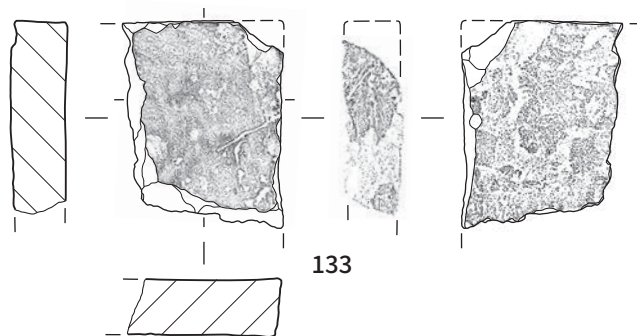
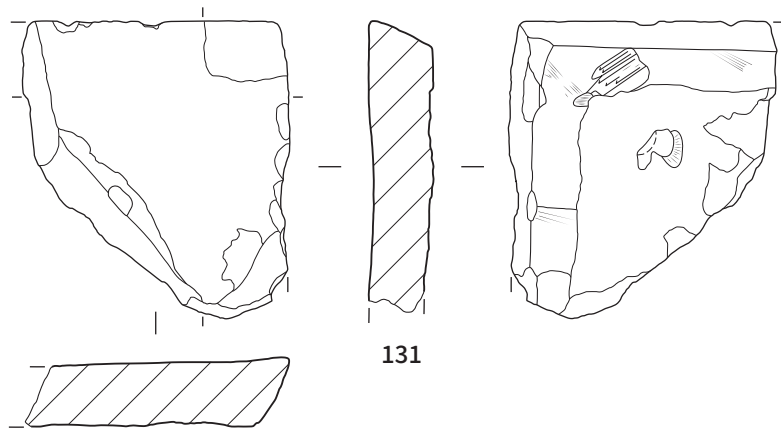
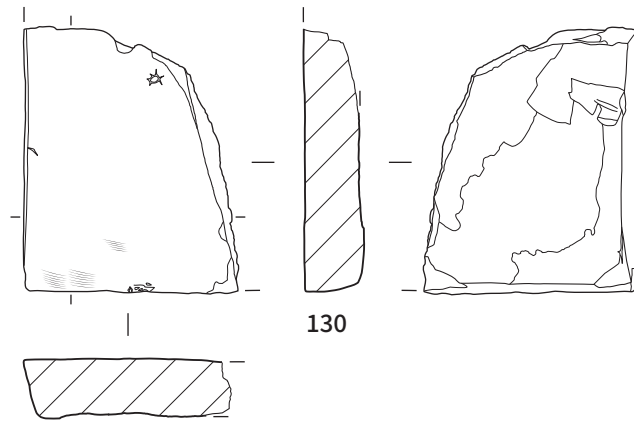
色調	分類	形状	個数
灰色	I 式	Aa	1
		Ab	2
		Ba	1
		Bb	2
		B	7
	IV式	A	2
	—	—	1
褐色	I 式	Ab	11
		Bb	2
		b	7
	III式	—	2
	—	—	14
赤色	I 式	Ab	7
		Bb	2
		b	8
		—	—
埴総計			79

第39表 埴観察一覧

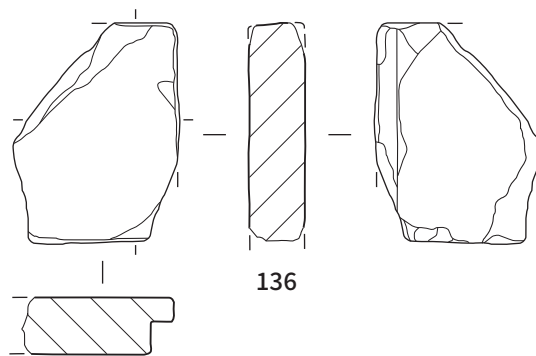
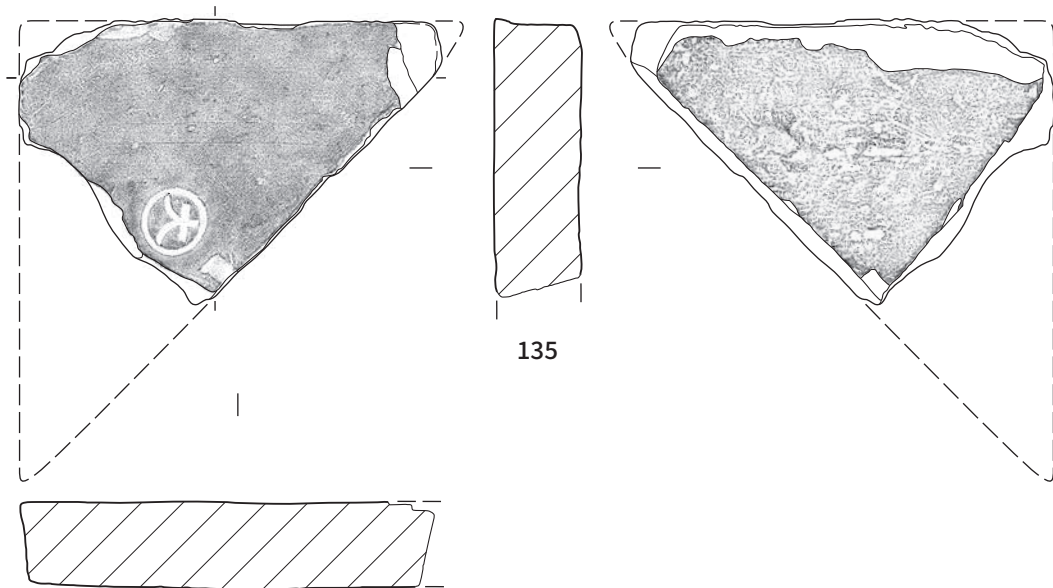
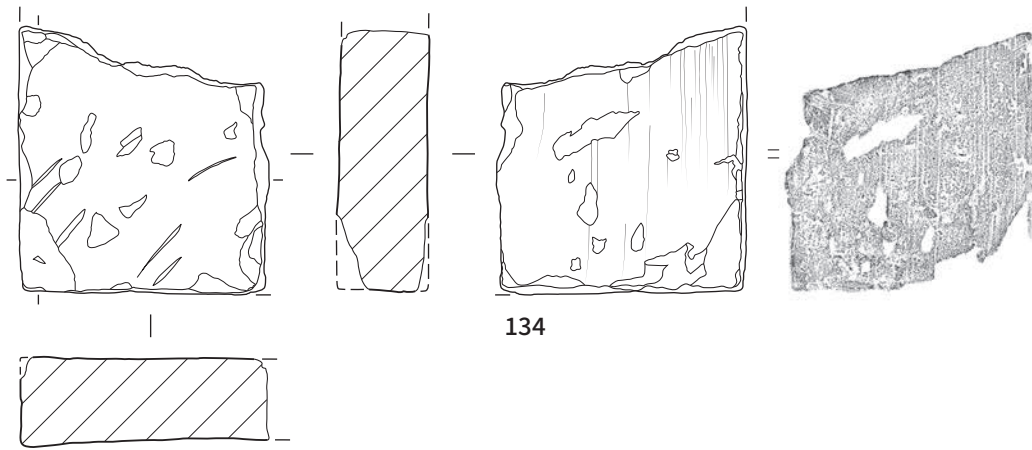
挿図番号 図版番号	種類	部位	色調	分類	観察事項	出土地	
第61図 図版39	125	埴	—	灰色	IAb	表面は一部剥離がみられる。表面に○と大と二の刻印有り。厚さ4.5cm 重量1,660g	H25 三門 攪乱
	126	埴	—	灰色	IAb	全体的に風化がみられる。表面に○と大と二の刻印有り。厚さ4.8cm 重量400g	H25 三門 攪乱
	127	埴	—	灰色	IAb	全体的に風化がみられる。厚さ3.9cm 重量840g	H28 三門 表採
	128	埴	角1	褐色	IAb	全体的に被熱を受けていると思われる。厚さ4.4cm 重量1,260g	H25 三門 表採
第62図 図版40	129	埴	角1	褐色	IAb	焼き膨れによる表目の凹凸が目立つ。厚さ4.5cm 重量440g	H25 三門 攪乱
	130	埴	角1	赤色	IAb	表面のナデ調整が良好。厚さ3.2cm 重量640g	H25 三門 攪乱
	131	埴	角1	赤色	IAb	表面のナデ調整は良好。全体的に風化がみられる。厚さ3.4cm 重量780g	H28 三門南 表採
	132	埴	角1	赤色	IAb	表面のナデ調整は良好。全体的に風化がみられる。厚さ3.3cm 重量800g	H28 三門 攪乱
	133	埴	角1	赤色	IAb	表面のナデ調整は良好。表面に一本線のへら描き印有り。厚さ3.6cm 重量740g	H 28 三門南 トレンチ30 攪乱
第63図 図版41	134	埴	角1	褐色	Ib	全体的に風化がみられる。側面に複数の平行線によるへら描き印有。厚さ4.8cm 重量1,120g	H 22 三門 トレンチ21 4層
	135	埴	角2	灰色	IBb	表面のナデ調整は良好。表面に⊕の刻印、側面に複数の平行線によるへら描き印有。厚さ4.6cm 重量1,480g	H 25 三門 攪乱
	136	埴	角1	褐色	III	全体的に風化がみられる。側面に段を形成する。厚さ3.0cm 重量320g	H 28 三門南 トレンチ30 攪乱
	137	埴	角1	灰色	IVA	全体的に風化がみられる。裏面中央部分に段を形成する。側面側は斜めに削られる。厚さ3.3cm 重量1,000g	H 28 三門南 トレンチ30 攪乱



第61図 埴1



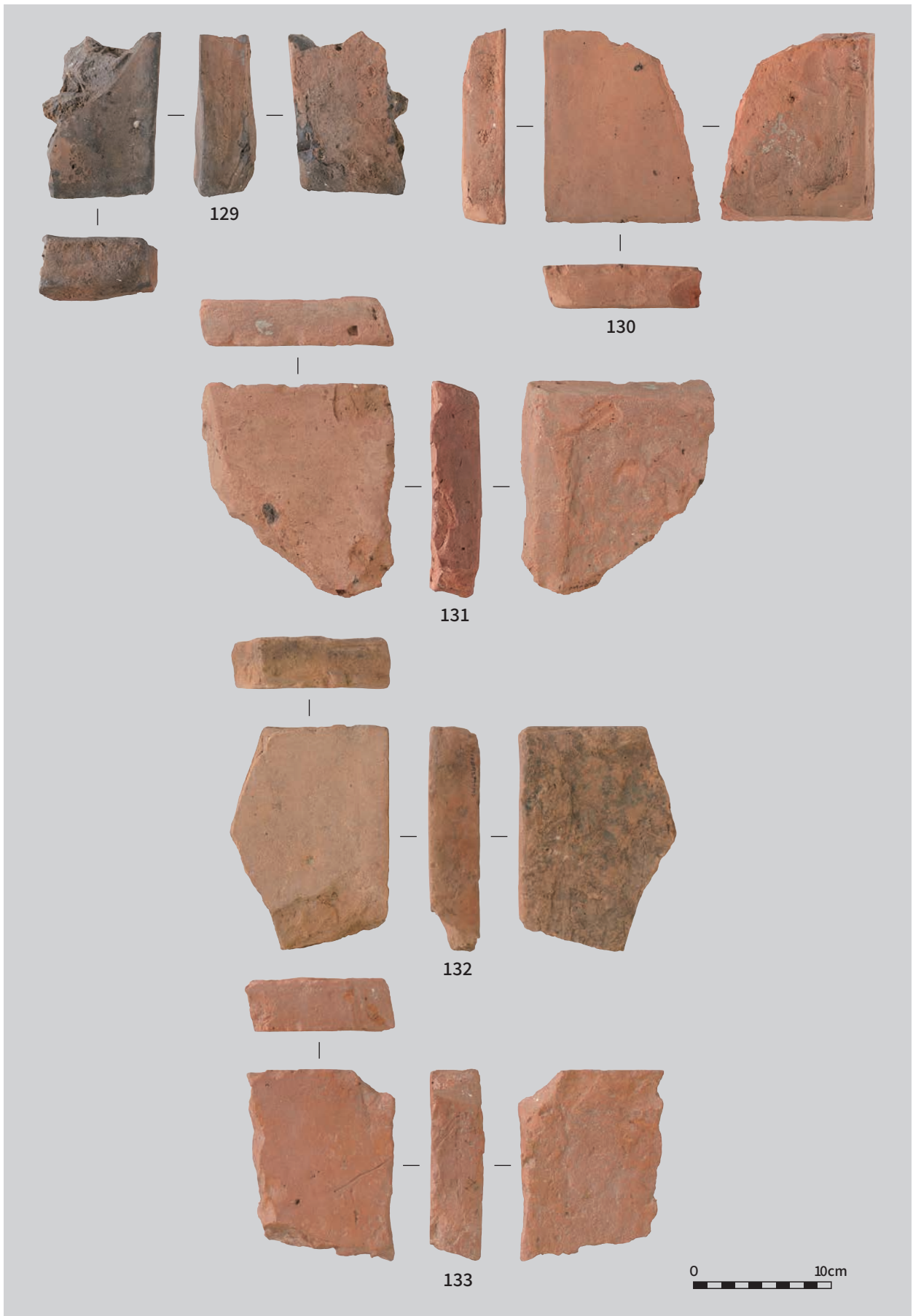
第62図 磚2



第63図 磚3



図版 39 磚 1



図版 40 罎 2



図版 41 磚 3

22 レンガ

レンガは13点出土している(第40表)。そのうち1点について写真を掲載し、それ以外は集計のみ行った。

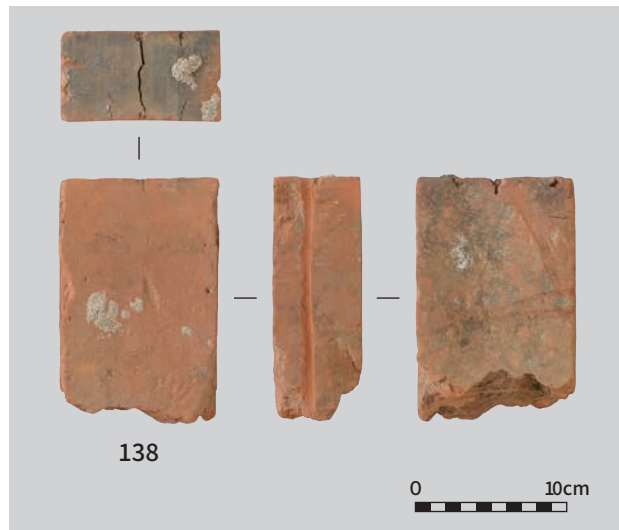
138 は側面に刻線がみられる。

第40表 その他遺物出土状況一覧

種類	器種	個数
レンガ	—	13
プラスチック製品	歯ブラシ	1
ガラス製品	瓶	8
	化粧瓶	2
木材片	—	6

第41表 レンガ観察一覧

図版番号	種類	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)		
図版 42	138	レンガ	—	—	—	—	表面と側面の一部に漆喰がみられる。 短軸 10.3cm 厚さ 5.9cm 重量 1,400g	H28 三門 攪乱

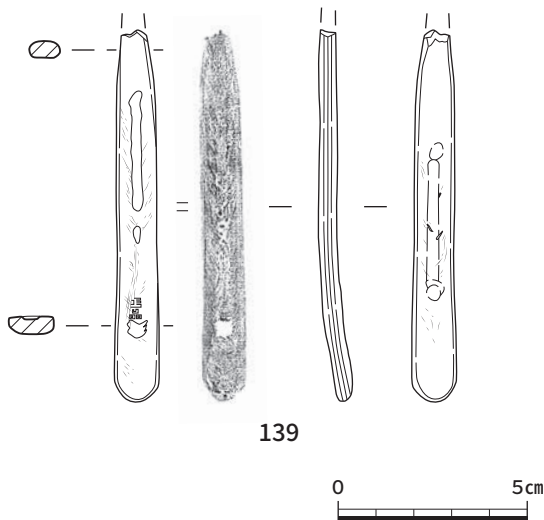


図版 42 レンガ

23 プラスチック製品

プラスチック製品は歯ブラシが1点出土している(第40表)。139は頭部が欠損しているが、

歯ブラシと考えられる。厚さ0.5cmで、表面に「○品」という刻銘がみられる。H25三門攪乱出土。



第64図 プラスチック製品



図版 43 プラスチック製品

24 碍子^{がいし}

碍子は3点出土している(第42表)。そのうち2点について写真を掲載し、それ以外は集計のみ行った。

140は磁器製で、下部の底には△の中に1つ点の印(記号)がみられる。全長7.7cm、上部の底径10.0cm、下部の底径8.2cm、中央部の孔径2.2cm、重量400g。H28三門南トレンチ31サブ

トレンチ1攪乱出土。

141は沖縄産施釉陶器製で、上部は饅頭形、胴部は円柱形をなす。全長4.4cm、上部の最大径は3.4cm、胴部径3.3cm、中央部の孔径0.7cm、重量53.8g。H28三門南トレンチ30攪乱出土。

第42表 碍子出土状況一覧

器種	材質	個数
碍子	本土産磁器	2
	沖縄産施釉陶器	1
碍子総計		3



図版 44 碍子

25 ガラス製品

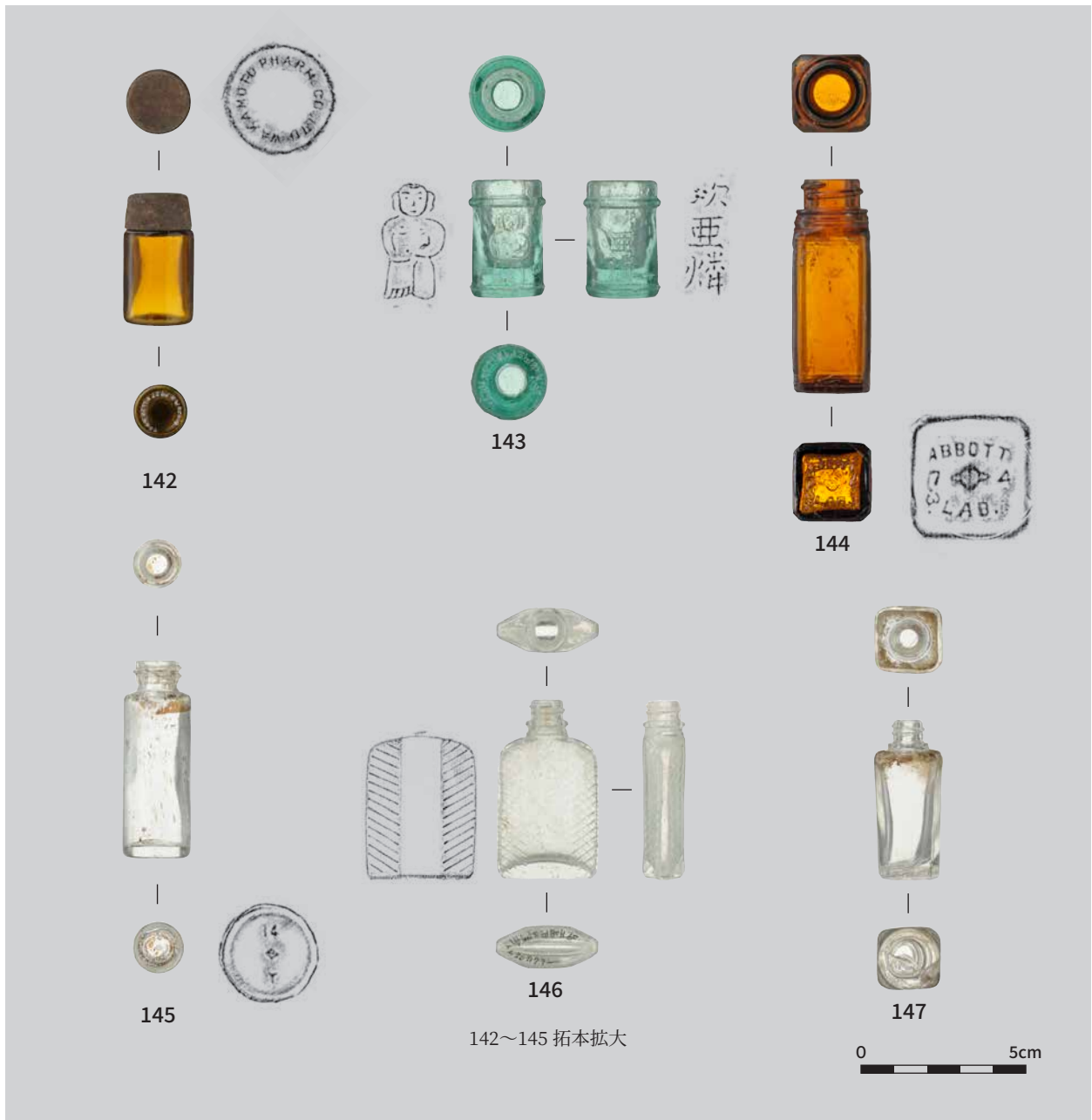
ガラス製品は10点出土している(第40表)。そのうち6点について写真を掲載し、それ以外は

集計のみ行った。

142～144は薬瓶、その他に化粧瓶などが確認される。

第43表 ガラス製品観察一覧

図版番号	器種	部位	分類	法量 (cm)			観察事項	出土地	
				口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (高さ)			
図版 45	142	瓶	口～底部	—	2.0	2.4	4.4	胴部の断面形は円形。プラスチック製の蓋が残る。蓋の上面に「WAKAMOTO PHARM CO LTD」のエンボス。わかもと製薬株式会社の名前。	H28 三門南 トレンチ 29 攪乱
	143	瓶	口～底部	—	2.1	2.2	3.5	胴部の断面形は円形。次亜燐の容器。胴部に「次亜燐」とふくよかな関取のエンボス。栄養剤。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	144	瓶	口～底部	—	1.7	2.3	6.4	胴部の断面形は隅丸方形。胴上部に3本線、下部に4本線のエンボス。米国アポット・ラボラトリーズの製品。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	145	瓶	口～底部	—	1.3	2.0	5.9	胴部の断面形は円形。外底にエンボス。上に「14」。中に記号?。下に「T」か「Y」。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	146	瓶	口～底部	—	0.9	2.9	5.3	胴部の断面形は細長い八角形。胴部の両面に斜線のエンボス。	H28 三門南 トレンチ 30 攪乱
	147	瓶	口～底部	—	0.8	1.8	4.8	日用品胴部の断面形は隅丸方形。	H28 三門南 トレンチ 29 攪乱



図版 45 ガラス製品

26 木材片

木材片は6点出土している(第40表)。そのうち3点について写真を掲載し、それ以外は集計のみ行った。

148～150の木材片は、平成20年度の調査時に三門地区の攪乱層から見つかったものである。

攪乱層出土であるものの、三門に関する何らかの木材の可能性も考えて取り上げている。しかしながら、樹種同定などの分析は実施しておらず、詳細については不明である。



図版 46 木材片

第5節 自然遺物

今回の発掘調査では自然遺物(脊椎動物遺体及び貝類遺体)も少量出土した。以下に、概要をまとめる。

1 脊椎動物遺体

脊椎動物遺体については、東海大学海洋学部海洋文明学科講師の丸山真史氏に整理指導及び種同定をいただいた。

出土した脊椎動物遺体は魚類、鳥類、哺乳類が確認されている(第45表)。遺構や造成土中からの出土は僅かである。

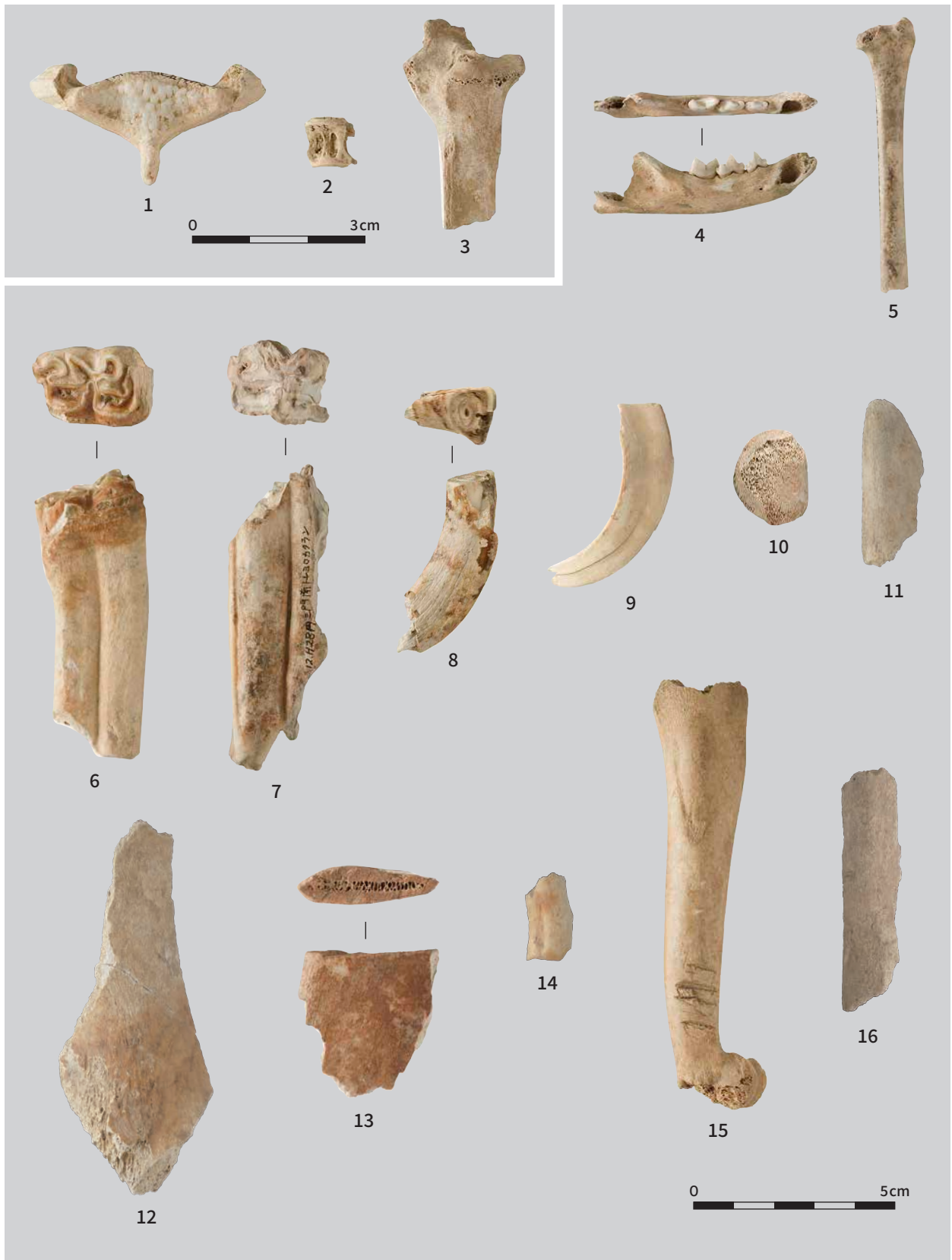
第44表 脊椎動物遺体種名一覧

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES		
ベラ科 (シロクラベラ型)		Labridae cf. <i>Cherodon shoenleinii</i>
科・属不明		Fam. et gen. indet
鳥 綱 AVES		
ニワトリ		<i>Gallus gallus</i>
科・属不明		Fam. et gen. indet
哺乳綱 MAMMALIA		
食肉目 Carnivora		
イヌ科 Canidae		
イヌ?		<i>Canis familiaris?</i>
ネコ科 Felinae		
ネコ		<i>Felis catus</i>
奇蹄目 Perissodactyla		
ウマ科 Equidae		
ウマ		<i>Equus ferus</i>
偶蹄目 Artiodactyla		
イノシシ科 Suidae		
イノシシ/ブタ		<i>Sus scrofa</i>
ウシ科 Bovidae		
ウシ		<i>Bos taurus</i>
ヤギ		<i>Capra hircus</i>

第45表 脊椎動物遺体出土状況一覧

出土地 分類群/部位/左右				トレンチ 11		トレンチ 13		石積 3・5	トレンチ 27		裏込め内	表土・攪乱	合計
				石積 1 造成土		4層 (ニービ層)	5層		石積 2 裏込め内				
魚類	ベラ科	下咽頭骨	—					①					1
	不明	脊椎骨	—					1					1
鳥類	ニワトリ	脛骨	左						1				1
	不明	基節骨	不明								1		1
哺乳類	イヌ?	肋骨	不明								1		1
		ネコ	下顎骨	右								1	
	大腿骨		左								1		1
	ウマ	下顎骨(臼歯)	右								2		2
		第1切歯	不明							1			1
	イノシシ/ブタ	下顎骨(犬歯)	右								1		1
		肋骨	右			2							2
		膝蓋骨	右				1						1
	イノシシ/ブタ?	四肢骨	不明								1		1
	ウシ/ウマ	四肢骨	不明								1		1
		部位不明	不明	(1)									1
	ウシ	肋骨	不明								{1}		1
	ウシ?	臼歯	不明								1		1
	ヤギ	上腕骨	左								①		1
不明	四肢骨	不明								1		1	
	不明	不明				(1)						1	
合計				1		2	2	2	1	1	13	22	

注 (): 破片、○: キズあり、{ } : ノコギリ切断



図版 47 脊椎動物遺体

魚 1.ベラ科 シロクラベラ型 下咽頭骨(キズあり) 2.魚類(未同定)脊椎骨 ニワトリ 3.左 脛骨
 ネコ 4.右 下顎骨 P₃P₄M₁ 5.左 大腿骨 ウマ 6.右 下顎骨 白歯 7.右 下顎骨 白歯 8.第1切歯
 イノシシ/ブタ 9.右 下顎骨 犬歯 10.右 膝蓋骨 イノシシ/ブタ? 11.四肢骨 ウシ/ウマ 12.四肢骨
 ウシ 13.肋骨(ノコギリ切断) ウシ? 14.白歯 ヤギ 15.左 上腕骨(キズあり) 哺乳類 16.四肢骨

2 貝類遺体

貝類遺体については、千葉県立中央博物館主任研究員の黒住耐二氏に整理指導及び種同定をいただいた。

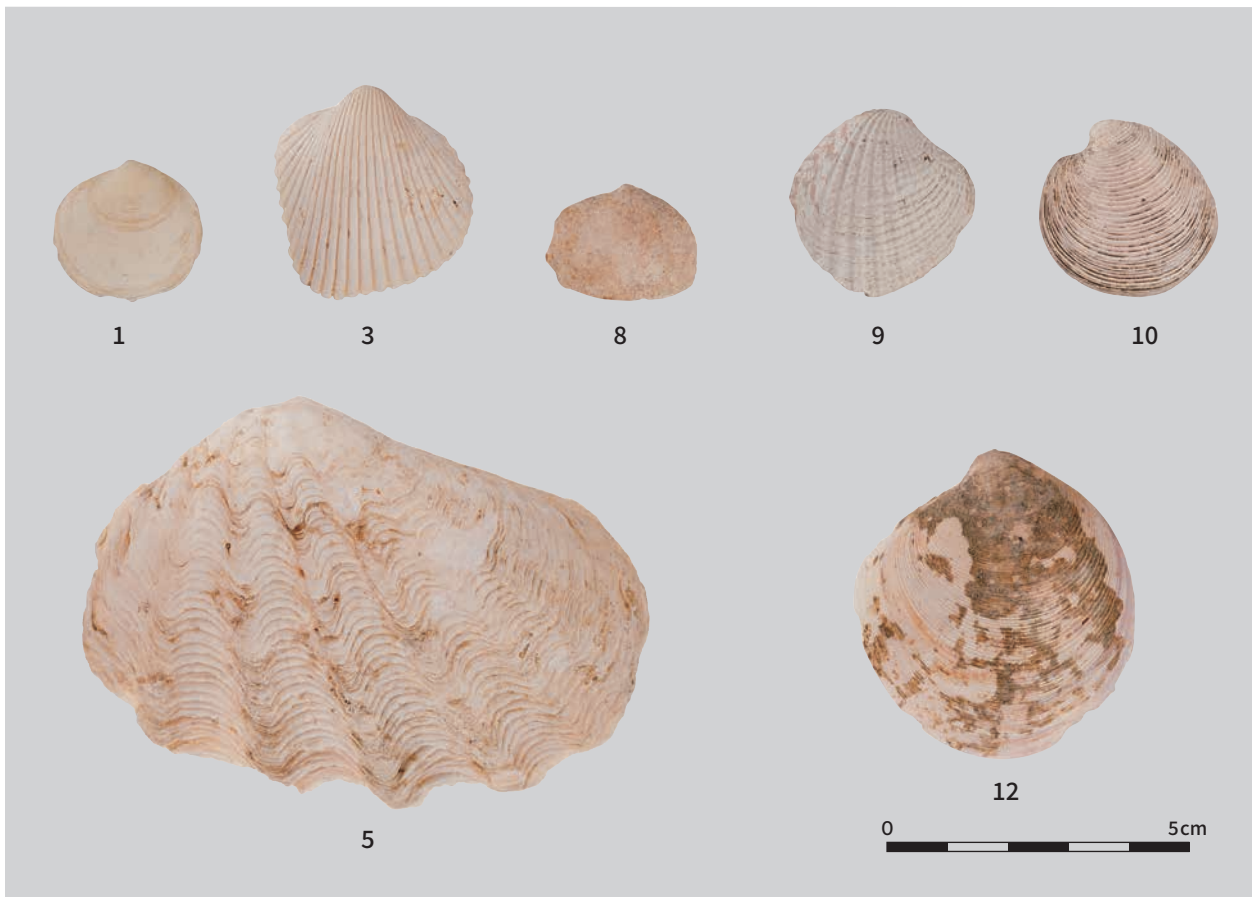
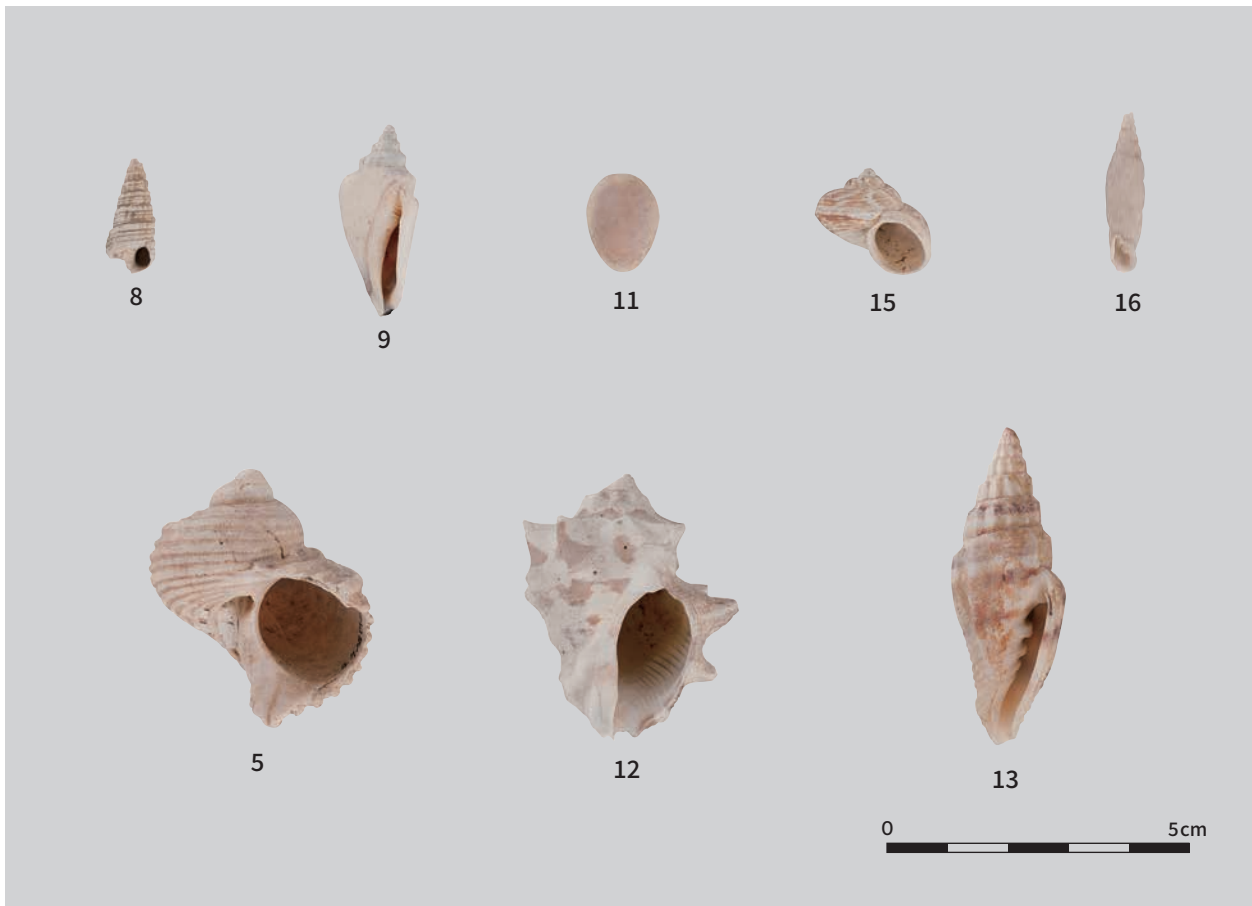
出土した貝類遺体は17科27種が確認されている(第47表)。ヤコウガイについては、加工痕の残る破片が攪乱層から出土しており、第4節の「13 貝製品」で掲載している。

第46表 沖縄における貝類の生息場所類型

大区分	小区分	底質等
I 外洋・サンゴ礁域	0 潮間帯上部	a 岩礁
	I-0 ノッチ	b 転石
	III-0 マングローブ	c 砂/泥
	1 潮間帯中・下部	d 河川礫底
II 内湾・転石域	2 亜潮間帯上縁部	f 植物上
	I-2 イノー内	
	3 干瀬 (I のみに適用)	
	4 礁斜面	
IV 淡水域	5 止水	
	6 流水	
V 陸域	7 林内	
	8 林内・林縁部	
	9 林縁部	
	10 海浜部	
VI その他	11 打ち上げ物	
	12 化石	

第47表 貝類遺体の分類と生息場所類型

番号	軟体動物部門 Mollusca	生息地類型	番号	二枚貝綱 Bivalvia	生息地類型
	腹足綱 Gastropoda				
	ニシキウズ科 Trochidae			ツキガイ科 Lucinidae	
1	サラサバテイラ <i>Tectus niloticus</i>	I-4-a	1	ウラキツキガイ <i>Codakia paytenorum</i>	II-2-c
2	ニシキウズ科不明	—		ザルガイ科 Cardiidae	
	リュウテン科 Turbinidae		2	リュウキュウザル <i>Regozara flavum</i>	II-2-c
3	ヤコウガイ <i>Turbo marmoratus</i>	I-4-a	3	カワラガイ <i>Fragum unedo</i>	II-2-c
4	ヤコウガイの蓋	I-4-a	4	ザルガイ科不明	—
5	チョウセンサザエ <i>Turbo (Marmarostoma) argyrostomus</i>	I-3-a		シャコガイ科 Tridacnidae	
	オニノツノガイ科 Cerithiidae		5	ヒメシャコ <i>Tridacna crocea</i>	I-2-a
6	オニノツノガイ <i>Cerithium nodulosum</i>	I-2-c	6	ヒレシャコガイ <i>Tridacna squamosa</i>	I-2-c
	ウミニナ科 Batillariidae		7	シャコガイ科不明	
7	イボウミニナ <i>Batillaria zonalis</i>	III-1-c		ニッコウガイ科 Tellinidae	
	ヘタナリ科 Potamididae		8	サメザラ <i>Scutarcopagia scobinata</i>	I-2-c
8	カワアイ <i>Cerithidea (Cerithideopsilla) djadjariensis</i>	III-1-c		マルスダレガイ科 Veneridae	
	スイショウガイ科 Strombidae		9	アラスジケマン <i>Gafrarium tumidum</i>	III-1-c
9	オハグロガイ <i>Strombus (Canarium) ureceus</i>	II-2-c	10	オイノカガミ <i>Bonartemis histrio</i>	II-2-c
10	マガキガイ <i>Strombus (Conomurex) luhuanns</i>	I-2-c	11	ハマグリ的一种 <i>Meretrix sp. cf. lusoria</i>	II-2-c
	タカラガイ科 Cypraeidae		12	ダテオキシジミ <i>Cyclina sp. cf. sinensis</i>	III-1-c
11	ハナビラダカラ <i>Cypraea (Erosaria) annulus</i>	I-1-a	13	二枚貝不明	—
	アッキガイ科 Muricidae				
12	ツノレイシ <i>Mancinella tuberosa</i>	I-3-a			
	ミノムシガイ科 Costellariidae				
13	ミノムシガイ <i>Vexillum balteolatum</i>	II-2-c			
	イモガイ科 Conidae				
14	イモガイ科不明	—			
	ヤマタニシ科 Cyclophoridae				
15	オキナワヤマタニシ <i>Cyclophorus turgidus turgidus</i>	V-8			
	キセルガイ科 Clausiliidae				
16	ツヤギセルガイ <i>Nesiophaedusa praeclara praeclara</i>	V-8			
17	巻貝不明	—			



図版 48 貝類遺体（上：巻貝 下：二枚貝） ※番号は第48・49表と一致

第50表 遺物出土状況一覧(全体)

産地	種類	出土地		総計	
		三門	攪乱		
中国産	青磁	17	20	37	
	白磁	10	19	29	
	青花	11	78	89	
	褐釉陶器	9	20	29	
	色絵	1		1	
	瑠璃釉		1	1	
	三彩		1	1	
タイ産	褐釉陶器	1	5	6	
本土産	磁器	染付		4	4
		色絵		6	6
		磁器	1	2	3
		近代	4	102	106
	陶器	陶器	4	12	16
		近代		2	2
	硬質土器		1	1	
	産地不明磁器		1	1	
沖縄産	施釉陶器	8	164	172	
	初期無釉陶器	1	17	18	
	無釉陶器	3	65	68	
	陶質土器		21	21	
	産地不明陶器	1		1	
	瓦質土器		4	4	
	宮古式土器	1		1	
	産地不明土器	1		1	
	石器		2	2	
	石製品		6	6	
	石材	6	18	24	
	玉		2	2	
	貝製品		2	2	
	漆製品	2	1	3	
	円盤状製品		3	3	
	煙管		2	2	
	銭貨	6	10	16	
	金属製品		4	4	
	鉄製品	18	38	56	
明朝系瓦	軒丸瓦	2	16	18	
	軒平瓦	5	16	21	
	丸瓦	40	249	289	
	平瓦	66	611	677	
	丸平不明瓦	26	144	170	
	漆喰	12	18	30	
	瓦固定用セメント	2	10	12	
	埴	19	79	98	
	碓子		3	3	
	タイル		5	5	
	レンガ		13	13	
	プラスチック製品		1	1	
	ガラス製品		10	10	
	木材片	16	6	22	
	総計	293	1,814	2,107	

第4章 総括

以上、三門地区における発掘調査の成果について遺構、遺物に分けて報告した。本章では再度整理しながら、まとめとする。

1 遺構について

創建当初の建造物として記録に残る三門は、3回の改修を経て戦前まで存在したものの、沖繩戦により焼失した。過去に実施された発掘調査(平成9～13年度)では、石畳や礎石、石列、埋甕の他、三門南側に付属する門廊遺構などが確認されていたが、今回の調査ではあらたに三門基壇に関連する遺構の他、円覚寺の創建に関わる造成の痕跡を確認することができた。

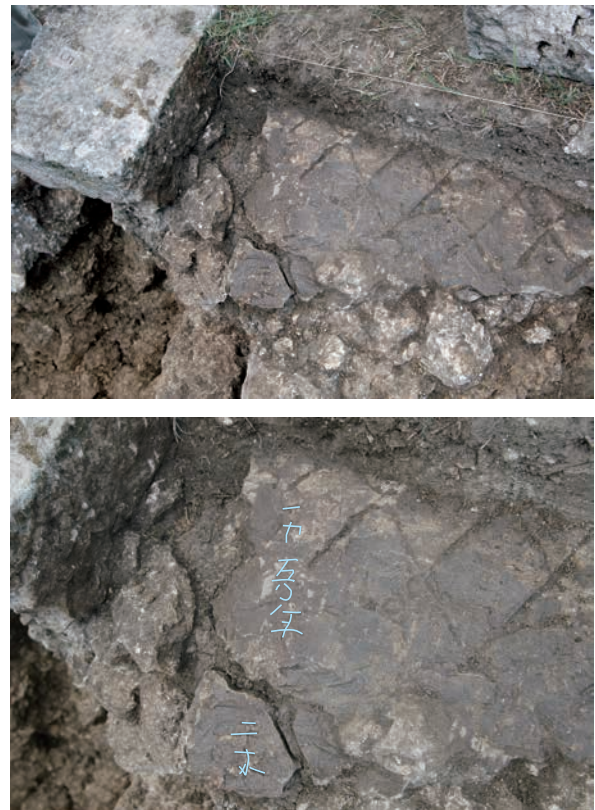
三門基壇

三門基壇に係る石列1及び石積2とともに、柱配置を捉える上で重要な根固め石が発見された。石列1と石積2については検出された位置関係から、三門基壇の西と南縁に相当することが想定され、三門基壇の位置や平面規模に関する基礎資料が得られた。また、複数検出された根固め石の検出位置から想定される柱配置は、古写真にみえる三門の柱配置と一致する。根固め石は直径約1.5～1.8mの円形状を呈し、約2.5m間隔で配置されるが、三門内通路部分にあたる根固め2・3間と根固め6・7間の距離は約3.0mとやや広がっているのが特徴である。この通路部分については、東西方向に伸びる石列2が見つかっている。石列2は放生橋の延長上に位置するなど、三門通路との関連が考えられるが、対となる石列は確認できなかったため、詳細については不明である。

その他、遺構として残る三門礎石、三門階段、基壇遺構(石積2)との遺構レベルや位置関係から基壇高を検討すると、現況の三門階段の蹴上高と踏み面幅の平均値から割り出した13段目は三門礎石の底面と大きな差がないこと、14段目が基壇遺構(石積2)と位置的に一致することが確認された(第28図)。

因みに、13段で整備されていた現況の三門階

段は、11～13段目(上から3段分)はコンクリート製であった(図版10)。これらは新しい段階に整備されたものと想定し、三門調査時にコンクリート製の3段分を取り外したところ、11、12段はやや扁平気味で稜を持つ石灰岩礫に据えられていたが、13段目はコンクリート製の基礎面に据えられていた。さらにコンクリート製の基礎には「1950年」という刻銘が見つかった(第65図)。このことから、上部3段の階段は、琉球大学施設建設時に整備されたものと考えられる。



第65図 1950年銘入り コンクリート基礎

三門関係の遺構

三門の左右には門廊が付属する。南側の門廊については石畳や石列などの遺構が残存している。北側の門廊については、暗渠と考えられる溝状遺構のみ確認された。周辺一帯は広範囲に渡り深く攪乱を受けているため、沖繩戦時に大型の爆弾による破壊を受けた可能性が高い。しかしながら、三門基壇の南東及び北東隅に各1基設置されていた埋甕が、それぞれ原位置のま

ま検出された。これら2基の埋甕の位置と南側の門廊遺構を手掛かりに、北側の門廊について左右対称の位置に図上復元を試み、今回発掘された遺構から想定される三門の規模を示したのが第34図である。

三門遺構の年代については、15世紀～16世紀前半の遺物が出土する造成土に伴うことより、15世紀後半の創建時の遺構と考えられる。

その他の三門に伴う遺構としては、1652年または1697年の三門改修に関連する可能性も考えられる近世期相当の石積5と6が検出された。なお、南側門廊外側(西側)の埋土中からは、明朝系赤色瓦が主体となって出土した状況も確認されており、赤瓦の存在はそのいずれかの改修の痕跡を示すものと考えられる。

さらに瓦溜まりが2基検出された。2基の瓦溜まりは異なる時期に廃棄されたと考えられる。特に19世紀以降の廃棄を示す瓦溜まり2の発見は、文献記録には残らない瓦の葺き替えなどの改修が行われていた可能性が示唆される。

土地造成

瓦葺きで重層構造を持つ三門は、地面に対して非常に大きな比重がかかることが想定でき、三門を支えるための強固な地盤が必要となる。その強固な地盤を形成した造成事業が今回の調査によって明らかになった。

土留めの石積み

最深部で約3mにも及ぶ石積1は、東側からの大量の造成土から発生する大きな土圧を吸収するために地中に築いた土留めの石積と考えられる。また、石積1を補強するような石積2'や、東側からの土圧を二重に吸収するような石積3及び4も検出された。さらに、石積4と繋がる石積2は土留めの機能として巡らせた後に、三門基壇及び三門階段を積み上げたものと考えられる。

造成土

造成土の特徴については層序の項でも触れたが、クチャ塊を多く含む層と粘土層が交互に堆積する傾向があり、粘土層には石灰岩礫を混入するものもある。また、東側から西側へ傾斜し

て堆積しているが、造成土の上部において徐々に水平を意識した調整が施されている。クチャ塊を多く含む層と粘土層を交互に投入することで、排水と地盤の安定を図ったものと考えられる。

三門南側門廊における造成の様相についても、西に傾斜させて土を投入している点や、クチャ塊層と粘土層が交互に積まれる点、造成上部は水平を意識している点など、三門北側と同様の状況が確認された。

次に造成の年代観については、三門北側及び三門南側門廊において、15世紀後半頃までの輸入陶磁器が出土していることより、今回確認された造成土は円覚寺の創建時のものと判断される。

造成の工程

円覚寺における造成の工程について、立地する旧地形の形状、造成の規模と池の配置、土質を手掛かりに記述する。

本地区では一帯の旧地形を復元する目的で、トレンチ7と8を設定し、地山の検出を試みたところ、両トレンチとも地山のクチャを検出し、地山面はトレンチ8でトレンチ7より深いレベルにあることが確認された。この結果は、円覚寺創建前、周辺の地形は首里城を擁する丘陵(南側)と、現県立芸大図書館側(北側)に高まりを持つ凹地であったことを示唆する。しかも不透水層であるクチャを基盤とする性質上、当地は湿地帯か、水はけの悪い土地であったことが考えられる。

この環境下で不安定な粘土質のクチャを造成土とし、寺の西側を低くして放生池を築造するには、事前に池の周辺に造成土を留め、安定させるための強固な石積みが必要となる。しかし、池を囲う石積み1枚のみでは、軟質で膨大な造成土を一時的には留めても、長期的観点からすると、造成した東側からの土圧により、池を囲う石積みがたわんでくることが想像される。そこで、池周辺の石積みを施工する前に、緩衝材の役割を成す土留めを1枚、部分的に補強を兼ねて複数施すことにより、土圧による被害を防いだものと考えられる。この観点で見ると、土留めの石積1が東側にたわむ形状で積み込まれてい

るのは、東側から生ずる造成土の土圧を吸収するための工法であることも考えられる。

遺構から判断される造成の工程は、最初に石積1・2'・3・4を構築し、東側及び門廊箇所には大量の土砂で造成を行う。三門基壇部では、瓦葺きの重厚な三門を支える強固な地盤の形成と放生池側への排水を兼ねて石灰岩礫を投入し、次に基壇の西縁及び三門階段を支える機能を兼ね備えた石積2の構築に至ったと考えられる。

円覚寺は東側から西側の放生池方向へ雨水が流れるよう設計されていることが考えられ、それに伴う東側からの大きな土圧が放生池側へかかることを計算し、その土圧を吸収する土留めを地中に巡らせている。

さらに雨水の流れは、隣接する首里城から円覚寺側へ向かって流れる仕組みが計算されているものと考えられ、首里城を含む周辺一帯の土地利用計画の下、造営された大規模な造成事業がうかがえる。

2 遺物について

発掘調査で出土した遺物は、中国・タイ・日本・沖縄産の陶磁器をはじめ、土器、石製品、貝製品、漆製品、円盤状製品、玉類、金属製品、鉄製品、煙管、銭貨、瓦、塼、石材、ガラス製品、脊椎動物遺体、貝類遺体などが出土している。年代的には15世紀～20世紀代のものである。

主な特徴としては、遺物の多くは攪乱層出土であり、造成土からの出土数は少ないこと、動物骨や貝類などの自然遺物の出土が少ないことが挙げられる。

造成土からの出土遺物として、三門北側の造成土下部からは中国産白磁皿D群、12層からは中国産青花碗、三門造成土では塼I a式(灰色)やタイ産褐釉陶器(メナムノイ窯)、三門南側門廊の造成土からは、中国産青磁碗・皿V類及びVI類や備前産播鉢が出土した。これらの遺物は15世紀～16世紀前半頃と考えられることより、今回確認された造成土は、円覚寺創建時の造成土であり、これらに伴う遺構についても創建時のものと判断される。

陶磁器以外に、三門南側門廊の造成土からは、器物類や建築部材の一部と考えられる漆製品の

破片が検出されている。いずれも形状ははっきりしない。塗膜片については漆の成分分析などについて自然科学分析を行った結果、中国産の漆の成分と近似する結果が出ている。また、2点について使用材同定を行ったところ、1点については落葉広葉樹のヤマグワに同定されている。参考資料として、2014年報告の『円覚寺跡(2)』では、三門北側攪乱層出土の漆が塗布された木材片について樹種同定が行われており、イヌマキ属が得られている。

その他、出土遺物の特徴として、瓦や塼などの建築部材が多いことが挙げられる。また、柱を配置する礎盤も完形で出土するなど、三門の特性を示すような遺物が得られている。これらの出土遺物は、将来計画される三門復元の際、基礎資料となるものである。

3 まとめ

最後に補足と考察を行い、まとめとする。今回調査を行った三門地区の造成土からは、陶磁器の出土は見ても瓦の出土は見られなかった。この理由として、『琉球国由来記』(1703年)には、「広範囲に地ならしを行い、瓦を造って堂宇に葺いた」とする円覚寺伽藍群に関する記載があり、建立に際しては首里城正殿が瓦葺きとなる1670年に先立ち瓦葺きが行われ、最新の土木技術を駆使した事業が行われていたことがわかる。この点からも、円覚寺創建前は首里城周辺でも瓦葺きの建造物が存在しなかった可能性があり、そのため造成土内に瓦が含まれていないことが想定できる。

また、円覚寺、首里城やその近隣には、14世紀以前の遺構や遺物を検出する遺跡が存在するが、円覚寺跡から出土する遺物は15世紀以降に留まる。その理由として、円覚寺創建前の当地が利活用困難な、例えば湿地帯のような地域であったため、人々の立ち入りを阻んでいたことが考えられる。そのような長年にわたって利用に耐えない土地であったことから、それ以前の遺構・遺物の存在を見ることができないと考えられる。

だが、そのような場所において、今回確認された円覚寺の基礎工事とも言える造成の痕跡が

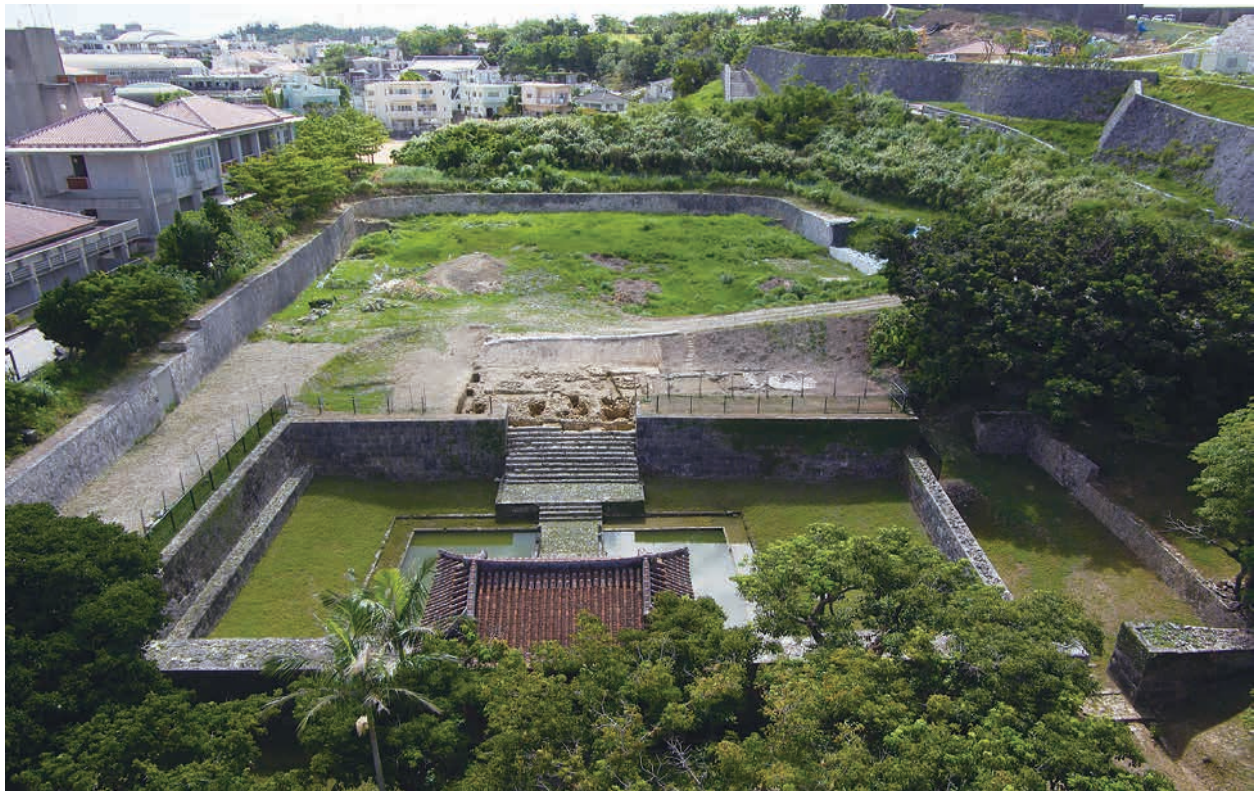
検出されたことは、首里王府には円覚寺が創建される以前から、高度な土木技術を有し、それを計画的かつ短期間で施工可能な技術者集団が存在していた可能性を示した。

円覚寺は記録上1492年の起工で、それからわずか3年を経て竣工したとされる(『中山世譜』)。そもそも、このような大規模事業を完工させるためには、あらかじめ諸々の計画立案が必要となろうが、たとえば三門の完成は1494年で、西に接する放生池及び橋はその4年後の1498年と間隔が短い。この高低差の激しい構造を短期間で施工している状況からも、造成開始までにはすでに境内の青図が完成していたことが考えられる。

今後は、これらの成果をより深めるべく、土木工学、土質力学等の関連分野からの視点も取

り入れ、造成を含めた地ならしから建物構築までの工程を復元する作業を行い、周辺諸国の事例ともあわせ、技術的つながりを確認する必要があると思われる。

発掘調査から見た円覚寺三門は、1495年に完成した後も1588年、1652年、1697年の3回に及ぶ改修の記録が残されるが、改修に際してはその位置は大きく変更されなかったことがうかがえた。さらに地中へ目を向けると、利活用に不便であったと考えられる土地を利用可能に変えた造成技術の一端が明らかになった。このような通常目にはすることができない、縁の下の力持ちともいべき造成技術がなければ、当地に円覚寺は存在していなかったかもしれない。円覚寺を創建可能にした造成事業の全体像の把握は今後の課題である。



第 66 図 円覚寺跡全景 (西から)

引用・参考文献

- 瀬戸哲也 2016 「14～16世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索(2)」『亀井明德氏追悼・貿易陶磁研究等論文集』亀井明德さん追悼文集刊行会
- 瀬戸哲也 2015 「14～16世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」『中近世陶磁器の考古学』第1巻
- 瀬戸哲也 2015 「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』第35号 日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・宮城弘樹・安座間克・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『紀要 沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣 力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理」『紀要 沖縄埋文研究3』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣 力 2003 「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要 沖縄埋文研究1』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 上原 静 2011 「琉球の埴と煉瓦」『南島考古』第30号 沖縄考古学会
- 金武正紀 2004 「沖縄から出土したタイ・ベトナム陶磁」『シンポジウム陶磁器が語る交流—九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器—』東南アジア考古学会
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 沖縄県教育庁 2004 『円覚寺跡基本整備実施計画書』沖縄県教育庁
- 沖縄県教育委員会 2000 『旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書』平成11年度沖縄県史料調査シリーズ第2集 沖縄県文化財調査報告書 第140集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2020 『首里城跡—美福門磴道地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第103集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2019 『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(7)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第102集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016 『首里城跡—銭蔵東地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第80集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015 『首里城跡—銭蔵地区発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第77集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2014 『円覚寺跡(2)—右掖門地区・南側石牆地区の遺構確認調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第70集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『円覚寺跡—遺構確認調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『天界寺跡(Ⅱ)—首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『天界寺跡(Ⅰ)—首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 財団法人沖縄県文化振興会史料編集室 2010 『沖縄県史各論編 第3巻 古琉球』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立博物館・那覇市立壺屋焼物博物館 2011 『琉球陶器の来た道：沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館合同企画展 図録』那覇市歴史博物館 2012 『那覇の神社・寺院～先祖が拝んだ神・仏～』
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 2016 『特別企画展 日本磁器の源流』佐賀県立九州陶磁文化館
- 佐賀県立九州陶磁文化館編 2012 『古伊万里の文様集成』佐賀県立九州陶磁文化館
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 『平成10年度企画展 沖縄のやきもの—南海からの香り—』佐賀県立九州陶磁文化館
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会
- 上原 静 2013 『琉球古瓦の研究』榕樹書林
- 上里隆史 2012 『海の王国・琉球—「海域アジア」屈指の交易国家の実像』洋泉社
- 知名定寛 2008 『琉球弧叢書⑰ 琉球仏教史の研究』榕樹書林
- 早坂優子 2000 『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所編
- 永井久美男編 1996 『日本出土銭総覧 1996年度版』兵庫埋蔵銭調査会
- 鎌倉芳太郎 1982 『沖縄文化の遺宝』(写真)

報 告 書 抄 録

ふりがな	えんかくじあと							
書名	円覚寺跡（3）							
副書名	三門地区の遺構確認調査報告書							
巻次	3							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第107集							
編著者名	金城貴子、仲座久宜、山本正昭							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	令和3(2021)年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えん かく じ あと 円 覚 寺 跡	おきなわけん な ほ し 沖縄県那覇市 しゅりとうのくらしょう 首里当蔵町 2-1	472018	『那覇市 歴史地図』 (1986) 207. 円覚寺	26° 21' 82"	127° 71' 90"	20080710～ 20080829 20090701～ 20090909 20100701～ 20100908 20130701～ 20131001 20160701～ 20160926	589 m ² 平成20年度： 約288 m ² 、 平成21年度： 113 m ² 、 平成22年度： 18.8 m ² 、 平成25年度： 約140 m ² 、 平成28年度： 約30 m ² 、	円覚寺復元整備 に伴う遺構確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
円 覚 寺 跡	寺院跡	グスク時代～近代		根固め石 石積み 石列 溝状遺構 埋甕 集石 瓦溜まり		中国産陶磁器 タイ産陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産陶器 陶質土器、瓦質土器 土器、硬質土器 石器、石製品、石材、玉 貝製品、漆製品 円盤状製品、煙管、銭貨 金属製品、鉄製品 瓦、漆喰、埴、ガラス製品 プラスチック製品、木材 貝類・脊椎動物遺体		三門基壇の石 列や、礎石を配 置する根固め石 を確認した。 また、15世紀 後半頃と考えら れる造成土と、 地中に構築され た土留めの石積 みを検出した。
要 約	<p>三門地区における遺構確認調査の結果、三門基壇の石列が発見された他、礎石を配置する根固め石を確認することができた。これらの遺構は、基壇の位置や規模、三門の柱配置を捉えるうえで、重要な資料である。また、15世紀後半頃の造成土や地中に構築された土留めの石積みが検出され、円覚寺の創建における土地造成に関して重要な知見を得ることができた。その他にも、瓦の葺き替えの際に廃棄されたと考えられる瓦溜まりが2基検出された。2基は時代差があり、中でも瓦溜まり2については19世紀以降と考えられ、文献資料に記録されない三門の改修が行われた可能性が示唆された。</p> <p>出土遺物は中国やタイ、日本、沖縄産などの陶磁器の他、瓦や埴、礎盤などが得られた。これらのうち、瓦や埴、礎盤などの建築部材は、三門復元に際し、基礎資料となるものである。</p>							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第107集

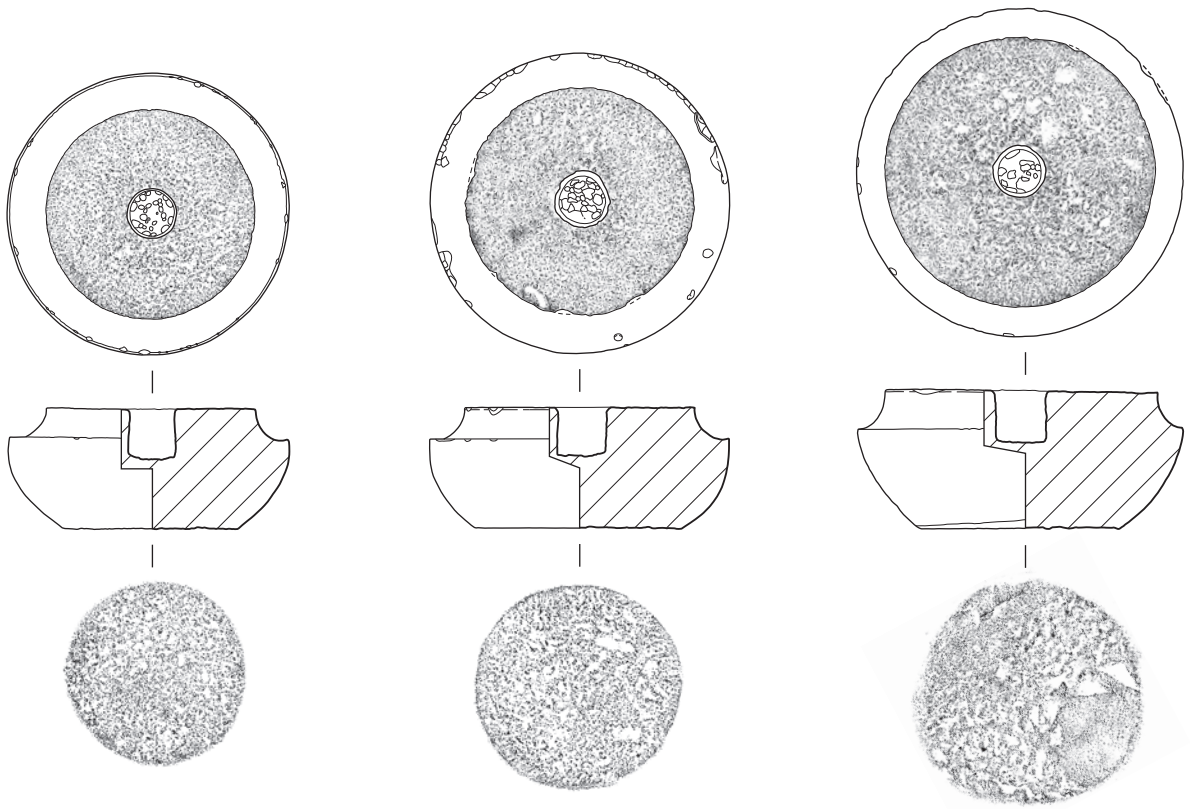
令和3(2021)年 2月 26日発行

円覚寺跡(3)

— 三門地区の遺構確認調査報告書 —

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098 (835) 8751・8752

印刷 大宮印刷
〒905-0011 沖縄県名護市宮里1-2-6-2号
TEL 0980 (52)1607
FAX 0980 (43)7050



表：三門地区遺構平面図
裏：礎盤